

無^ち

花^{はな}

果^く

中

村

春

雨

無^{いち}

花^{はな}

果^く

路加傳第十三章

シロアムの塔たふれて壓死されし十八人はエルサレムに住る凡の人々よりも益りて罪ある者と意ふや、われ爾曹に告ん、然ず、爾曹悔改めずば皆おなじく亡きるべし、又この譬を言り、或人その葡萄園に植おきたる無花果樹ありしが來りて之に果を求めども得ざりければ、其園丁に曰けるは我三年きたりて此無花果樹に果を求めども得ず、之を斫され、何ぞ徒らに地を塞ぐや、園丁こたへけるは、主よ我々の周圍を掘て之に糞するまで今年も容せ、もし果を結ば、善もし結すば後に之を斫るべし。

Or those eighteen, upon whom the tower in Siloam fell, and slew them, think ye that they were Sinners above all men that dwelt in Jerusalem?

I tell you, Nay : but, except ye repent, ye shall all likewise perish.

He spake also this parable; A certain man had a fig tree planted in his vineyard; and he came and sought fruit thereon, and found none.

Then said he unto the dresser of his vineyard, Behold, these three years I come seeking fruit on this fig tree, and find none; cut it down; why cumbereth it the ground?

And he answering said unto him, Lord, let it alone this year also, till I shall dig about it, and dung it:

And if it bear fruit, well: and if not, then after that thou shalt cut it down.

—ST. LUKE, XIII.

(一)

くもぬのみや、しづがふせーや、つひにもれーぬ、うきためしー。ひとくさーの、はなにーひとし、あさの榮達は、夕

にーちらん。

とこしーへのー、さちぞーあるー、このみとのーに、とくきーたれ。清い美しい、中には、吸れた濁み聲も交つ

て、いみじく響渡るオルガンの音につれ、會衆一同、聲の調子を揃へて今讃美歌を唄ひ了つた。その餘波の、空氣の振動が未だ静らないで、隅から隅へと微風のやうにそれを傳へてゐる中に、正面の一段高き説教壇の上に立現はれた一人の男、年紀は三十前後、眉の濃い、眼色の深沈な、小隆い鼻の下には八字髭を蓄へて黒い髪が少し結れてゐるのを、櫛の目を入れて立派に左右へ分け、額際の鬚然として、何處かに斯う浮世の波風と苦戦して來た名残がほの見えて、身には黒のモーニングを着し、襟の、雪の如くに白いのが殊更に目立つやうで、春のスラリとしたなか／＼に恰好が善い。亞米利加から歸立だと思つて見るからして何となう白哲人種の風采をも備へてゐるやう、と見ると、少し遅れ馳に、左手のオルガンの前の腰掛臺から立離れて、さや／＼と衣の裳を曳きたが、徐かに五六級の階段を踏登つて、男の傍に指り並ぶやうに佇んだのは、白い鳥の羽を飾つた晚帽の下から、黄金色の髪を渦巻いてこぼれ出で、色の透通るほど白い、頬邊にほつきり蔷薇色の薄紅を浮べて、露を帯びた葡萄のやうな眼元の愛くるしい、百合の花びらを含んだやうな唇の艶な、そして眞白い衣を肌懸けて、髪を打

つた裳、長々と曳いた立姿の、宛ら天使の天降りしたかとはかり、二人とも揃つて、會衆へ一禮した。

會堂は例の、高い圓天井、雨漏の痕の、雲形を描いたのが、中央に低く吊り下げた花飾の大洋燈の火影でありくと見える。場内には、長い腰掛椅子を廿脚宛、四列に列べて、二階にも恰好に席が設へてある。左右の壁には四角な窓が、幾つも射いてゐて、正面の一段高い説教壇の、後の白壁は幾門形に刻りし如く落り込められ、そこに數脚、安樂椅子が飾つてある。左手の、オルガンを据ゑ付けた方へ片寄つては、七寶焼の大花瓶に、桔梗、刈萱、女郎花その外、檜扇だの、鸚頭だの、紅や白や黄や紫やいろいろな秋の草花がぐたと無造作に活活にしてある。右側には白い布ぎれを懸けた卓子が一脚、上に錫の盆が、同じ細工の水注瓶と、玻璃盃と載せてゐて、中央の脚高の見臺の上に安置してあるのは古びた金縁の聖書一巻。

今夜は新に歸朝して、この牛久教習の牧師の空位を充す事となつた神學士馬宮席之助、及び其新夫人の、惠美耶といへる米國婦人を歓迎する爲めに、且は就任の披露を兼ねた安息日の集會である。會衆は信者、不信者、彌次馬をメめて

合せて殆んど二百以上に出づる事であらう、この會堂始まつて以來斯う云ふ事は、三度とはなかつた。

今、會衆の視線は皆一様に、この新牧師夫婦の上に引附けられて了つて、後に附添うてゐる禿頭の白い長い髭の、洋服の老人や、横に件の大花瓶を背後にして突立つてゐる年紀三十五六の、眼の大きい、疵の深い、色の黒い、例時も顔馴染の、隣區の教會の、中岡牧師の方へは眼も遣らなかつたが、やがて中岡牧師は、屹と姿勢を正して、咳拂して、満座を一脱した。鈴が鳴る、會場内は何となう森とした。

「諸君、此座にお立ちなさつてゐるのが、鳩宮牧師御夫婦の方であります。諸君も略御聞及びでもありませうが、鳩宮牧師は實に今から十年以前、米國へ御渡航になつて彼の地でいろ／＼と辛酸を嘗めて苦學なさつて居られました中に、偶々一夕米利那と申す熱心な牧師の教を聽いて、其場で翻然是迄の罪を悔改めて信者となられ、其牧師の助に依て、遂にエール大學へお入りになり、御勉強の結果神學士の稱號を擲うて、此度日出度く御歸朝になつた次第であります。令夫人は、今の、米利那牧師の愛嬢で、此の方は女子大學を御卒業なさつた、極熱心な信者で

して、かねて海外へ傳道して見たいと云ふ御志願があつたのを幸、米利那牧師も、鳩宮神學士の人物を見込んで、雙方合意の上、彼地で結婚の式を挙げ、此度御同伴なさつたやうな譯であります。どうか諸君も、この御二方を、父とも見、母とも思つて、主のため、福音のために只管御精勵あらん事を希望致します。一寸、御紹介致した次第であります。猶鳩宮牧師が、懺悔話をなさるさうで……何卒、皆さん、御清聴を希ひます。」

聲は爽やかだが、何だか重味のない調子で喋つて退けて、後へ退つて椅子へ着くと鳩宮牧師は更に一同へ日禮して、咳一咳、やをら、説き出さんとした。

(二)

惠美耶夫人は、此時、一寸一同へ日禮して、さや／＼と衣摺の音をさせて、そのしなやかな姿を後の左手の椅子へ凭せかける、中央の椅子には、例の白髭の老人が倚りかゝつて、威儀を繕うて、その嚴めしい眼色の、眼鏡越しにじろじろ、會衆の方を眺めてゐる。

鳩宮牧師は、水注瓶の水を徐かに、玻璃杯に注入れて、一口、唇を濡し衣兜から手巾を取出して一通口邊を拭うた。會衆一同片唾を

呑む、吸拂ひの聲。

「諸君！」と喝破した聲音は凜として、何となく襟元から冷たい水を注ぎ入れられるかのやう。一同は更に衣紋を正した。

「私は只今中阿牧師の御紹介下さつた通り、鳩宮席の助と申すもので、此度米國から歸朝致しまして御教會を牧するやうな事となつたのであります。至つて不才不徳な者でありますから、斯様な重大な任務に果して堪へ得るか、何うだか、竊に自ら危み、且懼れてゐるのであります。併し自分は、主の福音を宣べ傳へるのを終生の天職と信じ、唯この事の爲めに遣はされたといふ一片の信仰を以て、飽くまで遣り貰かうと決心して居る次第でありますから、諸君も何卒、この不肖の身を捨て給はず、弱い處は幾重にもお扶け下さつてお互に協力一致、彼の十字架の旗を高く押し立て、浮世の罪惡と闘ひ、惡魔と戦ひ、最後の勝利を得るまでは斃れて、止まないといふ勇猛心を鼓舞致しまして、『サタナは滅びぬ』の凱歌を奏する日の、一日も早く近づくやうに奮發興起したいと考へてゐるのであります……」

莊重な語氣、眼光是星のやうに輝いて、呢と會衆の方を見廻した。

「ビヤ〜。」と頓狂な叫び聲が、入口の方の片隅の椅子から起つて、聴衆は言合せたやうに、一齊に後へ振返る、何んでもビヤ〜、ホールから出て來たのでもあらう、顔は眞赤にした、廿歳ばかりの書生風の男子、鹽鯖の腐つたやうな、恍乎の眼色で、牧師の方を見上げて、懷手で體をぐら〜揺つてゐるのである。書記は近寄つて「靜かに。」とばかり彼を制した。

「……それで、今晩は始めての事でもあり、何か有益なお話をと、思つたのですが、實は今朝、横濱へ上陸したばかりなので、別に準備する隙もありませんでしたし且これが正當の順序のやうに考へますから、それで先づ第一着に私の懺悔語をして、御挨拶に代へようと思ひますのでお聞かしうはあります。暫らく御清聴を煩はしたいので……」語を切つて、玻璃杯の水を一口、一寸瞬をしたが、眼中には早何となう、暗いやうな影が翳してゐた。

「謹聴々々……」此度は又法外に高い、突抜けたやうな調子で叫んだ。

「貴君、演説會ではないのですから、何卒御靜かに……」と書記は、又近寄つて物表かに制すると、ニタ〜笑つて素直に黙つた。前の長椅子の、六十恰好のげ頭の隠居が、眼鏡越に睨

むやうな眼附で、醇漢の顔をじろ〜見てやがて又くると向直つて見た。

「……實は今から十數年、前の事であります。

……今は、それを口にするのも恥かしくてならんのですが、併し悔改めた今日、その昔の秘密を私一個の胸に抑隠して、斯様な神聖な職に就くのは何うも良心が咎めてならんのですから、それで諸君の前に取て白白するのであります。」

語尾は心から顫へてゐた、白髭の老人も、中阿牧師も言合せたやうに、視線を鳩宮牧師の横顔に凝いだ、東美耶大人は、その美しい顔を少し傾けて、二人の方へ眼を附けて、更に夫の後影を見守つてゐた。

會堂の内は今森として宛ら水を打つたかのやう。例の醇漢は一人合點の「ウム……ウム……」と素りに頷いてゐた。

「第一に懺悔すべき事は、私が青年時代の果敢なき功名心の爲めに、私の一人の姉を犠牲に供した事であります。」云ひ了つて、流石に愁然と伏目になる、一同は更に片唾を呑んだ。

「フーン、それから……」と又例の混ぜツ交しの、圖外れの調子、書記は怪へかねて、逆み寄つて、少し棘々しい口調で、

「貴方酔の醒めるまで、外へ出て居て下さい。」
 「何んだ、生意氣を抜すな、野郎がそんな失敬な事を云ふチウ法があるかい。」と眼に角を立てる。

「皆さんの妨害ですから……」と極めて低い調子。

「生意氣云ふない、之からが感慮だ。ヨウ〜。」と手を舉げて、躍る眞似をして始末に了へない。

(三)

執事が来る。前の椅子の木の頭隠居が立ちかける。二三人ばら〜と寄つて「靜に……」と、醉漢を制した。鳩宮牧師は、やがて、唇を濕し、稍碎けた調子になつて、

「實は、私の親は石州津和野藩の舊士族でありまして、御維新の際流れ渡つて此方へ参つたのですが、その後姉と私とが次々に生まれました……、處が、士族の商法で、なけなしの金は次第に耗つて了ふし、反對に家族の口は殖えるといふ始末で、段々貧困に陥りまして、両親は辛い中から私等二人を漸く育て上げて、とかくして、姉は廿歳、私は十七になつた。其時の事であります。勿論、親の手助をせねばならませぬから、私はその以前から或る役所の給仕に出て、姉は電話交換局へ通うて二人共、

彼かの給料で暮らしてゐたのですが、私は何うもこの歳になつて、一人前の男子が同じ年輩の書記や雇やなどに給仕々々つて、呼び捨てにされて、何だか器械ででもあるやうに、處使はれるのが口惜くつて堪りません。それに月給と云へば、漸く一人口が食へるか食へないか、こんな眞似をして、何になるつもりだらうと、つくづく忌氣が潮しまして、何うか一つ工夫はないものか知らず累りに考へてゐます中、丁度同じ所へ出てゐた書記の田島某といふ男が、判事の試験に及第したのです。これは舊、さる法律學校の出身だといふ事を聞いてゐましたのですが、兎に角、他人が俄に立身出世したのを、現在眼前見たのですから堪りません、私はこの胸が燃えるやうになつたのです。」

「牧師の顔は、その年少時代の血が再び沸立つたのであらうか、今少し赤うなつて、輝いてゐた。」
 「南無阿彌陀佛……」と醉漢は欠伸交り、呆れて取合ふものはなかつた。
 「……その時、私は家へ歸つて唯もう泣きました……、両親は心配しまして、何う云ふ譯かと問ふのですが唯無闇に泣いて泣いて、泣き通してゐたのです。處へ姉が歸つて來まして、宥め

「……その時、私は家へ歸つて唯もう泣きました……、両親は心配しまして、何う云ふ譯かと問ふのですが唯無闇に泣いて泣いて、泣き通してゐたのです。處へ姉が歸つて來まして、宥め

「……その時、私は家へ歸つて唯もう泣きました……、両親は心配しまして、何う云ふ譯かと問ふのですが唯無闇に泣いて泣いて、泣き通してゐたのです。處へ姉が歸つて來まして、宥め

は泣き出します、親父も唯もう思案に暮れてゐたのですが、その中、姉が何と思ひましたか、それは私も賛成だが、學資は幾何、あつたら好いかと聽きますのですから、まあ二三百圓もあればと、大膽な事を話しますと、點頭ましてマア二三日待つて見よと、斯う申すのです……」

牧師は咳一咳した。白髯老人は感に堪へざるものの如く、後から悄然と見上げてゐる。

「何うも胸が迫つて、詳しくお話しする事も出来ませんが……それから三日経つて後姉は家の者へ知らせずと、新橋の某樓へ藝妓奉公に住込んだのです。少しは琴三味線の嗜みもあつたのですから、向にも早速承諾したものと見えまして、私への學資金と、親への食扶持と……諸君、私は罪人です……云はゞ功名心のために、一人の姉を賣つたのです……」いたく激した、顫へた調子で暫く目に手巾を押當ててゐたが、やがて漸く元の姿勢に立直つた。

「今一つ、大なる罪を懺悔せねばなりません。私は、その血の出るやうな學資金で猶、不足を感じたもんですから中途で好い口のあつたのを幸、さる辯護士の事務所へ出て、傍ら勉強を續けてゐたのですが、その辯護士の家に一人の娘がありました。その娘に、私は一時の

煩惱の迷ひからでもありますが、又一つは功名心を遂げようとした野心から、實に云ふも恥づかしい……處女の神聖を汚しました。」

ぶる／＼ツと戰慄した。

「色男」と、醉漢が又遣たので、今度は四五人ばら／＼と立宛つて、罵り狂ふ奴を無理遣、場外へ押出した。一時會衆は動搖さ立つた、鳴の靜まるのを待ち兼ねて、

「私は最早、多くを得云ひませんが、その事が娘の親達へ知れまして、私は其處を放逐される、丁度其時受けました判事試験は失敗つて了ふし、その娘へは養子が取れたといふのを聞いて、何やら彼やら、失望に失望を重ねて、とうとう無茶苦茶に海外へ飛び出しました……諸君、私は實に罪人です……若、基督の救を得なかつたら、地獄の火に焼かれねばならぬ體です……」

胸が迫つたか、言句も續ぎ得ないで、暫し立竄んだ様子が常ならぬので、惠美耶夫人は、愛らしい用を擲めて、する／＼と馳け寄つて、優しく昔から擁抱いて、後の椅子へ連れて行くと、白髯の老人が起上つた。これは監督の植木牧師といふので。

「諸君、讚美歌第十五番を唄うて、後祈禱を致

します」

(四)

牧師館は會堂の裏手の、丁度屋敷町の竝であつて、前面は一帶に杉の生垣、衡門を潛抜けて、斜めに小石を敷詰めた道の突當が玄關口で、二階造の小ダンマリとした家體であるが、暫らく住人の無かつた爲めに、邸内一體に荒れ果て、前栽の植込は木下闇いやうに繁り合ひ、八重葎の宿となつてゐる。朝から人足を儲うて、座敷の掃除、植木の手入れ、雜草の刈拂に取掛らせ、やがて夕方になつて、一先、雜と形附いたので、娘當席之助は己が書齋と定めた八疊の座敷の、縁側に、籐編の肘掛椅子を据えてホツと一息、吐息を吐いた。

書齋の飾り附は、朝から自分が手一つで、取掛つて汗の出る程廻つて、書物箱なんかの重さうなのは、惠美耶に手傳はせて、二人で持運び、漸く心ゆくやうにしつらへ了つたのである。

先づ床の間には、ラファエルの名畫を模した、それも米國で當時有名な畫家の筆に成つた耶蘇昇天の、大幅の油畫を掲げ、その隣には五重に仕切つた玻璃戸の書棚を置き、金文字入の洋書が、背を揃へて、規則正しく飾られてゐる。下の壁には、自分等夫婦の肖像畫が、惠美耶の

手細工に成つたものであらうか、精巧に毛糸で編み出した薔薇の花の、飾縁の中へ嵌めて掛けられてある。古畳の上には花紋の綴通を敷詰めて、障子の代りに、角の西洋家具屋から、玻璃戸を取寄せ、緑色の紗の窓簾を掛けて、卓の上には、鴉ペンの、白い羽根が筆筒の上に挿んで目立つてゐる。床柱に掛けた一輪挿しの、竹細工の釣花瓶には白百合の花が、匂をこぼしてゐた。

「私の室も、漸と形附ましたのでありますよ、もう卓据ゑるばかりでございます。」

聲を掛けながら、後の鶴居際の、帷幕を舉げて、顔を出す惠美耶の方へ振返つて、

「左様か、そりやア何うも御苦勞だつたね、まア此處へ来て、少時、休息したら何うだね。」

立宛つて、片隅の安樂椅子へ手を遣ると、早くも惠美耶は駈け入つて、夫がその傍へ列べてくれた椅子の上へ、欣然と倚りかゝつて、笑みかけながら、

「あの、私の日本語、日本人が聴くと可笑いでありますかね、思ふ事、向の人に分明りませんか。」

少し顔を赤らめて問ひかける。手には造り花の白い薔薇を、寶石入の、黄金の指環の燦めく

指頭でいぢくつてゐた。

「何アに、そんな事はないよ汝米國に居る中から學び始めて、五六年の間熱心に遣つてたんだもの、なか／＼旨いよ、誰にだつて、分らない事はないから、構はず遣るが善いさ。少しは破格だつても、その中、漸々直つて来るからね。」

「私、良君が、日本へ行つたら日本語ばかり使ふよろしいと仰りましたから、それで可成左様してゐますが、外の日本人、解るまいか思ひましてね……」

「何アに、そんな氣苦勞をしなくても大丈夫、大威張さ。」

「氣苦勞つて……何アに。」解せぬ様子で、美しい顔を少し傾けて、席之助を振仰いだ。

「氣苦勞か……ハ、ハ、こりやア未だ分らんかつたんだね。氣苦勞と云ふのは左様さ、心配の事よ、心配しなくつても好いと云ふんさ。」

「左様……ぢやア分りました、氣苦勞、心配……心配氣苦勞……」伏日になつて、無心に白薔薇の花を嗅いで見ながらしきりと小聲で口の中で繰返して、それをも記憶に留めんとする風情、その無邪氣な容貌が何となう最愛うてならぬ。

年紀は未だ廿一と云ふに、遙々千里の波濤を越えて、何んな苦勞をも一緒にとばかり、男々し

い中に、いちらしい心根の、思ひやればやる程いとせめて、感謝の情が胸に溢れて来る。席之助は暫し我を忘れて、天使のやうな惠美耶の顔を憶々と打すつてゐた。黄金の絲の如き鬚の毛が二筋三筋、象牙細工よりも白いその首領へほつれかゝつて、折からの微風に搖々と月を碎いて、連の這ひかゝるがやう。

(五)

芭蕉の葉が風の嘯きに、二度三度、傾いたかと思ふ間に、雨蛙が一つ、捲り落されてびよこりと飛んで、縁側へ落ちた。惠美耶は偶然、それに眼を遣つて暫くは小動物の動靜を窺うてゐたが、やがて笑むやうな眼色で、振仰いで夫を見ると、端なく夫の此方を見てゐる視線と衝突した。席之助も軽く笑ひながら、突拍子なく口調で、

「併し、惠美耶さん、米國とは萬事が違つてゐるから、思つたよりは餘程、不自由な事も、窮屈な事もあるだらうし、當分は少と困るだらうよ。まアその中、慣れて了つたら左程にもあるまいけどもな。」

「そりやア私、心得て居るのでありますから、何とも思ひません、神様と良君と二人私頼みにしてゐます。」

相不變笑んでゐる。眼元の瑞々と愛嬌満ちるばかり。そして何處となう凜とした勝氣な相がほの見える。

「何しろ當分は辛からうが、まあ呢と我慢するさ……汝の父さんも云はれたやうに日本へ來たら日本の風俗——習慣に従ふやうにせぬと、神様の福音を傳へて行くに都合の好くない事があるから、食物も日本の食物を食べ、住居も日本流にやらねばならないのだが、汝はまだ慣れてゐないのだから、それ等は漸次に、左様する事として先づ第一に會話それから、信者、未信者に應對する時だね。——應對つて、分らないだらうが、結局、日本人と交際して行く際になんか、最も氣を注げにやアならないんだよ。」

「私、良君の命令なさる通り、遣つて行かうと思ふのであります。」

と素直に、少し俯向加減である、兩蛙は又びよこり、芭蕉の葉に飛び乗つて、低く高く二度三度上下へ搖いだ。ホザナよホザナよと呼び出しさうな姿勢で。

「それから經濟の事だね。家の月々の費用の事だね。これも一應心得て置いて貰はにやアならないんだが、牧師といふと、米國では随分澤山な月給も取れるのだが、日本では左様云ふ譯に

行かない、殊にこの教會は、獨立で造つてゐて、信者の寄附金の中から月給も支拂ふやうな事になつてゐるので當分の間は、三十圓より以上は出せないといふんだ、勿論自分等のは、月給を目的の仕事とは譯が違ふんだから、兎に角この教會の財政の困難な……金の無い苦しい中から、それほど報酬を貰へば、結構だとして、喜んで受けねばならないんさ。」

「そりやアね……左様でありますとも」と微かに頷いてゐる。

「米國を發つ時も、汝の父さんが何彼の費用にと云つて何千弗か御贈り下さらうとしたのを、私が堅く謝絶つて、僅か、當分の食扶持丈しか頂いて來なかつたやうな次第だから、勿論贅澤な暮は出來ないし、料理番を置き、その上婢を置くといふやうな氣儘な事はやれないんだ。」

「料理番も、婢も、そんなもの入りません。私一人で遣るあります。」と牝鹿のやうな優しい眼で媚げるやうに、又決心を囁やくやうに、吃と夫の顔を見上げた。

「だつても、汝一人でそんな事が……第一、先生の可愛いお嬢さんに、そんな事をさせちゃア濟まないから、料理番大置いて、婢は置

かない事にせう。」

「否、私遣るあります。父さんもその事、何時も云はれたであります。料理番なんか置かないやうにするよろしいつてね、それで私、平常、家でも庖厨の方の事、手傳うたのでありますよ。」

「左様……そりやア兎に角、考へ物だが……」と、唐之助はくるりと惠美耶の方へ横向になつて、椅子の一方の、脇掛へ兩脇免せ頼み突き、頭をその上に据ゑて、思案しながら側と仰くと、向屋敷の櫛の大木の枝越に、夕づつの光が淡く海のやうな蒼空に浮んでゐた。

「もう暮れるな。裏角の、西洋料理から未だ持つて來ないのかい。先刻左様言附けて置いたのだが……」

「私、行つて來ますかね。」

「何アに、そんな事をしなくても……汝が走り使をしなくつても……別に急ぎはしないんだからね。唯、日が暮れたら新橋へ行つて、姉の行方を捜さうと思つて……姉の行方が分つたら、兩親の事も知れるだらうと思ふんさ……」流石に稍愁色を帯びてゐる。

「あの、良君の親さんや、姉さんに、私早う逢ひ度でありますよ……私、米國人だから、嫌

はれる事ありますまいかね。」何だか心細さうに、夫の顔を差覗く。

「そんな事が……米國人だつて、日本人だつて、同じ神様の子なんだから、そんな事がハ、ハ、ハ」と、事もなげに笑つて、髭を捻つて、再び空を仰いだ。

芭蕉の葉では、雨蛙が雨を呼ぶのか、今聲高に鳴き出した、ホザナよ、ホザナよ、主の名に依りて来るものは福なりと叫ぶやうにも、聞かされる。

惠美耶は何となく浮立たない顔色であつたが、何時しか、つい、その蛙の聲に引き入れられて了つてそれを自然の音楽とでも思ふのか。

キリストのみにあるべきか——、いな、世はたれも十字架あり。むかしのとも主とともに、十字架おひてぞしたがへる——。

始めは極めて低音で、やがて悲愴な、美しい聲音を張上げて、神を讃美の唱歌を始めた。星の光は今花やかに、ベツレヘムの昔のまに輝いてゐる。

(六)

麴町上六番町と聞いて来たを心當に、鳩宮唐之助は辻車を乗り捨て、角から一軒一軒、家々の表札を讀んで、足もそゝろに歩んで行く

中、偶と、大理石の門構に定紋附の鐵柵を設け、扇形に白い御影石を敷詰めた、手廣い邸宅の前に來かゝつた。何心なく見るとなしに見上げると、陶器の表札に、田島保衛としてある。さてはこれが自分の尋ねる人の家であるか。東洋銀行の支配人と云ふのだから、まさか、長家にも居まい位に考へて來たのが、之は又、あまり贅澤過ぎた住居である。破風造りの玄關口の、外よりは見透されぬやう大きな蘇鐵を植ゑ込んで、内庭の周圍には、錐形の樺木が列んで、その根柢を蔽ふ芝生の青々と、毛氈を擡げたやうな中に、折れ曲つた巾廣の一條の通路には綺麗に多摩川砂利が敷詰めてある。

唐之助は暫し門前で躊躇うてゐたが、やがて我が身の邊を見返りながら、何となう肩身の狭さうに、足の運びもたど／＼しく、中へ入つて行つた。一張羅のモーニングを着てはゐるのだが、海上二ヶ月の航海に大分汚れ日が見えて、少しは汗臭い、靴も甚だ新しからず、帽子も稍古びて、此の門を潜るにはあまり見すばらしい、我が身姿に不覺、心懸したのであらうか。

暫くして玄關口から案内を乞ふと間もなく、「ハイ……こと應へて取次に出たのは、十六七の、色の小白い、丸ぼちやの、春のずんぐりした小

間使らしい女、此方の風體を一目見るより、高慢臭さうに、一寸形ばかりの御釋して、

「あの、何方様で……」

「一寸御主人に御目にかゝりたいのですが……」

御在宅でありますか。」

名刺を差出すと、彼の女は凝と見て、銀釵の脚で、鳥田詰の中をゴシゴシ振きながら、

「ハイ……あの……一寸……と曖昧に言葉

を濁し、「少しお待ちなすつて。」云ひ捨て、奥の方へ入つて行つた。

唐之助は茫然として、俟つ事二三分間、足音が聞える。

「あの、何卒此方へ御通りなすつて……」此度は少し笑顔で云つて、前とは打つて變つて叩頭

も丁度である。

「それぢやア御免下さい。」破れ靴を根布川の靴脱石の上に脱ぎ捨て、案内に連れて、一室の内へ導引れた。

やがて與へられた絹更紗の櫛の上に、尻の据り工合を氣にしてゐると、横手の一枚丈明け放

してあつた襖の蔭から、つと顔を出したのは、色の小白い、ばつちりと眼元の涼やかな、大丸

髭に結うた奥様姿、漸と此方を見てゐたが、

「まあ唐さんかい……汝は何うしてたんだね

え。」と忽ち驚きと喜びの込み上げたおろろ聲で、飛び附くやうに駆け寄つて亂次なく、衣物の裾を蹴返しながら座に就いた、庸之助は周章で、梅を這つて、兩手を支へ、

「姉さんですか……」云つた切り、しげしげと顔を見詰めて涙も出ない。

「汝、眞に何うしてんだねえ……私等は何んなに心配してたか知れないよ……」顔へ聲で漸く云つて桃色の手巾を眸に押當て、早鳴咽泣してゐる。片手は疊に落して、打慄へる體を支へてゐたので、

「何とも、早申譯はありません、姉さん、これまでの事は何卒御免し下さい……」いとどしく涙含んだ調子で、疊の上に眼を落した。

「許すも許さないも……そんな事は何うでも好いけれどもね、眞に生きてるか死んでるか、何うしたんだらうと思つてね……まあ、まあ、健全で居たのが何より……お父さんもお母さんも此家に御居なさるんだからね、喜ばせて上げようよ。」

鼻汁打かみながら、滋味ある眼元に、希望の光を湛へて、いそ／＼轉ぶやうに駆け出た。以前の女が茶器を運ぶ、菓子を選ぶ、煙草盆を持て来る、三つ指のいと丁寧に、小笠原流といふ

ので。

庸之助は唯腕を交いて、思案に沈んでゐた。

(七)

「あの、庸かい。まあ、眞實に……汝は善う無事でゐてくれたなう。」

母は轉げ込むやうに入つて来て、いきなり庸之助の前へひたと坐つた。嬉しさに涙も出ぬ。夢かとばかり一心に顔を見詰めて氣もそぞろである。

「誠に何うも……少し退つて、挨拶をしようとする、

「庸かい。まあ……眞實だ、眞實だ……眞實に歸つて來たなう……」開覺えある父の聲。その方を振向くと、後には姉が附添うて入つて來た。先づ胸打たれたのは、兩親とも、早、頭が白髪になつてゐたのである。

「誠に何うも……」外に何と言葉もない。

水入ずの親同胞の中に取圍まれて、何だかもう生ながら天國へ昇つたかのやう、暫くは別と思案も浮ばなかつた。

やがて、姉は咳拂しながら、「外國へ行くといふ消書をした限で、其後何とも云つて寄越ないもんだから、生きてるか死んでるか、少とも判然やアせず、眞に皆、心配ばかりしてたんだ

よ。」と、いとど涙りがちな調子である。

「何處で……何處に、今まで居たのかい。庸、無事で居るのなら眞實に、少たア親兄弟の氣も察して手紙の一つ位寄越しさうなもんだ。」一體、氣丈の母親も老ては愚に返りがちの叱言を云ふ。

「否、何とも申譯はありません、實は亞米利加に居ましたので……その後、手紙を出しましたのですが、御住處が不明で附箋して返つて來ましたやうな事で。」

父は元來お人よしの氣も弱く涙を拭いて、又しても後からこぼれて出るのを袂の端で押拭うて、

「まあ、無事なのが何よりだ……こんな嬉しい事はない……」

「私も早速貴方等に逢ふ事が出来まして、こんな嬉しい事はありません。實は昨晩新橋の、元、姉さんが御奉公なすつていらした家へ尋ねて行つて聴きますと、何でも此方へ御居になつてると云ふやうな事なので、それで今朝伺ひましたのです。」

「姉も此家の、奥様に出世してなう、我等まで御厄介になつてゐるのだよ。」と、父は又しても鼻汁を吸上る。

「保衛さんへ御挨拶するが善からう、元へ汝と同じ役所に書記をして居なさつた事があるんだとさ。今は大そう御立身なさつて、こんな身分にお成りなのだが。縁といふものは妙なもので……」母親は眼を眞赤にして、我子の顔を懐かしさうに見詰めながら斯う云ふのである。

「ハア……何うも妙なもんですね。」庸之助も謂不知感に打たれて、額の邊を撫でてゐる。不意に後から、

「庸さん、お歸りだつたさうだね。」

高やかな調子で呼びかけて、入つて来たのは薄い髭のある、色の淺黒い、顔の圓い、金縁の眼鏡を光らせた三十八九の男盛。絳羅紗のモーニングを着て、襟飾に寶石を鑲めた、でつぷり、麥酒樽を呑んだと云ふ風な肥満な體格の紳士である。

「御久しぶりでございます。姉を始め、親共はいろ／＼……」叩頭するを避けて、

「まあ、それは後からにして、奥へ通り給へ、僕も未だ出勤時間には一時間も間があるんだから彼方で繰くり話を聴うちやアないか。お柳、座敷の方へ連れて行くが好い、こんな處ちやア失禮だ。庸之助君、さア彼方へ通り給へ、彼方へ……」

極めて快調な人を外らさぬと云ふ調子。姉もこれでは彼方へ……と言葉を添へる。

勸めらるゝまゝに、やがて座敷へ通ると、其處は十二疊も敷かれさうな一室を、一切西洋風に飾り附けて、花鳥を透紙に織り出した薄緑の窓紙で朝日を遮つて、萌黄地に黒で輪子形を置いた絨毯を敷き詰め、銀の留針で角々を留めてある。中央には一脚の、朱檀の卓を据えて、里昂織の精巧な琥珀細子の、周回に流蘇の下つた卓掛を掛け、銀の花瓶に、色珍らしい西洋種の草花が挿し込んである。相間の懸額には、歐米各國の金饌の肖像畫で持ち切つてゐる。

其卓を圍んで、五人の椅子が据えられた、庭に面した方の戸はわざと明け放つてある。これも洋風の庭の、楕圓形の池の中に、希臘古代の神の銅像が立つて、その跨つてゐる天馬の口から虚空に向つて水銀を噴き出すやうな噴水が自淺もので、之を見てくれといはねばかりである。

(八)

後や先になり勝の話が、兎に角一段落済むのを待ち兼ね、保衛はチョコレート餘汁を啜つて、口邊を拭いて、

「ちやア、君は牧師をしてるんだね、フーム十年も苦學して來て牧師をしてるんだね。」何

だか輕蔑するやうな、又怪むやうな語氣である。

「左様であります、今の次第で、牛込教會を牧する事となりましたので……」

「月給は君幾何取れるんだね。」無作法に問ひ懸けると、庸之助は少し浮かぬ調子で、

「月給と云うて別に、結局、月給の爲めに遣つてゐるのでは無いですから……」

「フーム、それは左様だ。それ位の心掛で無くちやアなか／＼遣れない事だが、併、折角、外國で十年も學問して來て、それを實際に活用しなくつちやア駄目だらうちやアないか。今日は、西洋で新知識を得て來た人を社會が大に要求してるんだからね。」

「汝、牧師つて……」思だねえ、耶穌なんだらう。

「耶穌やなんかになつて……」姉は悉はしさうな眼色で、庸之助をしげ／＼と見てゐる。

「エ、ちやア、その牧師つてえのは耶穌かい。庸、耶穌かい。そんな汝……そんな事をしてちやア、保衛さんのお顔に懸るよ、保衛さんの。何だか勿體ないけれど、汝は、義理の弟とも云ふべきものがそんな事をしてちやアいけな

い……そして、その今の娘を連れて來たつてえのは、矢張耶穌の方の女だな。庸、確り云うて

「聴かせてくれい。」と母は呆れた顔をして、キボキボと見詰めてゐる。

「耶蘇やなんか……眞實に、碌でもない。」と父も心配さう。

「耶蘇だからと云つて、決して左様御氣遣なさる程の事ぢやありませんです。今の、先生の嬢さんの事に就きましては、一寸申残したのですが、實は米國で結婚の式を済ませて、公然私の妻として連れて歸つたのでございますから……いづれ御紹介を致しますが……」

「エッ……庸さん、あの汝、本氣で云つてののかい。先生の嬢さんだつて。それぢやア異人の嬢なんだらう。」姉は二度吃驚。

「無論、亞米利加人です。」

「庸、汝は氣でも狂つたのかい。」と父は呆れ顔。

「眞に汝、本氣なのかい、耶蘇なんかになつた上に、毛唐人を女房に持つなんて、そんな情無い事を……眞に、そんな情無い毛唐人なんかを汝。」母はおろ／＼涙聲である。

「君、それはまア兎に角、その牧師の方丈は廢止たら何うだね。折角銀行の方でも外國譯に人が無くつて今弱つてゐる處だから、君が其方へでも来てくれりやア、最初に六十圓は出す。賞與を合せると平均百圓以上には屹となるから、何

うだね、牧師なんか廢止了つちやア……」

「折角の何ですが……」と極めて冷淡である。

「コラ、庸之助、折角、保衛さんがア、親切に云つて下さるものを、そんな失禮な御挨拶をする」と云ふ事があるもんかい。第一、心得違ひ、

異人の嬢を……毛唐人の嬢なんかを女房に持つなんて眞に馬鹿馬鹿しうて、人様へお話もならぬ……保衛さん何卒一つ説得して下さいやう母が一生のお願ひで御座います。」

「眞に何卒……庸、何と云ふ氣でゐるのだ……」

汝は一體、何う云ふ氣なんだらう。之までさんざん人に苦勞を懸けといて、折角歸つて來たかと思やア、又一層心痛をさせる。汝、何う云ふ氣心でゐるのかい。」父も涙の目で庸之助を窺てゐるので。

「左様云はれると、實に私も困るんですが、牧師といへば結局、人の靈を救ふのが役目で、極尊い職分なんです。月給が少いからつてそんな

な、月給やなんかで人の價値は定まるものぢやアありませんから何卒そんな事は御心配下さらぬやう……そして又、今の、外國婦人を女房にしましたからつて、矢張同じ人間同士なんですもの、少とも構はないぢやアありませんか。大臣や公使方にも随分その例はあります。世界の

人間は皆兄弟なんですから亞米利加人でも、英吉利人でも縁さへありやア夫婦にもなりませう。何にも不思議な事はありません。」屹張とした口調である。

少し氣に喰はぬといふ顔附をして黙つて、控へてゐた保衛は此時、弗と苦笑しながら、「……理窟を云やアまアそんなものだが……」と嘗めたやうな調子。

「併し庸さん、汝はそんな存氣な事を云つてお居だが、あのほら、汝と關係のあつた岸野の嬢さんは、汝が彼方へ行つた後で、何んでも駕差子を殺しちやつて監獄へ入つたといふ事だよ……そして監獄の中で汝の胤を産み落したとか云ふ噂も聞いたんだよ。」と姉のお柳は眼縁を赤らめて云つた。

「エッ……」とばかり、庸之助は打驚いて、見る見る顔色を變へた。

父の修造も、母のお節も顔きながら、「ウム左様々々、何んでもあのお澤さんは可哀さうな目に逢つてるといふ事だ。それに汝は異人なんか女房にして、づう／＼しく夫婦氣取で居るなんて、罰が當らうよ。」と母は入齒を噛緊めた。庸之助は今全く死人のやうな顔色をして、わな／＼唯慄慄へてゐる。

(九)

憧れし戀には敗れ、功名の梯は攀ち損つて、
 遺溺なき満腔の不平洩らすに地なく、癒え難き
 心の瘡を裹んで、無茶苦茶に海外へ飛出して
 行つたのは未だ青春の血の、稍もすれば焰とな
 つて燃え上るやうな頃であつたが、ゆくりなく
 も基督の福音を聴せられて、身はこれ述べる小
 羊、闇から闇へとさまよひ行きつゝあるのを牧
 者の角笛が遙に我を呼んでゐるのに始めて氣が
 附いたやう。眼が醒めて見ると浮世の常も響
 も、夕やけ雲の暫らく人目を眩する假の彩た
 るに過ぎない。ソロモンの榮華の究極の時もそ
 の粧、野の百合の花に若ざりし事を思へば、
 従前の果敢ない頼みにならぬ事を頼みにして、
 夢幻の影を捉へ、風の後を追駈んとしてゐた
 のがつく／＼恥かしくもある、口惜くもある。
 罪の身が空しくもなつて來たが、唯、一旦の
 悔改めには、千百の罪障も消えて了つて、雪
 の如く白く潔い體になられるとの、大慈悲の
 誓を只管に信じ切つて、今も猶誘惑の惡魔には
 喉かされ易き人の子の心弱さを恥る中にも、
 自ら願禱と平和の泉の絶えず流るゝを感謝し
 てゐた次第である、これは又思ひも懸けぬそ
 の昔の戀人が、今は早運命の波のまに／＼身

を任せて人妻となつて、定めて一家團樂の樂し
 い夢に酔うてゐるのであらう、又然あり度もの
 だ、又然あらせ度ものだと思つて信じて、取て
 疑はなかつたのが而も全然裏反で、あらう事か
 それが夫殺しの大罪を犯し、又自分の昔の罪
 の胤を産落したと聞ては最早、驚愕といふ度を
 越して、何やら彼やら陸張譯が分らなくなつた。
 鳩宮庸之助はその夜、床の中で、悶搔足掻いて
 幾度枕を落したか知れなかつたので。
 常時の起る時刻になると、惠美耶は床から出
 てしどけなき寝巻姿を掻い繕ひながら、
 「良君、起きませんの……御氣分如何あります
 かね。」
 庸之助は答もせず、寢返をした。
 「良君、いけませんのありますかね。良君……」
 息の香の頬に通ひ、顔の熱りの耳に感ずるほど
 に近く、惠美耶は夫の面を覗ひ寄つて、優し
 う左も心配さうに尋ねるのである。
 「も少し、……も少し寝てゐる。もう、氣分は
 好い。」
 口重たげに云ふ。
 「御氣分は好いのでありますかね。」と稍安堵した
 やうな顔色。
 「ア、好いから、汝はもう……汝は彼方へ

行つて朝の支度したら好からう。」
 「それぢやアあの、米焚いて見ますのあります
 よ。ホ、ホ、何んな米……飯になるのでありま
 すか。ホ、ホ、」無邪氣に微笑みながら、や
 がて戸を明けて、徐かに閉めて出て行つた。
 後で庸之助は、胸の底から出るやうな太息を
 弗と吐いて、「ア、基督の救……」と呟いた。
 今、庸之助は實に大なる疑問に出會せたので
 ある。基督の救は自己の悔改めと共に、従前
 の罪障一切を消滅して、柱に打つた釘の痕まで
 も残りなく、拭ひ去つて了ふとの誓ひでもある
 し、又自分もそれを左様と堅く信じて疑はなかつ
 したのであるに、今事實はそれに反對の證據
 を擧げてゐるではないか、自分は一旦の悔改め
 と共に、生れ變つた人間となつて、身に犯せる
 罪は、最早基督の十字架に懸けて亡してしまひ、
 新に神の御名の下に立てる一の使徒として、眞
 理の爲め、聖靈の爲め、福音の爲め、飽までも
 奮闘血戰するの榮冠を戴く身だと、それを誇
 にしてゐたものを、而も皆悉く根柢から覆へ
 されて、自分が十年以前、處女の神聖を犯した
 其罪惡の種は、芽ぐみ、育ち、枝を延べ、葉を
 茂らせて、天空の鳥それに巢喰ふといふ芥子種
 の譬をその儘、夫殺しの大罪人を作り私生兒

を産ませたと聞くに至つては、依然たる當年の罪人、否將に、天火に燒き盡さるゝにも當るべき極悪非道の行爲を働いた事になるのだ、自分は成程一旦悔い改めたには相違ないが、それは處女とらの神聖しんせいを犯したと云ふ事の悔改めなので、夫殺しの大罪人を作り、私生兒の父となつた事に就いてはまだ悔改めはしなかつた。否悔改めたと云ふ丈で、神の前に聴納しんねつられる譯には行かないのだ。思へばこの大罪人、牧師などとは實に恥入つた次第だ。この地獄の火に投げ入れらるべきもの、牧師などとは……

身悶みもだえして、危く寢臺ねだいから轉落ちんとした時丁度、戸を明けて、惠美耶、

「良君、祈禱きとの時間ありますよ」

(十)

常時は、自分が先づ祈禱きとの口を開いて、一天の父よ、冀ねがくは今日一日の糧けうを與へ給へ。世の罪惡と戦つて勝を得せしめ給へ。一日の職を了つて後平安に安息の床に入らしめ給へアーメン。」と祈るのが例であるが、今朝は惠美耶一人に祈せて竊ひそかに自分の胸を打つて、

「神よ、罪人なる我を救し給へ。」とばかりも口の中である。そして讚美歌の聲もいとゞしく顫ふるへてゐた。

思ひの外、半熟はんじくにもならないで、兎にも角にも出来上つた飯の、少し柔過ぎはするが、齒に障らぬのをせめてもの誇り顔。手際の程を褒めて貰ひたさうに、一ぱい茶碗ちわんへ盛つて、

「良君、飯出来たのありますか。食べて見て下さつて……」と笑顔である。

「フム……と餌くばかりで、箸を取上げるのも懶さうに見えるので惠美耶は、俄かに少し眉を擡めて、

「良君、何うも御氣分善くありませんでござい
ますか……今朝、醫者を呼ぶよろしいぢやありませんか。」

「否……そんなにもないよ。」と如何にも氣の進まぬ様子、血色が何うも好くない、眼色も沈んで何となく眉先が妻けてゐる。

「何うも私、心配でなりませんのあります……

良君、眞に神様の爲め働く體ありますから、何卒氣を附けて下さい、私も、良君と、神様と依頼にして、知らぬ處に來て居るのありますから、今良君に飛んだ事ありますと、私何うなる事か、神様は私の目に見えませぬから、良君と別れるやうな事あると私……」つくづく心細さうに、少し涙含んで羞俯向いた。髪かみのほつれ毛が微かに慄ふるへてゐる。

「そんな心配は入らない、……何アに少し散歩して來たら直癒る。」惠美耶の横顔を見やつて、さすが慰めるやうに云つて、何だか心落おち居ぬ素振である。惠美耶は偶然振仰いで、

「あの、昨日は善くお話聞きましたでしたが、親御さんや、姉さんやの御住居の處判然つた云ふのありましたね。私、連れて行つては悪いのありますかね。私お嫌ひなさるのありますかね。」と今更心ありげに問ふのである。

「否、別に、……何アに左様急がなくていいぢやアないか。」

「だけでも、お父さん左様仰やつてでありました。日本へ行つたら、良君の親御さんや、御兄弟を大切にするよろしいつて……」

「ウム、いづれその……」如何にも煮え切らぬ返事。

「あの良君、親さんや姉さんへ會ひにお行きなさつてから御氣分悪くなつたのでありますから、私何うも……」その纖弱せんじやくい白い手をひたと乳の邊りに押當て、斜めに食卓の上を見詰めた。

「その……そんな事は氣にしないが好い……決してそんな事ぢやアないんだから。」と周章しうしやうでたやうに押宥めるのである。

「左様ね。」と惠美耶の眼は閃いて、席之助の顔を見上げてゐたが、忽ちその惻然と云ふ眼光の中に、電の如く、一の暗い影の跳動るのが見えた。

「あの……あの……お澤さんて……昔の事云うて良君を責めるので決してありませんが、あの澤さんいふのは、人と結婚してお在なさるのでございますね。」

一句胸を刺されて席之助は肉の顫く思ひ。

「そ……それが何うしたつて。」

「イヤ、つい、その……ホ、ハ、何んでもありませんのございます。」片頬に笑靨印け、今更氣の毒な事を口走つたと悔むやうな顔色で、眼元に涙を湛へてゐる。

席之助は何氣なげに、顔を撫でて、天井の方を見たり、何かにしてゐる。

「良君、怒りなかつたのありませんか……」

「馬鹿な……そんな事が……兎に角飯を遣つたが好い。」と故更平氣を糺してゐる。

兎角して、惠美耶が折角の心盡し、箸の持ち様を教へられて、菜の煮加減を褒められて、面白可笑しく食べようとする喜びにしてゐた朝飯は、無言の行の中に味なく済されて了つて、やがて席之助は盞々茶を吸りながら、

「一つ散歩して来よう。」

「良君、怒りなかつたのありませんの。」と鳩のやうな眼色の、飽くまで優しい女である。

(十一)

「君、甚くお早いぢやアないか、これも亞米利加流と云ふのかね。ハッハッハッハ、」と腹から押出すやうに笑つて、指頭で妻楊子を弄くつてゐるのは主人の牧師、中岡蘇平といふのである。

「イヤ、つい、散歩に出かけて、不知不識の方へ足が向いて來たので。」席之助は相不變浮立ぬ顔色でつく然と腕叉をしてゐる。今朝は、素朴に、紺緋の三尺をぐるぐる巻といふ體裁なので。

「不知不識か、それぢやア無意犯と云ふもんだねハ、ハ、ハ、ハ。訪はれた方は、聊難有味が減ずるやうな次第で。」

「否、不知不識と云つても満更目的なしに來た譯ぢやアない、一つ、君の御意見を聴かうと思つて。」

「ハア、僕の意見……何だか訴訟の鑑定にでも來られたやうな工合だな、よろしい、何う云ふ事件かな。」とぐつと氣取る。

「實は、先夜、僕が教會で懺悔した一件ね。あの事に關してだがね。」とさすが後は性急に言葉も續きかねてゐる。

「フーム、あの事に關して……」と頷く。

「君は、何う思はれるんですかね。懺悔めは凡の罪惡を消滅せしむる力があると云つてあるんだが……」と少し躊躇してゐるのを、直と引取つて、

「それは無論左様だね。我が來るは義人を招かんが爲めにあらず、罪ある人を招いて懺悔めせんが爲めなりで、結局、基督の救といふのが唯懺悔めに依つてのみ得られる譯なんだ……件し今の基督信徒と云ふ連中が怪い奴なんぞ、羊の皮を被つた狼とまで行かないでも、野羊位なもんぢやアあるね。あの件から教會の連中が何か難題を持懸けて來たんだらう。」

「否、そんな事は……」云ひつゝも、少し疑ふやうな眼色で凝と見て、唇を噛み緊めてゐる。

「左様……それぢやアその中止犯といふ譯かな。」妙に法律の術語を交せて、少し怪訝な顔附。

「何うしたと云ふ譯ですか。」と此方は膝頭を進める。

「實は、その、昨晚、君の教會の執事連が遣つて來て、已に懺悔したのだとは云ふものの、兎に

角「一旦あんな罪惡を犯した牧師を何うも教會の上で頂いて置く事は、甚だ好ましくないといふ議論が信者の中に喧ましくなつて来て、到底取替める譯に行かないから、此際辭職して貰ふやうに、勸告してくれいと云ふんさ。そんな馬鹿な事をと、頭から叱り附けて、追ひ返してやつたのだが、君、實に今の信者には、僕等アもう愛想を盡してゐるんだよ。牧師が、必ずしも人の靈を救ふ唯一の道ではないのだから僕は更に他方面から手を更へて遣らうと思ふ。」

「フーン……それは何うも……そんな事が……と庸之助は、不思議、眼を睜つてそのまゝ、呢と考へに沈んでゐる。

「君は彼の植木監督から大に信任されてゐるやうだし、殊に神學士の肩書もあつて、前途大に有望だから、まア遣れる丈遣つて貰ひたいが、僕等はもう功成り名遂げと云ふ……未だなか……そんな處へは至らぬが、兎に角十數年間此職を勉めて、随分戦つたつもりだから、或はこゝらで一先切上げて、側面攻撃と云ふ態度を取るかも知れない。」

「ハア……」と一心に聴いてゐるのか、考込んでゐるのか、頭は上らない。
盤踞む足音がした。側近く人の坐る氣色。

「貴方、まア一つこれなと召上りませな。」細君の聲に、ハツと思つて庸之助、顔を上げると、葡萄の紫の一房、黒漆の盆に盛つて差出されてゐるので——實の上には一々白い露が、珠と置渡してゐる。

細君はお寅と云ふ、髪は夜會くづしの、束ね結びで、色の淺黒い、顔に小皺が見えて、如何にも永年臺所の世話許焼いて來たといふ相があり……と。

「もう、御構ひ下さいますな。」

「否、何にも……あの奥さんも些とお遊びに入つしやるやうに……」と世辭を云ふ。

「ハ、難有う。」

「家の夫は又いろ……あの田島さんと仰るのは貴方の御親戚の方でございましたつけねえ。」

「ハツ……」と合點の行かぬ様子。

「ア、左様……僕は未だ何とも御挨拶もしなかつたが、君……實は或人の紹介で、彼の方の銀行へ出るやうな事にならうと思ふのさ。法律を勉強して辯護士の試験をととも思つたが、最早老いたりで、なか……間尺にやア合はないからね。」

「お蔭で月給も大分取れるやうになりさうでございます。貴方は、あんな御大家を親類に

控へてお在なさんですから結構でございます。が、私等のは、眞の一本立ちで、二十圓か、三十圓かのお金を貰つて、十何年といふもの、随分苦しい目を見て來たのでムいますから……」

女はさすがに思慮が淺い、いそぐとして何も彼も曝け出す。

「何に、敢て月給といふ點に眼を注げる譯ぢやアないがね。」と態平は稍、敗亡の氣味。

(十二)

割めらるゝまゝに庸之助は、葡萄の實の一つ、紫水晶の珠のやうなのを指頭で摘上げて、香の高い汁を嚙りながら、

「考へて見ると、僕等は、實際牧師といふ資格は無いんだから、此際教會の方を辭職してやつて、寧ろ山の中へでも入つた方が善いか知ら……」淋しげに肩頭に見せて、額際には淺い皺を刻んでゐる。

「君がそんな……資格があるの、無いの、そんな馬鹿を云つてくれれば困る、罪を犯したからつて一旦悔悟したらそれで好いんだ。實際、自分の罪惡を公衆の前に白出して、それを懺悔すると云ふやうな事はなか……出来るもんぢやアない。然るに君は敢て之を爲得たといふので、植木監督は非常に君を愛めて、實に將來日本の

基督教界の柱だと言つて居られた。實際、君、何んの疚しい處もないぢやアないか。」

「處が……君、その悔悟した罪惡の古疵が何時迄も消えないで残つてゐた場合には何だらうね。」と眩しさうに蘇平の顔を見る。

「フーン……僕は何うも左様云ふ事を信じ得ないね。柱の釘を一旦抜き取つて了つたらそれで好い譯なんだ。古疵の痕跡が附かうが、残らうが、結局それは人間の眼に見える丈なので、神様の方ではもう綺麗に、帳消しになつてゐるんだと思ふね。」

「ハア……」と、唯小頸を傾けて考へてゐる。

「私どもは一向分りませんけども、何だか家の人の云ふのが尤ものやうに聴えますね。貴方左様お氣になさる程の事はないぢやありませんか。あの厳しい監督さんなんかも、貴方、お若い時にはいろんな事がありましたさうですわ。ホ、ハ、ハ、と細君は笑を令んでゐる。

「左様さ、あの人も昔は女學校の生徒と何うかしてたといふやうな噂もある。君、一々詮索立をして行つた日にヤア誰だつて權樓が出るからね、左様無闇と氣に懸けちやアいけない、大概にして置き給へな。」

「そして十年も前の事ぢやありませんか。眞

に貴方はあまり苦勞性ですわ。」

「もう……考へるのは廢止給へ……そして、あの市ヶ谷監獄の教誨師といふのを、僕の方へ云つて來てるのだからね。近々罷めようと思ふ矢先、とても行けないと云つて辭つて、代りに君を推薦して置いたのだから、多分今日中にでも君の方へ依頼みに行くだらうが、よろしく遣つてくれ給へ。」

「そんな事を僕の方へ……」庸之助は、ちりと眼を睜つて當惑さうな顔色。

「君は亞米利加から新たに歸朝した若手のチャキチャキの牧師で、而も、神學士の肩書のある、有徳の君子人だから、僕等は其の靴の紐を解くにも足らない。實にこの人ならば大いに君の事を稱讃して置いた次第だから、君が行つてくれると署でも非常に喜ぶだらう。」

「僕は何うも……辭職でもしたいと思ふ矢先それはどうも迷惑至極だね。」

「貴君、そんな辭職なんて云ふ事は仰やりません。皆貴方の事は神様のやうに褒めてるのでありますよ、教會の人は何と云つたつて、世間では皆左様云つてるのでございますよ。と、細君は愚めるやうにつくつく庸之助の顔を見てゐる。

「何うしまして……と苦笑ひしてゐる中に、門前でハタと車の止まつた音。細君は振返つた。そして一寸氣色を窺うてゐたが、音訪ふ聲がするので、周章で、と玄關の方へ小走に走つて行つた。

來客と悟つたから、「何もお邪魔でした。」と會釋して起きる。「まア緩り……と止めるのを辭退して早玄關へ出る。細君も止める。見れば小立派な洋服を着た、金鎖を下げた、銀行員が會社員かといふ小才子風な男が入違つて奥へ入つて行つた。

彼が周旋する男かと思ふと、庸之助は、彼奴惡魔だ。中岡牧師を俗界へ墮落せしめんとする誘惑の魔の使だ。誘惑する者も實に憎むべきであるが、誘惑さるゝものは更に憐むべし。如何に貧乏が辛いからと云つて、如何に月給が欲しいからと云つて、十年、天の糧に養はれて來た身が、一朝師を屈して俗世界へ降参して了ふなんて、實に天火に燒かるべき罪惡だと思ふと、更に自己が罪惡が身を責める。自分が其任に堪へないからと云つて、牧師を罷めるのは未だ正直な處もあるが、牧師の資格なくして世を欺き人を欺き、吾自を欺き、猶その神聖な職を汚してゐるのは、正に十倍の大罪惡ではあるま

いか、成程中岡牧師はあのやうに云つて慰めてくれるのであるが、其釘の痕が神様の方では果して帳消しになつた都合であるか何うだか、否そんな事は斷じて信じ得られないのだ。と繰返し繰返し思ひつゞけて歩いてゐると、車夫に二度衝突を喰されて、三度目に、

(十三)

「旦那、何卒一文やつて下せえ。」見れば十二三歳の小娘を頭に、三四人、男子と女子と打交つた乞食の一群であつた。

母のお節は窮屈げに安樂椅子へ腰を掛けて、座敷中一遍ぐるりと見廻して、床の間の、例の耶蘇昇天の油畫に眼を留め、珍らしさうにそれを眺めてゐる。小造りの丸顔の鼻の小高い、眼元から額際から、皺だらけの、年紀は早五十の坂を越して、六十には未だ少し手が屈きかねてゐるらしい。木綿の小格子縞の袴の上に、茶縹の絲織の袴羽織を引掛けて、黒縹子の細帯を締め、小瀧酒とした服装である。

「姉さんも何卒御掛けなきて……」と席之助に云はれて氣の附いたやうに、今まで突立つたまゝで一途に新夫婦の肖像畫に見入つてゐたお柳は始めて腰を卸した。紋織お石の小袖に三紋附の黒縮緬の羽織を着流し、襦袢の帯に琥珀色の

の帯留の、前でパチと緊めた金金具さらびやかに、大丸髷は結立てと見え、黒い髪が艶々しく水際立つて色の白い、何時も日元の涼しげな、さすがは一時飛ぶ鳥も落す許り嬌名を新橋に賣つた當年の俤が残つてゐて、しかも年の勢と、自づと備つて品格があるからであらう、如何にも立派な奥様だ。

「何うも手狭な處で……」と席之助は低聲。「否え……なかく綺麗だよ。」とお柳は未だ彼方此方と眺めてゐる。

「庸や、彼れは何の給なの。」と母は顎で、油畫の方を示して、不審さうな目色。

「彼れは耶蘇の昇天……耶蘇が天に昇られる畫でございます。」

「天に昇るつて。ホ、ハ、ハ。」とお柳は笑を噴みしめたやうである。

「フーン、彼れが耶蘇の神様だな。」母は忌な顔色。

衣ずれの音さや、と徐かに入つて来て、下手から卓の上へ手を突いて丁寧に會釋する惠美耶を席之助は二人へ紹介して、

「あの阿母さん、姉さん、これは米國から連れて歸つた妻でございます。何卒よろしく……」

「何卒よろしう。」も、惠美耶は口の中で、さつ

と頬邊を薄赤らめて、慇懃に叩頭をした。

「何卒ね……」とお柳も一寸會釋したが、母はギョロリと見た切りで、強て叩頭をするでもなく、唯少し頷を振つた。

「阿母さん、何にも未だ分りませんのですから何卒よろしく……姉さんも妹と思つて……」

「ハ……何卒ね。」何となう冷淡な調子である。

「私、何んにも分りませんのありますから、何卒可愛がつて下さりますやう、お願ひでございます。」絲のやうに纖細く、覺束ない聲音にも情を罩めて、惠美耶は二人の顔を窺むやうに見つゝ果りに叩頭してゐる。

「ハイ……何卒ね。」

「あの、阿母さん、何とか云つて遣つて下さい。」席之助が語るやうに云ふ。

「ハイ……何卒ね。」と、お柳の眞似をする、惠美耶は手持無沙汰で唯顔を赤らめてもじ／＼其處に佇んだまゝ、伏目になつて裾の方を見詰めて、白い手巾をいぢくつてゐる。

「庸や、少し内談があるんだからね……あの、此の人も誰か聞かないやうに。」

「庸さん、阿母さんが少し内談があるんだとさ。」

「左様ですか、ぢやア惠美耶……汝は御馳走の

支度でもして、おくれ。少し祕密の相談があるんだとさ。」

「惠美耶は何だか怨めしうに夫の顔を見た。」

「あの、一寸、汝、何卒、夕餐の御馳走を拵へてね、阿母さんと姉さんにお上げ申すやうに。」

心から柔しく慰めるやうに云はれて、直と打解けたやうに命釋して次の間へ出て行つた。

「何に、そんなものは入らないよ。」と痴高な母の聲は、惠美耶へは聞えたか聞えなかつたか、お柳は、つと立つて一分ばかり閉め残した後の玻璃戸をハタと閉て切つた。

「庸、先日云つたやうに、何卒汝、耶蘇なんか、廢止ちやつて、銀行の方へ出る事にしておくれな、ねえ、――そして、あんな眼の青い、髪の赤い、何んだか思らしい、あんな者を汝、女房にするのはもう廢止しておくれ、お願ひだから……。」

「眞にね、庸さん、あんなものを妹だと思へなんて、私やア何だか情け無かつちまふわ、何卒、廢止されりやア、廢止して貰いたいもんだね。」

云ひつゝお柳は、帶際から、古渡金襴の煙草入を出して、銀の烟管を取上げた。

庸之助は蠟マツチを取つて、姉の前へ遣つて、唯淋しうに笑んで、下を向いてゐる。

「庸や、眞にお願ひだから、何卒、あんな者は離縁てしまつて、そして、このやうな耶蘇なんて商賣はもう廢して、銀行へ出るやうな事にしておくれ、あの、中何とか云ふ矢張耶蘇の先生だ

がね、それが汝昨日保衛さんに逢ひに來たのだよ。なうお柳、中何とか云つてたけなア。」

「中阿さんて……あの方、何でも八九十圓の月給にはなるんださうですよ。」煙をすばく吹かしてゐる。

「庸、眞に汝、こんな商賣は廢して、あの、毛唐人とはもう弗切縁を切つておくれ、そして、まだ汝に、眞身になつて聞いて貰はにやアならん事があるんだよ。」

(十四)

庸之助も少し姿勢を直して、今更のやうに耳を欲てゐる。

「あの、外ぢやアないんだがね。實は彼の田島の家で、女房の親とは云ふものの私等二人までが揃ひも揃つて御厄介になつてゐるのは心苦しうてならないんだよ。それも是迄は相續子の、汝の行方が知れなかつたもんだから、保衛さんもまア苦い顔をせずに、お世話をして下さつた

といふもんだが、汝が斯う歸つて來て見りやア、此方にも左様安閑と何日迄も厄介になつてゐる譯にも行かないし、それにね、姉さんも當初新橋から落籍されて奥様に直つた當座はもう座も据ゑぬやうに大そう可愛がられてゐたもんださうだが段々年は老るし、子は無しといふやうな事から、この頃では、汝、外に妾が三人もあるんだとさ。」

「妾が……フーン。」と庸之助は驚いたといふ顔色。

「否、そりやね妾手懸は男の働きたつて云ふし、殊に私には、子供が無い事だからそりやア家の人位になつたら二人や三人置いたからつて別に不思議はないんさ。嫉妬んぢやアないよ。ホ、ハ、ハ、ハ。」とお柳はわざとらしく笑ふ。

「二人も三人もそんなに……そりやア何うも怪しからん……そりやア何うも不都合だ。」庸之助は熱心に如何にも淺ましいといふ口調である。

「妾のあるのは、まア好いけれどもね、そんな者が出て來ると矢張その方へ許氣が移つて、本妻になつた者は一番可哀さうだよ……この娘はあんなに勝氣なもんだからなかく口へ出して云やアしないけども、この頃は汝、一週間に三日

と家で泊る事はないんだもの。」母は早涙含んでゐる。

「フーン……」

「そんな事は阿母さん、下らないぢやアありませんか。そりやア交際や何かで、家の人位になると野暮な言は云つちやア居られませんかからねえ。」

「あんな事を云つて平氣であるから、保衛さんは好い事にして愈々浮氣をして廻るんぢやアないかね。汝さんは大切な男を人に奪られたつて、何とも思はないのかい。」

「そんな……そんな血の氣の薄いのぢやアありませんけどもね、阿母さん……まさか怪氣喧嘩も出来ませんからねえ。」聲は怪しく曇つて来る。長い睫毛の下には暗愁の影が動きそめてゐた。

「妾を置くんて……何うも怪しからん……」と庸之助は咬くやうに云つて、累りと腕又を堅くしてゐる。

母はさすが、娘の情けたのを見て、氣の毒な感がしたのか急に話の向を變へて、

「まあそんな次第で、何うも私等はこの上彼家に永く御厄介になつてといふ譯には行かないのだからね、何卒汝も私等の事を思ひ、又姉さ

んの身の上も察して上げて一つ銀行の方へ入る事にしておくれ……そして、嫁も別に姉さんが、心當りがあるといふから、汝の氣に入つたらそれを娶ふ事にして、あんな毛唐人なんかとはもう弗切絶縁しておくれ。庸、私等も眞實に、従前大概心配といふ心配は盡して來たのだからこれからは少たア安心させて貰つても罰は當るまいと思ふのだよ……孫の顔も早う見たいしね。」

「あんな嫁さんぢやア汝、雜種兒が出来るだらうぢやアないかね。雜種兒なんか甥に持たせられちやア大變だわ、お父さんと阿母さんも、まさか雜種兒の孫は抱き度くならうといふもんだ。」聲音も早元の、快調な調子に戻つてゐた。

庸之助は返事もせず、俯向いてゐる。

「庸、眞にお願だから……親が手を突いて頼むのだから……」母は熱心に、哀訴するやうな調子。

「何とか一つ思案して見るが好からうぢやアないかね……何んなら、あの女と絶縁の方の事だけでも一つ早くね。」

「絶縁ると云つて……一旦婚禮の式まで済まして、そして、何の罪咎もないものを、左様無茶苦茶に何うも……」

「婚禮と云つたつて、親が承知したのぢやアないんだから、云はゞ出来合夫婦と云ふもんだよ。」

「阿母さん……出来合夫婦なんて、そんな事を……神様の前で誓うて、立派に結婚式を挙げたのですもの。嚴かな口調で庸之助は襟を正して云つた。

「だけでもさ、日本ぢやア又日本の式があるんだから、親が承知しなけりやア、立派な夫婦とは云へまいぢやアないかね。」とお柳は軽く云つた。

「郷に入つては郷に隨へつて云ふぢやないかい、日本へ來たら又日本流にせにやアならないんだよ。」

「阿母さん、米國で結婚したんですもの、郷に入つて郷に従つた譯で……」不思議と笑んだ。

お節はウンと行詰つたが、

「……だけでもさ、兎に角、親が承知せにやア眞實の夫婦ぢやアないよ。一體耶穌は先祖を粗末にしたり、親へ不孝するやうに教へてえ事だが、汝は少い時には極優しい子で口應一つした事はなかつたのに、何と云うてるのか、合點が行かない……耶穌なんて、眞に情ないものになつて、呉れたなう。」おろろ、少しは鼻

へ懸つた聲。

「決して……耶蘇は決してそんな事を。」

「だつても現在汝が夫れだ。親の云ふ事を聴かないぢやアないかい、現在汝が……」口惜しうな顔へ聲で。

「庸さん、汝眞實に、何とか一つ、思案してくれよ。あんな女なんかを妹だと思へつて、何だか急に私や肩身が狭くなつちまふんだもの。それにね、汝、昔の事を云ふぢやアないけれどもあのお澤さんの事もあるんだし。兎に角子まで生じた中であつて見りやア、あの人は縁が切れたやうで、切れないやうなもんだからね、お澤さんの方と満更縁が切れないんだとすりやア、あの女と夫婦つてえのも怪しいもんぢやないかね。」

これには庸之助も一句が出無い。呼吸が迫るやうに覺えて、胸はもう引絞らるゝやうだ。

(十五)

いづれ思案してと云ふを言質に、母は眼を眞赤にしてお柳は甲斐々々しく背からそれを扶けて造つて、衡門を潜つて出る出合頭、はたと行違ふやうに入つて來たのは惠美耶である。薄桃色の上衣を着て、料理番のすなる白い金巾の胸當を當て、提籠を肩頭に懸けてゐたが、周

章で、合恥んで會釋をする。二人は素知らぬ顔でそのまゝ行過ぎて了ふ。後影を一寸見送つて、振向くと、玄關口の敷臺には丁度夫が立つてゐた。

訴へるやうな眼色で、惠美耶は急ぐ靴を鳴らして駆け寄つて夫の顔を呢と見上げた。清い眸には早暗涙が浮んでゐる。提籠の中のは、豚の肉であらう、竹の皮の一包が入れてある。

庸之助は何にも云はず唯、惠美耶の肩を擁して、つく／＼構むが如く、その薄紅く照つた顔を覗き込んだ、惠美耶は提籠を其處の敷臺の上に置いて、しなやかな手頭を、ヒと庸之助の胸に織うて、今更のやうにしげ／＼と見上げるのである。その牝鹿のやうな優しい眼には今、星の露を孕んだ如く清く白くゆらく／＼きらめくものがあつた。

「良君……私を愛してくださるのありますか。」

「勿論……そんな事は今更問はなかつたつて……」心から打頭へた語氣。

門口に人の氣色がした。見ると七歳か、八歳、中に十一二のが年嵩らしい、襦袢の片袖又は半袖ちぎれて、日に鍛けた眞黒な肩頭の現れた、膝坊主の癩疵を青蛇が嘗めて、飛んで、又嘗めて來る、見すばらしい乞食が三人皆一様に缺け

碗を持つて立つてゐるので。

「耶蘇の異人さん、何か呉んねえ。蹤いて來たんだよ。」異人さん、何か呉んねえ。」

「何うしたんだい。」と庸之助に問はれて始めて心附いたやうに惠美耶は靜かに手を解いて、片鬘を撫で附けて、半ば振返りながら、

「私、あの、豚屋の角で巡查さんに叱られてゐる處を見たありますので、此方へ來い云ひました。」

「唯食物を造つたり錢を造つたりする丈では、何の利益にもなりませんよ。」

「私考へる事ありますので、ね、良君、良君に御相談したい思ひますので……」

「何んな事なんだね、まア此方へ上つて談話が好からう。」

「何卒、何か造つてくんねえ。今朝から飯一粒も食はねえんだから、腹が減つちやつて歩けねえんだ。」十二三の年嵩なのが、強請口調である。

「まア待つよらしい。」と惠美耶は手眞似で宥めて、靴を脱いで傍への下駄箱に入れ敷臺へ上つて、

「あの私孤兒院を建てたい、思ひまして……この子等皆親が無いのありますからそれで乞食

したり、中には泥棒します、外國でも左様ありますからね。」

「私等ア泥棒しねえや、そんな事しねえや。」と喚く。

「汝左様した云ふんぢやアありませんよ。」振向いて押寄める。

「孤兒院……フム……それは結構な企だが、まア篤と思案した上でなけりやア……」

「一寸あの子等の傳記、ホ、ハ、違ひましたね。あの子等の履歴、聞くよろしいぢやアありませんか。」

「左様だね、折角呼んだもんだから……ぢやア汝等此方へ上るが好い、足拭を持って來てやるが好からう。」と惠美耶に命ずる。

「私等ア跣足だア、臺殿で洗ふべいか。」と、年嵩のが眞先、二人も氣疚くいそぐと後へ跟いて早水口へ廻る。惠美耶は其處へ櫛を棄けて下り立つて、一人々々石疊の上に立たせ、水桶の水を手づから柄杓で浴びせ懸けてやつた。彼等は欣々として雛が母鶏を仰ぎ見るやうな眼色。

席之助は縁先へ坐らせようとしたが、惠美耶の氣を兼ねて三脚安樂椅子を並べた。身姿は賤しくても矢張神の子であると云ふ事を胸の中に繰返してゐると、何となく非常に尊いもの

のやうに思ふ氣が漸して、一種神聖な感が骨の髄へ浸み入るやうな心地であつた。

程なく三人は惠美耶に引連れられて、小羊が牧者に導かるゝよりも無邪氣に、無頓着に入つて來て王座を與へられでもしたやうに、喜び勇んで件の椅子に凭りかゝつた。十二三の年嵩なのは、流石眼色に一種陰險な光を浮べてゐるが、他の二人は未だ無邪氣な、人を見懸けて強請といふのも眞の器械的で、無意識で、畢竟草花が風の神に叩頭してやうなものなんだ。

「汝等は何うして乞食するやうになつたんだね。一つ、話して見るが好い。」

「已等か、已やア父無兒だよ。」十二三のが、喚くやうに云つた。

「已等の父ちやんも阿母も去年虎列刺で死んぢやつたんでえ。」

「已や捨兒だ。親ノ者生めが捨てやがつたんだ。」七八歳にしては長せた口調である。

「まア一人、一人、綴々と詳しい事云ふよろしい。」惠美耶は慈悲に輝く眼光で、一々斯う見廻して云ふ。

席之助は何と思つたか、始めのが父無兒というた言葉で不思議な戰慄せて、木偶のやうに茫然佇んでゐたので。

(十六)

金曜日の祈禱會には集會者が僅か十名にも満たなかつた。今日安息日の朝の集會には彼は五六十名の親觸は見たのであるが、執事の仕草が何となう冷淡で、人を輕蔑したやうな風があつた。

或は自分の癪根性から左様思つたのかも知れないが、兎に角皆が浮の空で、讚美歌を唄ふのを何だか都々逸でもやつてゐる位な氣であるやうに見えた。實に嘆息すべき事の限りではないか。

併し、人の眼の座を議するものの、自分の目にある梁の事を思へば、何んにも云はるべき筋ではないのだ。自分が大なる罪惡を犯しながら、牧師などと云ふ神聖な職を汚してゐるのが、丁度羊の皮を被つた狼ではあるまいか。その狼が聖壇に立つて、偽善な虚飾な説教をやつた處で、誰が謹んで聴くものがあるうぞ。人々の浮の空なるのも、敢て咎むるに由はないのである。否、都々逸を唄ふのが却て似合ふかも知れないのだ。

思へば自分が牧師の職に居るのは、愈々罪に罪を重ねる道理で、阿母さんが謂はれたやうに耶蘇は先祖へ對し親へ對し不孝を働くものだといふ、それにも増した冤罪を神の尊き御名に

塗り附けるのである。寧ろ今の中に深く辭職して了つて、斯う、山か海へでも……、と思ひ詰めては見るがさて又一方では、彼の可憐な惠美耶の身の上は何うするのであるか。千里の波濤を越えてわざ／＼知らぬ他國へ連添うて来て、我一人を杖とも柱とも頼んでゐる、それを振棄て、行く事が何うして出来るようか。忘れも得しない、結婚の約束が成立つた、その前日彼の宅の後の花園で、自分が始めてお澤の事を打明けて、彼の前で懺悔した時、貴方はもう其方と縁を切つて了つたのでせうね。その人はもう他人の細君になつてゐられるんでせう、ね、それぢやア貴方は、私に偽なき愛を贈ぐ事が出来るぢやアありませんかと、自分の手を取つて、熱い接吻をしてくれたその場の有様は、今も猶目の前にあり／＼と浮んで来る。それを何うして、今更にお澤が殺人罪を犯したといふ事、自分との間に私生兒があるといふ事まで、何の面下げて打明けられようものか。

お澤が事も、若果して我が身の上の關係から殺人罪を犯すやうに立至つたといふを事實とすれば、決して人事に聞き流される段ではない。若氣の過ちとは云ひながら、互に懲ひそめ、憂ひ合うた果が我が身の胤までも宿して、それ等の

事から一途に取逆上せ、無残にも其夫に當る人を刃にかけて殺したといふに至つては、自ら手を下さない迄も、自分は正に教唆者ともいふべきものである、何と云つて詫びよう、否、詫言葉はない、否合す顔がないのである。

又一方には父母へ對し姉へ對し、自分は實に大なる責任を負つてゐるのではないか、耶蘇を止めよといふ——そんな事は無論出来ないが、女座にも父母に安息を與へる丈の仕向はしなくてはならぬ。銀行員になれといふ——その相談には乗られないが、兎に角こんな薄給ではとても、思ふやうにする事はならないのである。その上、姉へは自分が實に面向けのならぬ仕儀をして置いて、その罪を償ふ事の出来ないばかりか、今以つていろんな心配を掛け、厄介な目を見せてゐる。惠美耶から第一に離縁了といふ、そのお言葉は實に情ないが、畢竟これも自分が可愛いから云つてくれた事だ、雜種兒の甥、雜種兒の孫、成程親や姉の考では醜嫌なものに思はれるだらう。否日本の社會が又雜種兒を何のやうに待遇してゐるか、親たる身のさすが、思へば腸が千切らるゝばかりだ。

お澤と惠美耶、惠美耶と親同胞、親同胞から生活の事、牧師の事、銀行員の事、それから

私生兒の事、胸の中で宛ら車輪を廻すやうに、あれからそれへと思ひつづけ、考へ廻し何だかもう掻き撚らるゝやうで、目先が眩む思ひ。殆んど昏倒せんとして、庸之助はハツと氣が附いて、邊を見廻した。

自分は今、市ヶ谷監獄へ囚徒の教誨に行くのだと心附いて、さて、何を云ふつもりだつたかと思つて見て、ふとそれが横へ外れて、自分杯が教誨師なんて實に恥かしい次第だといふ事から、又空想に陥らんとした時、

「何か造つて下せえ、旦那何か造つて下せえ……」

突如に、狭い小路の、生垣の曲り角から叫び出されて、驚いて見遣ると、十二三の小娘の、檻樓下げた乞食である。

何處かで見たやうだと思つたが、一寸思ひ出されない。立留まつて暫眺めてゐると、

「旦那さんは半へ行つて、私お飯食はれねえんだ。旦那何卒一文造つておくんせえ。」

「何卒一文造つておくんせえ。」

「あの牛込の教會へ行つて見るが好い。」と云つて、何氣なく一枚の名刺を渡した。

「これを持つて行くとお錢を呉れるんかい。」

「ア、……兎に角行つて見るが好い。」と、猶も様子を見守つてゐる。垢まみれ、塵埃まみれの、窶れてはゐるが、その眼附が何となう涼しい、品のありさうな娘だ。

(十七)

監守長の先導で、やがて狭い暗い長廊下を辿つて幾曲り、靴音の戸障子に響く調子が忌に淋しげで、何だか斯う冥府へでも下つて行くやうに思はれる。向う幾帳、工場であらう、騒々しい槌の音やら、器械の運轉するやうな響きが不絶に聞えてゐて少し離れた女監の方からは機械の音の音が響いて来る。その音響といふものが、陽氣な、威勢の好い開心地の勇ましい、調子は微塵もなく、唯もう陰氣臭い、何だか飽つぽいやうな、到底婆娑世界のものではなかつた。

四方の窓を玻璃で張つた廣やかな教誨所の、正面一段高い處に鳩宮牧師は今起立つたのである、板敷の上に荒達を敷いて、何百の女囚は列を作つて、目白押に押並らんだ、蓬け髪、油氣のない、赤ぢれたのやら、色艶の失せた猫毛やら、中には腫物が噴出て茶瓶になつたものも交つてゐる。身幅の狭い、棕色の囚衣の皆一様に美人草も醜草も、敢てそれと見分は附かない。いづれも牢籠れのした、眉間に小皺の寄つた、そ

して陰險な眼の光の、びか／＼と電の閃めくやうな、その光景が何となう凄くやうだ。

人は動物だと云ふと、何だか神の子たる榮冠を泥の中へ投げ込まれたやうに聞做さるゝものであるが、この場の光景を見ると實にその動物たる事を證據立てゝゐるのだ。見よ、彼處には狼のやうなの、此處には豺のやうなの、或は山猫のやうなの、或は狐のやうなの、狸のやうなの、そしてその腰には、鐵の鎖が鳴つてゐるではないか。

例の黒い袴を穿いた女監取締は、端々へ立つて壁板に凭れかゝつて、場内に眼を配つてゐる。部長は飛び／＼にその間に配置されて、鋼鞘を握つて、警戒してゐる。鳩宮牧師の傍には看守長が椅子へ倚りかゝつて、八方を見下してゐた。

牧師は手を額に加へて暫く祈禱の後アーメンと唱へ、聖書の一節を讀んで、さて咳一咳した。

「皆さん、私は唯今、監守長の御紹介下さつた通此處この監獄の教誨師に依頼されて、男囚方と、女囚方との一部を受持つ事になつた次第であります、可成御了解になるやう極手近な御話をしまして、別に六ヶ敷い事は申上

げません積ります。」

女囚に一寸咳拂ひをするものがあつたので、「静かに。」と、女監取締は制した。

「皆さん、皆さんは人間といふものの價値を御存じでありますか。人間は元來神様の形に肖せて造られた極尊いものであります。神様といふのは皆さん御存じでもありますが、天を造り、地を造り、日輪や、お月さんや、又水や、火や、凡てありとあらゆる萬物をお造りになつた全知全能……何も彼も御存じで、何處も彼處も御見通しなさる御方であります。」

コホンコホン。と今度は高く咳拂ひの聲が聞えたので、部長は、「誰だい。」と叱咤して、白い眼を光らせた。

「それで皆さんは、その尊い神様の姿に肖せて造られた方々でありながら、罪を犯し、惡事を働いて、こんな暗い處へ入つて來るといふのは抑々大なる心得違ひではありますまいか、勿論その罪を犯すやうになつた原因起源といふものはいろ／＼あります。私は決して皆さんのみが悪いとは申しません。否、寧ろ中には大に同情を表すべき點もあらうと思ふのです。或は偶とした出來心で盜をして、一度こんな處へ入つた爲めに、後からそれを改心しても、世間が

もう相手にしてくれないとか、或は繼親の手で育てられて自然と癖み根性になつたとか、或は親に捨てられたとか、或は又最愛の夫に捨てられたとか……云つて何だか身に沁むやうに、法然として少し伏日になつた。

俄かに、すゝり泣の聲が聞えた。見れば片隅の女監取締の脚下に坐つてゐた年頃三十ばかりの女囚、袖向加減の片掌に眸を押當て、いとしく髪毛をわな／＼懷はせてゐる。

「コラ……コラ……」取締は叱咤したが、なかなか泣き止まない。牧師は不思議さうにその女囚を見遣つた。顔は分らない。

嘲笑するものがあつた。

(十八)

車美耶は夫の傍へ椅子を引寄せて、例の長い腿毛を睨きながらいたく當惑さうな顔色で云つた。

「ね、良君、何うするよろしいのありませんか。あの、一番歳の多い子、昨夕から出た限り歸るありません、八歳と九歳の子二人共、又出て行き度いふのあります……」

「フーン、矢張乞食して行く方が好いのかないア。極洗み切つた調子。席之助は、何だか斯う顔色が青さめて眼光がどんよりと、昨夕も又眠

られなかつたのであらう。

「あんなに、衣服も古着商から取寄せて、着せてやつたのありますし、私の室、孤兒院にして可愛がつてやるありますのにね。」

「何うも仕様がなないア。」

「あの二人も又今から直に出たい／＼云ふありますから、待つよろしい云つて、あの彩色した油畫澤山出して、二階で見せてあるのあります、良君何んとか一つ思案ありませんかね。」云つて一途に、席之助の顔を見入つて返事を俟つ。

席之助はむつ／＼黙込んで暫時口を利かなかつた。

「御顔色よろしくありません、御氣分何うかありますかね。」と覗き込むやうにせられて、

「イヤ、別に……」と、氣の無ささうな返辭。

「良君御隠しなさる事ありません、私、妻でありますから、妻に何か秘密をお隠しなさる事ありません。」と此方は怨めしきうに云つて、その美しき眼元に露味を見せた。

「何にもその……秘密なんてありやアしないよ。」聊か周章たやう。

「だけれど……私、良君の親御さんや、姉さんに嫌はれてゐるのありますから……」

「そんな事は……そんな事は決して心配するに

やア及ばないんだよ。」

「心配するなつて……良君、私心細くありますもの……良君、私あの……」少し口罩つたが聞取れぬやうな低い聲で、

「あの……私、懷妊ありますよ。」颯と茜さす顔容の、宛ら爛漫たる薔薇の花びらを網の薄ものに包んだやう。少し俯向いて眞紅な耳の根を見せた。黄金色の連の、縮れ毛一摘み、ほつれかゝつて、又なく艶な其中にも何處か斯う凜として神々しいその風情、聖母マリヤの儼にも似通うてゐる。

「左様……」と席之助は不思議身を立直したが少し血の氣が眉際に浮んで、そして何處か満足らしい色が見えた。

「まア、身體を大切にすることが好いよ……早速下婢を働か事にせうぢやアないか。」と語を繼いで、稍氣附いたやうな面地。

「下婢なんかは……未だそんなのおりませんから出来るだけ、私働くあります。」

「だつて大切な體なんだから氣を附けなくちやア……そして昨日云つたあの小娘はまだ來ないんだな、小娘の乞食は……」

「未だ來ませんのありますよ。」

「あれが來たら下女代りに使つてやると好いが

なア。」

折節二階の階子段をどいたばたと駈下りたやうな足音、颯と玄關口で何か騒々しい人氣色がある。

惠美耶は何事かと、立ち出て見ると、例の二人の少年、仲間を見附けたと思つて駈け下りて來たのらしい。下の土間には、十二三の乞食の小娘が佇んで何か互に談合つてゐるのである。

(十九)

件の小娘は惠美耶夫人に連れられて、二人の少年に右左から取巻れて、やがて庸之助の室へ入つて行つた。例に依つて安樂椅子は此の襖裏衣物の腰も肩も抜けて了つて、垢附き汚れた可憐の少女に王座を與へるべく設けられてあつた。二人の少年は昨日の見すばらしい身姿に引換へて、今日は、小瀟洒とした木綿の袴を纏うてゐる。頬邊も何だか肥えて早ふつくりとして來たやうで、時々は笑顔もする、如何にも邪氣は無ささうである。

つく／＼見ると其小娘は、顰のかゝり、頬の工合何となう恰好よく、天のなせる麗質を暫らく浮世の風塵に埋めて了つて、こゝにその多年の恨を語るやうな眼元、それは少し險しい、狐疑深いやうな色を帯びてゐた。

「あれから何うして來なかつたの。」と庸之助は自分が與へた名刺を取上げて見ながら云つた。

「私、あの日、あれから澤山と貰ひ物があつて腹一杯になつちやつたんだもの、それで來ねえだつたよ。」

「左様：私は又、此處が分らなかつたのか知らと思つたよ。」

「左様ぢやアねえんだ：あの、私、今、腹が減つて、我慢が出来ねえから何かお呉んなね。」

二人の少年は眼を見合はせて鼻頭で、クスクスと笑つて、

「あんな事云つてらア、やアい。」先刻、朝飯が濟んだばかりの癖にやアい。」

「汝等ア濟んだか知らねえが、私未だから好くつてよ。」と小さい口を歪めて罵つた。

「汝等は黙つてお居でよ。」と庸之助は二人の少年を宥めて置いて、

「汝、名は何と云ふの。」「お卷さんてえの。」

「父さんや、阿母さんは：」「名は知らないの。」

此時惠美耶は、ビスケットを菊皿模様の、玻璃の菓子器に盛つてさし出した。

「食べるよろしい：」

「好くつて。」と、いきなり、小娘は黒い猿のやうな手を出して驚掴み、飢ゑたる大が肉の塊に有附きでもしたやうに、むしやり／＼遠慮會釋もなく頬張り込む。二人の少年も負けずと手を出して、瞬く間に、菓子器の底が明いて、卓掛の白い布切が透いて見える。その時惠美耶は更に珈琲を運んで、一々振舞うて自分も傍へに腰を掛けた。

「あの、汝、何うして乞食になつたのかね。」

「私：私は牢の中に生れて、それから：」

珈琲茶碗片手に未だ口の中の何處かに残つてゐるのを、モグ／＼と遣つて一息に、それを嚥下した。

「エツ：牢の中：」庸之助は驚いた顔で「牢の中つて：何あります。」惠美耶は不審さうに尋ねる。

「牢つて、牢だア。」八歳の方、これは綽名をチビ六といふのが喚く。

「監獄の事さ：監獄よ。」と、庸之助は惠美耶に目を注げて云ふ。

「私ン阿母は好い家の娘だつてんだがね、若い時分家の書生と密通してから、お腹が懷妊くなつたんだつて、其處へ又他家から婚が來て、其奴が思な男、嫉妬ばかし擧いで、墮胎せ／＼つて、餘まり邪慳にするもんだから、阿母ア肝

痕を起して、とう／＼殺しちゃつたの……」とその小さい鼠のやうな眼は閃めくがやう。

庸之助は怯として全く顔色を變へた。

「そんなに……まあそんな事をしたの。」と惠美耶は呆れ顔。

「殺人犯の子だなア、汝、殺人犯の子だなア。」とチビ六で無い、上州といふ方が暗いた。

「汝の阿母さん、汝をその牢……牢だね、その牢の中で産んだのありますか。」

「私、牢の中で生れたんだつてね。それからあの看守長の家で奉公してえたんだが面倒臭えから飛び出しちゃつたのよ。」

「まあ……」と云つた切りで、惠美耶はつく／＼氣の毒さうに、又いとさうに愁然たる面地して、庸之助の顔をちらと見やると、何うしたのであらう殆んど死人のやうに、宛ら土色になつて、唇頭を顔はせてゐた。

「良君、何うしたのありますか。良君、御氣分悪いありますか。」

答も得せず、唯眼を瞑つてゐる。お卷も、上州もチビ六も、驚いてキボ／＼と見てゐる。

「良君何うなさつたのありますか。」惠美耶は周章で、夫の傍へ立寄つて柔に、肩頭へ兩手を掛けて及び腰になつて、下から覗き込んだ。

「何アに……と軽く云つたが、彼の心臓は宛ら兩刃の劍で差貫かれたやう、最早苦痛といふ段ではなかつた。」

(二十)

お柳は臺所で、鯛の潮煮の鹽加減を嘗試みてゐる。三人の下女は紅い襷がけ、冠り手拭の、庭を彼方此方、忙しうに立働いて、西洋鹽へ薪を投げ込むやら、漬菜を刻むやら、搦鉢を洗ふやら、コチコチギンギシと騒々しい音を立てゝゐた。茶の斑白の頸へ眞鍮の輪を嵌めた大きな洋犬が、今し方、投げ興へられた一斤の牛肉に、狼飢足らでや、舌舐すりしながら、戸口からの、そ／＼と入つて来て流元で搦鉢洗ふ下女の踵を嗅いでゐると、漸く氣が附いて吃驚して周章で、搦鉢を振り上げ、叱ツ、叱ツ……叱 畜生。怒鳴れたので洋犬も敗亡、長い目でじろ／＼見て、やがて小急いで、外庭の方へ出て行つて了つた。

「お梅や、あの酒屋から、未持て來ないのかい。」

「もう追附持つて參るでございませうよ、私が只今行つて、促き立てゝ來たのでございますから……」

竈の鐵蓋を鎖しながら云つた。

「左様、それは御苦勞だつたのねえ。」

「あの御客様の、御膳立もするのでございませうねえ。」と（漬菜の方）が、念を押した。

「ア、左様だよ、あの方は精養軒へとか何とか云つてただけでも、兎に角夕御膳丈は家で済まして行かうつて、旦那さんがさう云つていらしたんだからね。」

「左様でございませうか……あの方は何とか云ひましたつけね、この頃善くちよい／＼入らつしやるのですが……」

「中岡さんて……今度東洋銀行へ出るんだとさ。」

突然、臺所口から、白の襦袢に紺の腹掛の、若い男が、跣足で飛び込んで来て、

「お梅とん、柄杓を貸した。」

いきなり、水瓶の水を柄杓飲のぎう／＼と引かけて、一寸行つて來るんだ。」直と又飛び出さうとするから、お柳はじろ／＼と見て、

「源や、お前何處へ行くの。」

「ヘイ……旦那様が、あの上野までお出でなされるんで。」振返つて中腰になる。

「オヤ、左様……それぢやア又入つしやるの。」

お柳は氣拔けのしたやうに、はたと汗鍋へ蓋をして、慚げにする／＼と玄關の方へ出て行つた。後影を見送つて（竈の前）は、聲を潜めて、

「又、今夜ア泊り込みだよ。酷いのねえ、十日も流れて、今朝漸つと歸つて来た計りだのにさ。」

「可哀さうだわねえ、奥さんも……床の番ばかりして。」

「これだから、大家の奥さんなんかになるもんぢやアなくつてよ。見掛け許しの風袋倒しつてえ奴で、傍から見てる者が、お氣の毒のやうな譯ぢやアないかね。」これは（指鉢の局）の御言葉。

「成程お梅さんが、車夫の源公を亭主に見立てちやつたのも、そこから割出したもんなんだね。ホ、ハ、ハ。」と漬茶をコチ。

「人をつけ、餘まり馬鹿におしでないよ。幾ら何んだつて源公なんか。」と、（指鉢の局）は膨れ面。

「好いぢやアないか、源公だつて……亭主になつてくれ人がありやア結構さ。此方等見たやうな、おかめ面は一生寢だ。」嘆息しながら（龜の前の）述懐、成程見れば此奴は盤臺面だ。

「そんなに心細い事を云ふもんぢやアなくつてよ。男鯉に蛆が湧くてえけども世間に女の廢れ物アないんだとさ。」

「押が強いねえ、お松ちゃんほら、あの、

何とか云つたけね、銀行から好く来る、色の生白いのに岡惚だとき……今に、奥さんになれるんだらうよ。ほんとに眞似りたいもんだわ。」お梅は仇討といふ口調。

「ア、今にね……此方等が奥さんになつたら、見て、御覽、あんな意氣地のない事アしないよ。宿六が浮氣すりやア、此方ア俳優買ひさ。」

「オヤ……」
折節「梅ちゃん、松ちゃん、誰でも好いから一寸……と奥から叫び立てる。
「又、あの厄介婆だよ。」舌をペロリ。

（三十一）

下女が持運ぶ銀瓶の湯を急須に注いで、お節は茶盆の上に伏つた洛焼の茶碗を片端から一つ一つ起して並べてゐると、お柳は客間から下げて来た菓子器を持つて、下手に坐つた。父の修造と三つ鼎、狭い庭に面した障子は飄と左右に開かれて、その庭内には晝影が一ぱい、縁側近く射し込んで来て、瓢箪形の盆池に放つた緋や、白の金魚の背甲がびか／＼光つてゐる。飛び飛びの庭石の間には、小い青石を一面に敷詰めて片隅の五六本、疎らに植ゑた角竹の蔭に、苔蒸した雪見燈籠が立つてゐる。三方、建仁寺垣で仕切つてゐるので。お柳はワッフルを兩親

に勧めて、自分も一つ箸で挿んで取つて、それを二つに折つて、口へ當てゝ見たが強ひて食べるでもない。

「眞に保衛さんにも困つて了ふね……晩飯位家で食べて行つたつて善さうなもんだらうにね。」

母はいかにも娘が可哀さうなといふ面地。
「何だか何うも……矢張、家の物ではお氣に召さないのございませうよ。」

「近頃何うも、家に尻が据らぬやうになつてやなう。」修造も思案顔。
「私等が事も氣に食はないのでありませうよ。席が歸つてからといふもの、保衛さんの仕向が何だか違ふやうですもの。」

「そりやア阿母さん、何んでもないひがみといふもんですよ。畢竟は私が御氣に召さないのでありませう。この歳になつて、子供と云うては無し……且那樣へも眞に御氣の毒なりませんわ。」

「子供が無いからと云つて、そりや何うも天運だから仕方がないさ。」

「否え子供の無い許りぢやアありません。厄介なお荷物を背負ひ込んでといふ心が何時も保衛さんの胸中にあるんです。ハイ、この二三年、

何うも左様云ふ風が見えますもの……」

「阿母さん、そんな事はありませんよ。」とお柳は眼を大きくして低聲。

「否え、ない事はありませんよ……又、満更ら無理でもないだらうよ……それはまア兎に角、庸之助が歸つて来たもんだから、私等はあの子に係るのが當前でさア、否應云ふ譯はありませんから押掛けて行かうと思ふんですがね、お父さん……」

「そりやアあの子が、私等を養ふのが當前だからなア。」と強て先は云はない。吐息をして唯腕を交いてゐた。

「ですけれども給金は少し、それにあんな毛唐人と一緒に、阿母さん辛抱が出来るもんですか。」とお柳は髪の中を銀簪の脚で掻き／＼してゐる。

「それがさ、又あの儘にしてちやア腐れ縁で、斷れるつて元事はあるまいし、其中又三毛猫のやうな眼色をした赤ん坊でも産んでくれた口にやア家の恥、親の恥だらうぢやアないか。今の中に苛り出して追ひ返すやうな事にしなくつちやア、ねえ、お父さん。」

「ウム、左様云やアまアそんなものだが……」と危ぶむやうな調子。

「苛り出すつて……左様さね、苛り出しては了れりやア好いけれども。」

「何んでも彼でも汝、あんな者ア苛り出してやらないぢや、眞に人様へ話も出来ないよ。保衛さん等も少しは左様云ふ了見から、この頃汝に辛く當り出したんではなからうかとも、考へてゐるんさ。毛唐人を妹に持つてゐるんだんかと思ふと、誰だつて全く好い氣持やアしないからね。」

「そんな事でもありますまいけれども……併し、雜種兒の事なんか思ふとよですわねえ。」

「ウム、雜種兒の孫ぢやア何うも早……昔なら、斬つて捨てる處だハ、ハ、ハ。」と修造は苦笑ひ。

「何う云ふ了見であんな者になつたのだらうね我子ながら愛想が盡きて了ふ。」

「庸さん米國でお世話になつたつていふ、そこらの義理からでもありませんが、親同胞の事も少しは考へてくれないうぢやア困りもんです。」

「世話になつたつて、あんな毛唐人なんか忌だ忌だ。」ぶる／＼とお節は身慄をした。折節洋犬が庭先で突如に吠え出した。

(二十二)
惠美耶の居室であつた二階の八疊の間は悉皆

取形附けられて、窓簾を外し、書棚を運び去り、卓を取除け、上敷の絨毯を捲き上げて元の疊のまゝで障子を立て附け、日本風の昔に復されて了つた。こゝは一昨夜移り住む事となつた庸之助の父母の居場所となつたので。

お節は今、惠美耶を二階へ呼び上げて室内を掃除させてゐる。采配を持つた手附が可笑いといふつては笑ひ、拂ひ方が粗略なと云つては、白い眼を光せて、

「そんなに無茶苦茶に敵いぢやつては紙が破けつ了ふぢやないか。玻璃戸たア違ふんだからね、氣を附けないぢやア……」と痛走つた調子。

「これ位でよろしうありますかね。」見返り見返り極めて軽く、緩やかに、恐る／＼はたいてゐる。

「そんな眞似をしてちやア……そりやア汝何んだね、遊び事をやつてゐるんぢやアないか。塵埃を拂ふんだよ。塵埃を……」

惠美耶は来れて、黙つて當惑さうな眼色で、佇んでゐる。

「オイ汝、何をしてるんだよ、木偶の坊だねえ、御苦勞な、わさ／＼遠方から遣つて来て、そんなさまたちやア汝、汝の國の恥辱だらうぢやアないか、女の仕業が一つ出来ないぢやア、汝

眞實に……貸して御覽、貸して御覽。」

尖り聲の、拖ぎ奪るやうに采配を取上げて、手ぬくバタ／＼と障子を叩いて見せて、

「斯うするんだよ、分つたかい、分つたかい……汝一體そんな極のびらしやらしたものを着てるから、當り前に働けないんだよ。」

惠美耶は唯黙つて、素直に教へられたやうに、バタ／＼遣つてゐる。

「何だか手附の可笑いこと、毛唐人の天手古舞見たやうだよ。ホ、ハ、ハ、ハ。」

その意味が解せたか解せないのか、一寸お節の顔を見やつて、又果りと、障子の塵をはたいてゐる。

「オヤ……」と俄に、お節は耳を傾けて、

「何んだか、湯か何か煮え越してゐるやうだよ。オイ汝、愚圖々々してゐないで、早う下りて見な。」

「ハイ……」惠美耶は逸早く身を翻へして、蒼情階子段を駆け下り、直と、臺所へ入らうとする出合頭、「あらッ……」と周章で、お巻は

給の袂へ何か隠して、そして例の瞳に狐疑深い光を浮べて鬼胎を含んだ顔色で一寸仰ぎ見て、伏目になつてそのまゝ、其處に佇んで了ふ。

惠美耶はチラと見やつたが、擦れ違つて駆け

入つて、丁度七輪の上で果りに煮え滾れて、水

蒸氣をもや／＼雲のやうに揚げてゐた鐵瓶を急いで下の臺へ取卸しながら、

「あの、お巻さん一寸……」と呼び留めた。逃げもやらず、去りも得せず數居階で躊躇うてゐたお巻はギツクリ、胸に應へたやうにじろりと振返つた。

「あの、今のお見せなさいよ。」

「何アに……」白ばくれてゐる。

「今の……今の袂の中の、何あります。」傍へ寄添うて、威嚴を含んだやうな眼でちつと見下した。

「何んにもありません。」

「一寸見せて下さりませよ、私、貴方を悪く思ふでありますん、私、貴方の爲、思ふのであります。」云つて、袂の中へ手を遣らうとする

と、周章で、顔色を變へて振拂はうとした途端、ボタリと袖口から翻れ落ちて、敷居の上でガチャリ、音がしたのは緋の天鷲絨の錢入、臺所の棚に置いてあつたのだ。

「これ何うしたのあります。」拾ひ上げて、鼻頭へさし附けると、唯もう顔を眞赤にして、言葉は無い。

折柄、水口へ影を見せたのはチビ六事、改名、

約翰、上州事、改名、馬太、この二人が、玉葱

を一ぱい手籠に入れて、兩方からそれを掲げてえつちら、おつちら今八百屋から漸く歸つた處

だ。お巻が來て以來、又尻を据ゑ込んだものと見える。

「あらお巻さん泣いてゐるわ。」何うしたんだい。」

「汝さん等は、それを其處に置いて、早く彼方へ。」と颯と追拂うて、「お巻さん、貴方、何うも手解よくありません。」

お巻は口惜しさうに、ワツとばかり泣出した。二階から誰か、段階子踏み鳴らして下り立つ氣色。

(二十三)

「この子を汝、何の咎があつて虐めるんだい。自分に何一つ女の業が出来もしない癖に、生意氣な事をおしてないよ、この子に何んの悪い事があるんだね。」お節は憤らしさうに利口を曲げて、惠美耶を睨み詰めてゐる。お巻はおろろ、お節の顔を窺み見ては、涙を拭いてゐる。

「この子手解悪いありますので……」「手解が悪いつて……何うしたんだね、苟且にも日本人だよ、矢鯨にそんな事を云つて傷を附けられちゃア、日本の恥辱だからね。」

惠美耶は唯、愁然として頭うなだれて、両手の指先を襟の上で又み合はせたまゝ、敢て口答もしないで、嬾々とした姿は、聊か打振ふかのやう。

「お巻さん 蝦蟆口盗んだんだよ。」水口の横手の柱際から眼ばかり出して喚く。これはチビ六の約縁先生、最前から隠れて様子を窺うてゐたのだ。

「何んだ、こんな餓鬼奴ツ……入用ぬ事を喋るんぢやアない。」と白い眼を見せ附けられて吃驚したと駈け出す。

「お巻が盗んだよ。」こたびは上州、水口へ一寸姿を見せて、電のやうに消えて後園へ約縁の後を追うた。

「蝦蟆口なんて……お巻そんな事をしたのかい。」

「左様ぢやアなくつて。」と眼を赤らめてゐる。

「一體末だ眞の子供で、何にも分らない年配なんだもの、蝦蟆口なんか、つい抛り出して置くのが悪い。」

「ハイ。」と云つて惠美耶はそれにも一言、言抵抗はしない。

「子供なんていふものは、つい、物を見ると欲しがるもんだから、そこは大人が好く氣を附け

て始末して置かなくつちやアいけないよ、好いかい。」

惠美耶は唯叩頭してゐる。

「オヤマア……あんなに炭火を無駄にしてちやア汝、罰が當るよ。」と、ふと氣が附いたやうにお節は臺所へ駈け入つて、七輪の中の、活々と青い煙を揚げてゐた炭の燃さしを一々火消壺の中へ插み込む。惠美耶ははら／＼して、後から蹤いて行つて、うろつき廻つてゐる。

「臺所の事は汝が氣を附けて、最少と確かりやならなくちやア困るぢやアないか、日本ではね、軒家の女房になると、皆それが當前の役目なんだからね、朝つ原からビー／＼歌を唄つたり客がありやア説教だとか何とか、女だてら賢立てにべ、チャクチャ／＼お喋舌なんかするのが能ぢやアないよ。好いかい、汝の國の風が造りたけりやア汝の國へ歸つてお造り、此國ぢやア此國流にやつて貰はないとね。あの、飯なんかもあんな焚き様ぢやア不味くつて、から、食べられりやアしないからね、最少し水加減をして、火を引く時分に餘程氣を附けてね。好いかい。そして又豚や牛やあんなものはあまり私等の口に適はないから常時魚が、野菜物にしたら善からう。第一其方が安値上でもあるし、この

月給の少い中でなか／＼贅澤な眞似は出来ないんだもの。そして又、あの二人の餓鬼は、汝が物數寄から養つてやつてゐるのださうだが、彼こそ眞とに、何にもならぬ穀潰しだから、早速追出つ了ふが好いやねえ。」火箸を握つたまゝ、少し煙さうに顔をしかめながら、あまり前ほど刺々しくはないが、一種底に針を含んだやうな云廻しである。

惠美耶は素直に、唯ハイ／＼云つて聽いてゐた。

「漬物なんかも始終買つてちやア大變だから、自分で漬け方を覚えるが好い。」と捨棄辭で、

「お巻や、二階へお出で……汝は私等の氣に入つたよ、何となく可愛いんだもの。」

頭を撫で／＼小い肩へ手を掛けて連れて行く。後を見送つて、不思議惠美耶はボロリとした。周章で、手甲で拭いて、茫然と其處に夢見るものやうに突立つてゐる。

玄關の障子が明いて、悄然と足音も立てず歸つて來たのは夫であつた。段階子の蔭越に、それと見るより、惠美耶は忽ち南京兎が跳ぶやうに、いそ／＼と袂を曳いて走り寄つて、訴ふるやうな眼附で、そして優しい兩の手を擴げて、いきなりその首筋へ絡んだ。

庸之助もさすがに、緊と小脇に抱き緊めたが、二階を憚つてか息を潜めてゐる、顔色は少とも浮立つてゐない。

(二十四)

市ヶ谷監獄の女監第十三號の房では、今見廻りの女監取締の靴音が漸く遠ざかつたのを聞澄まして、例の密々談の聲が稍高まつて來た。今日は朝から空合の雲行怪しく宛ら大蜘蛛の形したのや、化蜘蛛の形したのや、其外いろんな形した眞黒な雲が、果りと辰巳の方から、丑寅の方角へ向つて走つて行つて、空気が重たく、何んだか斯う鉛でも包んでるやうで、呼吸するさへ息苦しかつた。

「姉御一體何うしたんだねえ。何日かの時やアオイく、泣出さんだし、今日は又、あんな亂暴な、一寸教諭師様にお物を申上げ度いの何のつて……つまらない、減食なんかにやられてさ。」と切髪の肩間に疵のある、大年増が云ふ。

「一寸岡惚れといふ寸法なんかね。」これは噁れた聲。

「そんな浮いた事ぢやアないのさ……あの方は鳩宮さんつて、牛込教會の牧師なんだよ。」濕つぽい重味のある聲で云つたのは、故殺犯の一番古顔で、この房の頭とも云ふべきなんだ。

「矢つ張、ホの字と來てるんだよ、耶蘇の先生の、何處の教會つてえ事送ちやんと聞き附けてさ、あの、顔の蒼青な、梅毒の骨がらみつてな取締が云つて聴かしたんだね、……あの、意氣惡のおしやべり山姥が……」これは何か其人に怨があるもののやうに片隅から、
「左様でもないのさ。」と、軽く打消して唯思案に沈んだやうな調子。

「まア、喧嘩はお廢止、能くそんな氣樂な事が云へたもんだ。」と、さすがは頭の威光、昇り締めぬ中に雙方を仲裁へて、そして自分では深い細い太息をした。
折ふし、ばつと雲の幕が一筋、天の利力で斷つたやうに引裂けた。その間から今丁度、西に沈みかゝつた夕陽が、宛ら満大に朱を流しかけたやうにあか／＼と輝いて、それが斜めに大地にさし映つて、邊は一面の黄金世界、今迄薄闇かつたこの房の中もあり／＼と、六人の女囚の體がそれへ反射して、暫し黃黒い一種の土色を帯びた女夜叉の坐像を、岩窟の中に安置したかのやう。

「オヤマア米れつちまふよ、汝見たいな茶髪に岡惚れされた目にやア、耶蘇さんも随分迷惑するよ。」と片隅の女。

それが又ばつと一瞬時に振き消えて了ふと、暗まぎれに靴の音が敷石を刻んで來る。
何處か大空で、ゴウ／＼と物恐ろしく鳴るやうな響がしたかと思ふと、刹那、颯と一陣の魔風が土砂を捲いて吹き起つた。

「盗夫して、こんな處へ入つて來た癖に、口幅つたい事を云ふよ。」茶髪が、仇討のつもり。
「汝何んだ、そんなさまでよく小恥かしくもな

く壯士俳優連に惚けちやつて、萬引なんか稼いで來てからさ。フン、ちゃんちゃら可笑いよ。」と聲高になる。
「まア、喧嘩はお廢止、能くそんな氣樂な事が云へたもんだ。」と、さすがは頭の威光、昇り締めぬ中に雙方を仲裁へて、そして自分では深い細い太息をした。

上で死物狂に吼え狂うて、それに聲を合するの
ではあるまいか。ゴウー／＼と鳴る響、ヒュー
ヒューと叫ぶ音、さしにも堅き屋根の瓦が鱗を
剥ぐ如く五枚三枚と抜け落ちて、あれ程手丈夫
に葺と建構へた獄屋の根太からメキ／＼怪しい
音を立てあはや天上へ吹き飛ばされんず勢。
何となう身に迫るやうな物凄さで、咫尺を辨ぜ
ぬ間は瞬く間に、大魔の手を擡げた如く四邊を
領して了つて黒闇々、今にもこの世界が全く滅
ぶるのではあるまいか、このまゝ奈落の底へ陥
るのではなからうか。吹くわ、吹くわ、物恐ろ
しい大虚空の叫びは轟々と一秒、一秒毎に深く
深く身節に沁み込むばかりに。

かゝる夜はさすがに警戒怠りなく、看守長、
部長、劍の音をガチャ／＼させて、外套が鳥の
兩翼を擡げたやうに、體には着かないでふは
ふは吹き捲る／＼をも物の数ともしせず、必死と
なつて辛くも大暴風と争ひつゝ、危き足元を
踏締め／＼、果りに巡廻してゐるので。
雨がぼつ／＼降り出したのは彼は十二時過で
あつた。風力は未だ少とも減する模様が見えな
い、累りと天に荒れ狂ひ、地に怒り叫んでゐる。
今は暫し靴音も途絶えて了つた。

「オイ、皆起きるんだよ……占めたぞッ！」と低

聲の、しかも裸としたのが、件の、女監第十三
號の房で響いた。

(二十五)

一旦、惠美耶と共に、寢臺の上に身を構へた
のであるが、叫び狂ふ大暴風の音が忌に耳に附
いて、何うも怪しく胸騒ぎがして、寢附かれな
い。傍では早細い、密蜂の囁きのやうな聲
を立て、無心に眠つてゐる。玉洋燈の、ほの
暗い火影で斜めにその寢顔を見やると、如何に
も、心の底から安らかさうで、此世の罪と云ふも
のは知らぬらしい。定めて天國の夢でも見てゐ
るのであらう。夢の中に荒爾と口元で笑んだ、
それが如何にも可憐で、又如何にも羨ましいの
で、呢と眼を放さないでゐると、此度は眉をビ
クリと動かして、その白い、艶やかな眉間に少
し皺を寄せた。何うしたのであらう、又阿母さ
んに虐められる夢ではなからうか、左様思ふと
可哀さうで、いとしうてならぬ。何だか斯う、
頬邊が少し殺けて來たやうに見えるのでも、日
頃の心痛、氣苦勞の程が推量られる。救してく
れい、心底、慰めて勞つて追りたきは山々で
あるが親の前では左様もならず、實に腸がち
ぎれる思ひのみしてゐるのだ。

惠美耶の眉間の皺が自と消えて、又白々と光

るやうになつた時、庸之助は更に、自分の罪と
いふものが恐ろしく身を責めて來た。宵の程か
らの大暴風で、屋根が剥れ、瓦が飛び、塼が頽
れ、何だかもう家がそのまゝ飛んで行つて了ひ
さう。これぞ、この世の末日かとばかり心慄
かれて、今、天軍が自分の汚れた魂を奪ひ返
しに來たのではあるまいか、エホバの震怒で、
自分は今宵粉砕さるゝのではなからうかと、安
き心は微塵もない。それに、纖弱い女の身が、
枕を高くして、すや／＼と熟睡の夢に入つてゐ
る、罪の無いものは結構なものだ。

丁度、雨の響がボツ／＼屋根の瓦を打ち始め
て、それが何だか悪魔の嘲笑の聲のやうに聞え
さるゝので、庸之助は最早堪らない、ぶる／＼ツ
と身慄しながら寢床を脱け出て起上がつた。
隅の寢臺には、約翰と馬太、二人の少年が抱合
うて眠つてゐる。お卷は二階で愛せられて、今
宵も例の、父母の中に抱かれて眠入つたのであ
らう。

寢室は玄關に隣つて、この頃は惠美耶の室と
兼帯なのである。庸之助は玉洋燈の心を捻ぢ上
げて、夫を手にして、やがて己が居室へと入つ
て行つた。が、同時に怯として不思議留まつた。
背は早一面の生汗、氣が附いて見ると洋燈の火

影が、正面に床の間の、油畫に射し懸つたのである。ア、耶穌の畫像が惡魔と見えるやうになつたか。否、自分が早惡魔になつて、耶穌が恐ろしく見えるのであらう、もう駄目だとそゝろ嘆息した。

やがて類然と椅子一凭れかゝつて、茫然と考へ込んでゐる。何だか非常な物音が屋根の上で聞えた。ハツと思ふと、冷汗が又背に一ぱい。會堂の屋根の瓦が落ちて懸つて來て碎けたのであらう、こんな事に怯えるやうになつたとは、更に太息した。

庸之助の左なきだに掻亂されたる胸は、今日、監獄の教誨堂で、我に物云ひ懸けんと立騒いだ女囚を見た時に、殆んど致命の大傷を受けたのである。罪なるものの如何に恐るべく、又神様の罰なるものの如何に嚴かなるかを、今更身に沁み入るやうに感じたので。

吹くわ、吹くわ。暴れるわ、暴れるわ。罪の子を吹飛ばし、人類の種を打滅さんとエホバの震怒が、末の世に臨んだらしい、今夜今夜！

(二十六)

又しても、又しても、罪の子よ、惡魔の兒よ、サタンよとばかり連けさまに、天空から喚き叫んで、會堂の屋根越しに、自分の頭の上を掠め

て行く嘲けるやうな、悲鳴するやうな聲が、暴風雨の中を劈いてあり／＼と聞え渡つてゐる。旗竿の唸るのであらうと思ひ直して見ても、何うしても左様だとは思ひ直されない。兩曹黙せば石號べしと基督は宣給うた。旗竿が號んで、正に自分の身の罪を呵責するのであらう。旗竿の號びは旗竿の號びでないのだ。庸之助は胸を打つて、やがて兩手を耳に蓋うて了つた。

耳は蓋うても、目は塞いでも、心の鬼胎と懷きとは、なか／＼に靜まる段ではない、旗竿の號びが今良心の號びと代つて、罪の子よ、惡魔の子よ、サタンよとばかり、肉を挫ぎ、骨を抉る苦しさ切なさば、以前にも倍する心地。女囚の怨めしさうな顔があり／＼と幻に浮ぶかと思へば、小娘の傍が眼の先にちらつて來る。そしてそれはお卷に似てをる。否お卷である。お卷と女囚とが交る／＼に見えて、やがては蕙美耶の睨むやうな眼色、母の泣き出しさうな顔、姉のお柳の心配さうな様子、宛ら萬花鏡を覗くやうに、心の底でくる／＼と廻り廻つてゐる。

かゝる中にも又してもあの、お卷といふのは、自分の娘に違ひなからうといふやうな氣がしてならぬ。姿形は見更へるほど變つてゐたけれど、あの女囚は慥かお澤であつた。時も時、折

も折、斯く兩刃の鋒が、この罪の身を刺し貫くのも、畢竟神様の冥々の罰、主の正義の犯すべからず、蔑ろにすべからざるを示し給ふ所以である。身はこのまゝに碎けよ。心はこのまゝに消えよ。骨は灰となれよ。肉は塵に歸れ。我身は實に天地容れざる大罪人である。

虚空は大波の荒狂ふ響、瀧津瀬の鳴り轟く音降りしきる雨はやがて九天の銀河を決して、ざアざアざツとばかり横しぶきの、斜めに戸や窓へ打かゝる。それが宛ら幾百の怪獸が襲ひ入らんとして、鋭い爪で搔り附くかのやう。屋根の上では、惡魔がしきりと跳つてゐる。狂つてをる。會堂の方に當つて嘲笑ひの聲はいよ

よ高く、いよ／＼迫るやうだ。
庸之助はもう生きながら地獄の火に焼かるゝかとばかり、満身の血は逆流して、暫し頭が破れるやうであつたが、やがて氣も次第に遠くなつて、何だか冥府の使の暗車に乗つたまゝ地の底へでも引入れらるゝやうな心地怪しく、ほとほと滅入り込んで了ひさうなので、これではならぬと、漸と氣が附いて、洋燈の心を又一捻捻ち上げた。室内がぱつと、以前に倍して明るくなると、心が妙に引立つて來たが、床の間の男天の耶穌は、此方を睨んでゐるかの如く、とて

も正面には見られなかつた。

風の聲、雨の音の中から、何だか戸を叩くやうな音が微かに、ふと耳に入つた。氣の所爲だらうと思つて見たが、何うも左様ではないらしい。自分の名を呼んでるやうだ——、耳の所爲か知ら。

小頸を傾けて、静と斯う氣を靜めてゐると、矢張戸を叩いてゐるやうだ。随かに門の戸を叩いてゐる。この大暴風雨の中を怪しさの限り。さては、これぞ冥府の使かと思ふと、何んだか麻柱寒いやうで、庸之助は二度三度戰慄した。

(二七)

庸之助は宛ら死人のやうな眞蒼な顔をして、未だ止まない胴軀ひの、足元踏み緊め、洋燈持つ手も戰きつゝ、己が居室へ入つて来ると、後から蹶き隨ふものがある。その影法師が洋燈の火で、窓徹の上へ映つたのを見れば、大童の、髪振亂した魔ものの姿である。

椅子を興へてやつたが、その欄を捉へたまふで未だ突立つてゐる。遂の如く亂れた黒髪が濡れしよばけて、雫がぼた／＼耳際から、浅く皺の入つた額際から、頼骨の高く尖り出た頬邊へ溢れをなして垂れかゝり、眉毛が長く延びて、目が窺んで、その底にはどんよりと一種濁つたやう

な光のある、口元の稍曲つたやうな、何となう淋しい何處か邪慥らしい女で、しかも身には薄紙の如くなつた柿色の囚衣がヒタと食着てゐる。その袖からも襟からもぼたり／＼水が垂れて、浴びたやうにびつ／＼濡れ鼠である。

庸之助は斜めに椅子へ寄りかゝつて、チラとその顔を見遣つて、直ぐに眼を弱らし下向になる。女は一心に、庸之助を見詰めてゐる。

「それぢやア何んでも氣持が悪からう……私の衣物でも……一沈んだ顔へた調子で云つて、又一寸見上げて、立かゝる。」

「逃ちやア忌ですよ。」と物凄く笑つた。

庸之助は唯黙つて、蠟火奴を持つて出て行くのを、振返つて見送る途端、手甲へばつと洋燈の光を浴びた。鮮血が血紅を染めて、ぼたぼたと滴つてゐる。

暫らくして、庸之助は、紺ネルの衣服一枚と、三尺帶を手にして入つて來たので、

「難有う。」と軽く叩頭したまふで女は片隅へ行つて、囚衣を脱ぎ捨て、丸めて置いて、わなわな慄へながら、それを着用了た。

庸之助は凝と、その後姿を見守つてゐたが、やがて、彼方で振返つたので、周章で伏目になる。戸外では猶しきりと、雨風が暴れ狂うて

ゐる。例の叫び聲も、耳に附いてならぬ。

「驚いたでせうね。庸さん、驚いたでせうね。」と馴々しく云つて、椅子へ寄りかゝつて顔を覗き込んだ。

「左様です……何うも驚いて了つて……。」と未だなか／＼動悸の靜まらぬ様子。

「實はね……もう何から云つて好いやら分らないけども……、庸さん、貴方は随分、し、酷いぢやアありませんか。」

俯向き込んで了つて、何とも返事がないので、

「庸さん……と、椅子を一搖前へ、押進ませ

て、

「庸さん、私は貴方の爲めに、何んなに苦勞したか……それに貴方は薄情な、私を打捨つていて何處へか逃けて了ふのだし、後で私も何んなに……」

とばかり、胸が差迫つたやうに言葉は途切れて、そのまゝ袂を顔に押當て了つた。

庸之助は何とも彼とも云へない、唯もう腸が寸斷々にせられるやうで、言葉は出せないのである。

「ね、庸さん、貴方はもう……貴方はもう、私に愛想盡したのであります。十年経つたらもうそんな……ハイ私は罪人です、囚徒です夫

殺しの大悪人でございます。口を利くもの汚ら
はしいか知りませんが、その罪人には……その
夫殺しには誰がしたのですか……庸さん、貴方
にまで愛想盡される理はありません……そりや
アね、誰を知らない人は、鬼となつて蛇となつて、勝
手に云ふが好いでさア、けれども庸さん、貴方
にまで……」と云つて、涙を拭いて、そして依然
當年の情人に戀を語り愛を分つといふ素振。
「そりやアね、私だつて、滿更世間の義理といふ
ものを知らないぢやアありません。けれども、
その今の、妬つて云ふのが、私は何うも蟲の好
ぬ、忌な、忌な、おまけに恐ろしい嫉妬家なん
でね……、それも何か、お父さんが訴訟事件の
失錯から刑事の罪人にならうとしたのを都合よ
く仲裁したとやらで、それを恩に被せての、押
懸妬つてなもんでさア。かねて私に横戀慕して
たものと見えまして、貴君との中を妨げたのも、
畢竟、其奴の仕業なんでしたよ……丁度ね、も
う懷妬てたもんですから墮胎して下へつて、私
を虐めて、虐めて、虐め貫くんぢやアありませ
んか……。阿母さんは成さぬ中だし、お父さん
は御病氣で臥つてお居なさる、私はもう氣が
狂ふやうになつたらうぢやアありませんか……
庸さん、少たア察して下すつても。」ぶる／＼慄

へながら云つて、口惜しさうに袂の先を喰ひ縛
つて、涙の眼でちつと見た。

あゝその涙の眼、昔の愛に輝いた火のやうな
光はもう消え失せて了つて、優しい、床しい、し
やかな顔容は最早尋ねるに由もない。暖い
手を握り交して、戀を囁き合つた、あの可憐
の少女がこれであるかと思へば庸之助は先づ、
謂不知涙含まるゝのであつた。

(二十八)

風は少し風い、雨が今、土砂降に降りしき
つてゐる。何處か笈が落ちたのであらう、軒の
玉水、不絶忙がしげに細語くやうな音の、それ
にも心置かるゝのである。

「全く私が悪いので……私の罪で……決して
左様……内徒だから、罪人だからつて、そんな事
は。」と、庸之助は吃りながら漸く云つた。

「ぢやア貴君は、あの私の事を……」と少しは
笑顔になつて、「あの……私の顔が分らなかつ
たのですかね、始めて教誨所へ御出なすつた時
は……」

「私は唯一心に、説教してるのだから……」
「私は一目見ると、何うも貴方のやうに思ひま
したから、懐かしいぢやアありませんか、他人の
空似だつても懐かしいんですもの……看守長

が、鳩宮先生だつて皆に紹介しました時やア
私はもう直と飛んで出ようかと思ひましたけど
も、場所柄が場所柄だからと漸と控へてゐたの
ですが、あの、夫に捨てられて罪人になつたも
のあらうつて、御説教なさつた時やア、もう
胸が一杯になつて、泣出したらうぢやアありま
せんか。」と眼を拭いてゐる。

「濟まない事をしたねえ。」と、庸之助は敢てそ
れに答へるでもなさうに、唯唯やくやうに云
つて、ホツと苦しい吐息を吐いた。

「その後ね、取締に密と聞いて見ると、鳩宮庸之
助さんで、牛込教會の牧師だつて云ふんでせう。
それから一日逢つて、話が仕度くつて／＼な
らないんですから、大膽な、牢破りを目論見ま
してね。」

庸之助の眼色は動いた。
「同じ房の、皆のものを堀て、から、古釘を擦
んで来て、毎晩々々、少しづつ羽目板を毀しか
けてね、一月計り懸つたのです、今夜の暴風雨
に紛れ込んで、皆脱けて出たんですが、一番終
の奴ア、目附かつて愚圖々々してる中、部長に
切られちやつた様子です。」

「……」
「斯うして、も、少とも安心はならないんです

から、貴方今から一緒に、何處へ連れて逃げて下さいな、ねえ貴方……私を可愛さうだと思ふ心があるや……」

「……………」

「二人で氣樂に暮されるやうな處へね……」

「……………」

「貴方、子まである仰ちやありませんか。」と急ぎ切つて、さて調子を緩めて、

「その今の貴方の風つてえのは、字の中で産み落しまして、六歳の時、看守長の處に引取つて貰つたのですが、その後逃げ出したつてね……何處へ行きましたか……お巻といふんで、可愛らしい娘子でしたがね。」

「愁然として、霜味の眼元で、つくづく訴ふるやうに庸之助を見上げた。庸之助は今更紗と胸に當つたやうに、顔色を變へながら、固く胸元をしてゐる。心臓の鼓動の高く跳るやうなのが、衣の領へにでも分つてゐる。」

「貴方、何處へか連れて行つて……それとももう令閨さんがおゐんなさるのですか。」と少し甘えたやうな調子で意味を云ふ。

「お澤さん、私は牧師です……何卒、汝さんは自首して出て下さい。」と、屹として庸之助は云放つた、容を改めて、今、犯し難き威厳を

含んだやうな顔色である。

「エ、牧師……それは承知です、牧師さんだから私をお見捨てなさるやうな薄情な事はなさるまいと思つて、それで逃げて來ましたので。」

「私は……私は、これでも牧師です。」と顔へ聲。

雨垂の音がポツ／＼、何だか嘲つてるやうに聞做される。

「牧師つて、そんな邪慥なものです……生氣な娘を欺しちやつて、子まで生して、擧句にやア夫殺しまでさしといひ、知らない顔をしてゐるんですか。」抉ぐるやうに云つて、しく／＼鼻汁を啜り上げた。

庸之助は肩から出るやうな吐息をして、堅く眼を瞑つて、小顎を傾けてゐる。雨は小降になつてし／＼と、戸外から人の貌ふやうな氣色。お澤は四邊を振返つて、怯として、自分の影法師だと氣が附いて、漸く胸を撫でた。

今斯くと思決したのか、庸之助はぱつちり眼を睜つて、しきりと次の室の方を氣にする様子。名残の風が一吹ビュー／＼と物泣く、旗竿の邊で鳴つて行つた。

(二十九)

「昨夜のやうな大暴風で、屋根が飛んだり、垣

根が倒れたりなんかすると、又汝の入費だと思つて、私やア眞に胸が痛くなるのよ。」と、母は二階で、四人が朝餐の食卓を圍んだ時に、庸之助の顔を見ながら心配さうに眉を蹙めて云つた。

四人とは勿論親子夫婦の者であらうと早合點せられるのであるが、左様ではないのだ、惠美耶は此の一家團聚の食卓から遠ざけられて、後で、約翰馬太の二人と共に食事を済ますのが常例になつてゐる。畢竟、母が、あの碧い眼玉を見ても胸が痛へて食物が喉へ通らないと云ふから起つた事で、その代りにお巻が御給仕役として、其座を與へられてゐる。庸之助は親の命令に背く譯にはゆかず、惠美耶へ對しては氣の毒千萬であるし、食事の時は常時もこの事を考へ出して、筆を執るのも忘れがちなのである。

「大分、彼所此所破損したやうだよ、困つたものだ。」と父の修造も心配顔。

「なう、庸や、瓦なんか大分飛んちやつたやうだよ。」と母は稍聲高に云つた。

「ハイ……瓦ですか……」と心此所にあらざるもののやうな返辭をする。

「大分入費だと云ふ事よ。」

「ハイ……修繕費ですか……その方は會堂の

維持費から出す事になりますので。」

「左様かい……左様云ふ事ならまア好いけども。」と母は一寸言葉を切つて、小頭を傾げ、

「併し、それでなくつても、この月給の少ない中から、何や彼や、汝も入費が多くつて、弱つてゐる處へ第一、あんな、何處の牛の骨か馬の骨か分りもせぬものを二人までも養うてやつて、ありやア眞に何うすると云ふんだね。お卷は寮所の方の役にも立つし、養甲斐があるといふものだけども、あの子供なんか、眞に下らない骨頂ぢやアないか。」

「あれは又、妻が孤兒院を立てたいと云ふので拾ひ上げたのですから、阿母さんには先日もお話しましたやうにその方の費用は亞米利加から送る事になるでせう。」顔を上げて、極めて細い、力無さうな聲で云つた。

「亞米利加の方から……汝の月給もその方から送らせたら何うだい。」と父は分別顔。

「左様云ふ譯にはゆきませんので……」云つて、又深く考へに沈んでゐる。今朝は別に一つ、大きな心配事が胸の重石となつて、飯も漸く、一枡が力限りであつた。

「も一つ、装ひませう。」とお卷は、教へ込まれて言葉も丁寧な、源と庸之助の顔を見上げた、庸

之助も不思議、それと瞳を見合せて感に堪へざるもののやうに吐息をして直と他方を向いた。

何うして飯を食はないのかと、父母に怪まるるを、少し頭痛と云紛らして、やがて段階を下りかけた。段階の下を今、周章で、飛び退いたのは惠美耶である。腰を掛けてゐたのらしい、其處へ降りて行くのを立迎へて、そして赤らんだ眸で庸之助の顔を見る。手には革表紙の聖書を持つてゐた。

「何うしたの……」沈鬱な聲で問ふと、

「何うもしたのありません。」泣いてゐたらしい、星のやうな瞳が濡んでゐる。

「何んにも心配しちやアいけない。」不思議な顔をして、我にもあらず、その手を確と握る、

「温い血が全身に波立つやうである、惠美耶も確と握り返して、感謝の涙が一滴、長い睫毛を傳うた。

折ふし、朝の讃美歌を唄ひつゝ二人の少年が入つて来た。庸之助はふと心附いたやうに、眼を擧げて、後の庭口の方を氣にしてゐる。

(三十)

板片やら、木葉やら、小枝の折れたのやら、窓の戸の飛んで来たのやら、葺屋、古帽子、傘の骨、何や彼や難多と、塵溜桶を引くり返したやうに散亂してゐる。前面は生垣だから、左程破損もないが、門の柱が少し歪んで根太が怪しくぐらつてゐた。庸之助は、一巡、屋敷内から會堂の周囲を見廻つて、さてその境界の木小屋の前へ立戻つて、暫らく下駄の先で小石か何か踏み躓つて躊躇してゐる様子であつたが、遂に其處を離れて、家へは何とも云はず、門の外の方へ出て行つた。セルの單衣に常着の、久留米紬の羽織着流のまゝ帽子も冠らず、散歩であらうか、それとも何處へかと、不審さうに、惠美耶は櫛を使つて鬢毛を掻き上げながら、水口の敷居際立つて、その後影を目送してゐた。

道へ出て見ると相も不變瓦の碎片や、板片や、中には、大きな兩戸のやうなもの、則ち屋根のそのまゝ剥れて飛んで来たやうなもの、豚屋の看板、ヒーローの廣告、濡れ草履、松の小枝、いろ／＼算を亂して處狭く落ち散らばつてゐる。その中を右に左に縫うて、やがて曲角の交番所の前まで来た時、辻に立番の巡査へ危く行當らうとして、庸之助は始めて眼を上げたが、胸がどきりとして心臓の鼓動は俄かに高まつて来た。

一二間行過ぎるまでは、何だか呼吸が止まるやうな思ひで、今にも襟首へ手を掛けて後へ引戻されさうな気がしてならず、我不知小足早に、すた／＼と歩いて行つたが、何時しか背はびつしより汗びたになつて、腋の下は冷かであつた。ア、情ない、と日の中で呟いた。

如何にも情ない次第である。昨日までは牧師たる事を恥ぢてゐたものであるが、今日は又人らしい姿をしてゐるのさへも恥かしい。道德の罪人として天の罰を受けるばかりでは猶事が足りないで、法律の罪人として、人の罰まで身に負はねばならぬやうに、立至つたとは、何たる情ない次第であらう。思へば破獄の重罪犯を、場處もあらうに牧師館の中へ隠匿するやうな、不埒な事を仕出かしたのも、矢張、自分の手で蒔いた罪の種の、收穫をしてゐるのである。恐るべきは「罪」と、今更のやうに、四肢が打慄か

れるのである。
自首を促すやうな聲も聞える。それを打消すやうな思も萌す。自首して下へば、それで神様の前は済むのであるが、併自分一人を只管倚賴に思ふ一心から、女ながら大膽にもあの城廓のやうな處を脱け出して来て、生殺與奪の權を一切自分に任せてゐるのではないか。それを白

分が直と又、元の暗い處へ押込めて、身の潔白を證據立てようといふのは、あまり偽善の行ではなからうか。彼の女に罪はあらう、罪はあらうが、これといふも畢竟日本の社會制度が不完全で、相愛し相慕うてゐる男女の、切なき想を遂げさせず、親の威光や、金の威光で、雙方の中を無理強制して下し、押附沙汰で、氣に染まぬ者と一生涯白髪を契を強ひんとするから起つた事で、神様の眼から見たら、却つてこの女の手で屠つた人を祭壇の聖火に燐いて、今の社會制度をのろひの犠牲としたのではあるまいか。左様思ふと決して突放し、叩き出すといふ譯には行かないのである。否、それはあまり

牽強つけた小理窟かも知れない、法律と道德としかく、衝突するものではないから。餘りに自分を辯護し過ぎるのである。兎にも角にも已に罪人と名の附いたものを隠匿するのは良心が許さない。心の底に不安な處がある。然らば自首か。自首すると或は、自分も一時入監の身とならうかも知れぬ。假令左様ならないまでも自分が多少の地位名望は全く亡くなつて了ふのである。固より社會の或一部に對して有する地位と名望とは決して惜しくはない。唯植木監督の信任には何として答へる事が出来るか。裏美

耶へは何の面下げて逢はれようか、又両親の思惑は如何であらうか、或は又、此を機に銀行員となれと勧めらるゝかも知れない。ア、寧ろ中岡君のやうな心になつたら氣樂であらう。

しきりに洋大が吠立てるので、ふと顔を上げた、こゝは早田邸の邸である。自分は何ういふ氣で來たのか知ら。貸家を探さうか、自首をしようか夫を思ひ決するために儲家を出たのであつたが親が身を引くのか、此處まで來ると姉の顔も見たい。

(三十一)

離亭の小座敷では早酒宴が始まつてゐた。迎酒とでも云ふのであらう客の中岡が下手で、主人の保衛が上座、見知らぬ綺麗頭の、仇つぼく着飾つたのが、お酌役である。黒漆塗の臺の上に、鯛のあらひか何か、あつさりとした一鉢、錦手の底の淺いのが載つかつてゐる。

席の助は姉のお柳に導かれて、少し當惑さうな顔色で、其處へ正坐まつて、會釋をなし言葉少なに風見舞など云つてゐる。

「ア、何うも昨夜は大變でしたな。お庇蔭で強ひて破損もしないやうでしたが、唯庭木が少しね。御宅の方は如何でした、未だ失禮ばかりしてゐるですが、」と、保衛はさすが例の人を外さ

ぬ婉曲な調子。米琉のけばくしい鈴の上に
黒魚子の羽織着である。

「ヤア、鳩宮君か。近頃御無沙汰ばかり。昨夜は又大變な暴風雨で、御宅の方は何うです、強ひて御破損は……」中岡は膝を正して、丁寧に叩頭をした。庸之助も何か云つて會釋を返した、見れば、彼は未だ新しい仕立下しの、黒綾のフロックコート、スコッチの上柄の股袴を着し、時計の金鎖を胸の邊で燦かせてゐる。顔は赤い、彼の綺麗首も、その中何か云つて、丁寧に、庸之助へ會釋した。

「僕は其の、實は、一昨日教會の方を辭職して了つて、銀行の御厄介になる事になつたんだがね、それに就いては、此方様の容易ならぬ御心配で、實に感謝してゐるんです……之と云ふも、君等の縁に繋つてゐるからでもあるので、實に感謝に堪ない。」と頭をひよこく屈めて、
「未だ、つい何や彼や多忙だもんだから、御報知もしなかつたが、僕は丁度この裏手へ引越したんだからね、寸と又遊びに来てくれ給へ。相不變手狭だが、從前のやうな蝸廬でもないからハッハッハッ……」と押出すやうに笑つてゐる。息は酒臭い。

お柳は保衛の側に坐つたまゝ、唯黙つて、庸

之助の顔を見てゐた。

「一杯何うだね……」と保衛は杯を賜す、綺麗首は直と銚子を取上げて、
「お受けなさいました。」絹の袖が動くと、麝香の匂がふんとする。

「僕は……僕は遣らないんですから。」と庸之助はいきりに辭退する。

「ア、左様だつたね……併し、一杯位好いちやアないか。「君、折角の何だから遣り給へ遣り給へ。」と中岡が笑顔で囁かしてゐる。

「僕は……禁酒なんですから。」

「まア、一杯だから遣り給へ……お龍茫然見えないでお酌をしろッ。」

綺麗首はお龍といふので、お妾が妾宅からの出張と見える。

「貴方まアお一つ……好いちやアありませんか。」と保衛の手から杯を取つて、それを強ひて庸之助に持たせうとする、持つ事は持つたが、直ぐと疊の上へ置く、櫛はず、それへ浪々と注いだ。少し溢れ出て、疊表に斑點が附いた。

「何うも鳩宮君はあまり義理固いから困る。何の酒の一杯や二杯で廢れて了ふやうな君の信仰でもないぢやアないか、僕輩は敢て、酒一つ呑むの、呑まないのといふやうな事に重を措かな

いね。唯心で信じてきへ居りやアそれで好いんさ。ね、奥さん、少し氣を變るやうにしない」と鳩宮君は病氣を出しますよ。何うもこの頃血色が好くありませんですもの。」

「左様ですなえ、何うも病身で……あれぢやア心配でございます。」と、お柳は浮かぬ顔で、ほつれ毛をいぢくつてゐる。

「眞に何うか少し氣を變へたら善からう。こんな事を云出すと、又笑はれるかも知れないが、何うせ君、五十年の命だもの、旨い物を食つて、好きな酒を存んで、偶にやア藝者買も好からうし、出来るだけ、呑氣にやつて行かなけりやア損だらうぢやアないか。未來なんて、そんなものが的にやアならないからね。」保衛は笑ひくく云つて、蘇平が賜した杯を受けて、お龍に酌をさせる。

「そりやアまア、未來つて……いろく信仰にも依りませうが、兎に角、飲んで食つて氣樂にやる方も悪くはありませんね。」

「ハ、ハ、あれでも中岡君が、未だ悟つた顔をしてるから可笑いや。」

「眞にね、……中岡さんもこの頃は随分御盛んださうですよ。」とお龍が笑顔。

「串談云つちやア困りますよ。」さすがに、赤

面した。

お柳もむつつり。庸之助もむつつり。座は白けて来る。

(三十三)

夜も早更けて彼は十時過であつた。番町の横町のとある路次口で、今合乗車の駕格下させて、手頭を絡み合つて下り立つた二人の男女がある。

男の方は山高帽子を眉深に冠つて、二重マントが何か着込でゐる様子。女はお高祖頭巾で面を包んでゐた。神割長屋の角口から六軒目の、茫然した燈影が障子格子に映つてゐる家の前で、男は立留まつて暫らく邊の様子を窺ふやうであつたが、やがて戸口の戸をギシ／＼ガタガタ漸と明けて、

「御免よ。」と遠憚かる低聲。奥から燈を持つてはた／＼と駆け出る氣色。

「何方……オヤ、お越でございますか。」と、皺れた聲。

「何卒よろしく頼みますよ……此方へ入るが好い。」と、戸外の女を呼ぶ。

「誠にむさくろしい處でござりますが……」云ひ云ひ、「一寸豆洋燈の笠を上げて庭口に行んでゐる女の姿を一日見て、「さア何卒。」と先に

立ち、二階へ導くのは、六十前後の、眼のしよぼいしよした、猫背の老婆である。

「階子が危険でございますから、何卒御氣を附けなすつて。」

女が先へ、男は後から、恐る／＼、殆んど真直な、破れ階子を昇つて行つた。

二階は六疊で、天井の低い、窓の小暗い、古新聞を貼附けた壁が、所々落ちてゐて、疊は、煙臭い、腸が食み出してゐる。それでも、隅の方に、古い錦給やら、墨を抹つたのやら、分らぬやうな黒煤けたのが、べた／＼貼つてある一枚の襖の、手垢で光る革の引手を引くと、其處は押入になつてゐるのが、殊勝な位なもんだ。

婆が用意してゐたと見え、片隅にあつた行燈へ火を移して、何かくど／＼世辭を云つて、やがて降りて行つたので、女は、ホツと一息、お高祖頭巾を脱いで、其處へ坐つた。男は帽子も取らず、二重マントもそのまゝ、相對して座を構へる。

燈火が暗くて、忌に何んだか陰氣臭い。

「随分汚いけれど、まあ我慢して下さい。」

「否、結構ですよ。これまでの事を思やア、貴方、此處だつて勿體ないくらゐですわ。」満足

さうに笑んで男の顔を見入つた。おぼろげながら、燈火の影が正面に射し映る。それは彼の脱監の女囚お澤であつた。男は無言、庸之助。

「本部屋の中で何うも辛かつたでせうね、方々探し廻つただけけれど、外に一寸見附らないもんだからね。」

「もう辛い方は慣つ子になつてゐるんですからホ、。」と淋しく笑つて、「それでも、済まないのねえ、貴方にいろんな御心配をかけて。」如何にも氣の済まぬやうな顔色。

「何アに……」これも沈んだ調子。

「貴方、帽子なんか取つちやつては何うでございます。」と氣の附いたやう。

黙つて、帽子丈は取つたが、二重マントは脱がなかつた。

「貴方も、飛んだ災難に逢つたとお思ひなさるでせうが、眞に済みませんのねえ。」

「何アに……そんな事は。」

「私やアもう、貴方ばかりを便宜に思つてゐるのですから……御迷惑ぢやアありませんうけどもねえ。」

「私が悪いのだから……」と自ら哀れむやうに濕つた聲音。

「否、何にも……貴方が悪いなんて、そんな

「一寸もありやアしませんわ。私が悪いのですとも、そりやアね、私が矢張……貴君の事はかりは、何うしても諦めざる事が出来ないんですから、それや是やで、つい、あんな大外れた事を仕出かすやうになつたのですよ。矢張、女といふものは愚癡っぽいもんですわねえ……私やア何うせ絞首になるんだらうと思つては極めてゐましたけども、それまでに一度貴方の御目にかゝりたいと思つて、公判の時なんか一心に、傍聴席の方へ氣を附けてゐたのですが、見えないんぢやアありませんか、あの時は何なに口惜しかつたか……」云つてぼろ／＼涙を流した。

庸之助も何だか胸が迫るやうに覺えて、今更のやうにしげ／＼お澤の横顔を覗いた。戀の涕はさすがに何處か、未だ残つてゐる。

(三十三)

「あの、貴君はもう奥さんがおあんなさるのですか。」とさすがに打慄へるやうな聲音で問うた。

「ウム、その……實は……」

「もう、おあんなさるのですかね。」と眼色を變へて不思議高な調子であつた。

「實は……汝さんが、斯う云ふ事であらうとは夢にも知らなかつたもんだからね。」

「汝さんなんて、改まつた口上ですことねえ……私やア矢張、十年前の事を思つてののですよ。そりやアね奥さんなんか、もうお持ちなさつてゐるやうだと、私の事なんか、から思ひ出して下さらなかつたでせうけれどもね……」

「左様いふ譯では決して……」

裏口でガタリと物音。庸之助は唖驚して膝立て直すと、お澤も耳を澄まして、やがて口元で笑んで、

「猫ですよ。」

庸之助はホツと吐息。

「無、お美しい、お弱歸い、そして里方も歴とした家の御嬢さんなんでせうねえ。」

十年前のお澤は含産んで、串談口なんかあまり利かないで、品の高い、温和やかな處女であつた。それが何うも、嫉妬氣か、弄ぶ氣か、斯ういふ事を應面もなく云つて返けるといふのは、さても浮世の波の底には如何なる魔が潜んでゐるのであらうか。庸之助は何だか嘲けらるるやうにも聞做たのであるか、自分の所爲を思ひ出すとさすがに心弱く覺えて、

「否決して……實はその、亞米利加で、私の恩人の娘を貰ふやうな事になつた次第で、決して……そんな浮いた事ぢやアないです。それ

も、汝さんにはもうちやんと婚養子があつたのだから、今頃は夫婦の間に子でも出来て、一家睦じく暮されてゐるだらうと思つたので……斯う云ふ事とは夢更知らなかつたのです。」

「子でも産んで、睦じく暮してゐるだらうなんて、そりやア貴方あんまり薄情ぢやアありませんか……」

「薄情つて、左様いふ譯ぢやアないんです……あの時の事を思ひ出すと、何方に怨があるんだか汝さんは婚を取るんだし、試験には失敗つて了ふんだし……」我ながら聲の調子は何んだか高まつて來たやう。世間が早寢静まつたからでもあらう、庸之助は不覺、體が窄むやうで、四邊をキョト／＼見廻した。

「そりやアね……あの時の私の心つてえものは、何んなに辛かつたか、貴方に逢はせないやうにと云つて、一室の内へ閉ぢ籠めて了つて、家の人が始終眼張つてゐるんぢやアありませんか。手紙一つ書いて上げる事は出来ず……濟まなかつた事ねえ。」と涙聲。

「何うも、これもお互の運命だから、今更夫れを何う斯う云ふのぢやアないんだがね。」と至つて低聲、天井の方を仰見るやうにして、感に堪へざるものやう。

「寧ろ、あの時、舌でも嚙んで死で了つたら好かつたのにねえ。」眼を堅く瞑つて、手を額に加へた。

庸之助は返辭も付しない。

「その奥さんでえのは、亞米利加ですつてね。」と、思出したやうに云ふ。

「亞米利加人なんです。」

「亞米利加人ですつてね、……ちやア異人さんですね。」妙な眼色。

「左様です、私が容易ならぬ御世話になつた人の娘なんです。」云ひつゝも、しきりにキョト／＼四邊を氣にして尻の据らぬ様子。

「あの、お子さんがおありなさるんですかね。」

「否……そんな事は。」

「左様ね……と云つて一寸、小首を傾げ、

「お卷は何うしたんだらう、ついあの子の事を思出しますが……」愁然たる面地で、庸之助の顔を見遣ると、忽ち臉を動して、

「オ、あの子は私の家に居るんですよ。つい、未だ話さなかつたが、實に不思議な事で。」と言葉遣ひも少し碎けて来る。

「まア、眞實に。」とお澤の聲も不思議高い。二人は周章で前後を見廻した。何處かでギチ／＼とミシンの器械を廻す音が聞えてゐる。

(三十四)

「何うも不思議な事があるもんですねえ、矢つ張神様のお引合せとでも云ふんでせうねえ。」と、お澤は庸之助の談話を聞き了るか了らないかに、早眼の中を窺ませて云つた。

白木綿の細帯した片一方の手頭は軽く膝の上に凭せ懸け、右の方の手を疊に突いて自墮落に體をくづしかけ燈心掻き立てた行燈の火口の一寸計明いてる隙間から、ぱつと射しかゝる薄赤い火影に半面を照らされながらゐたのが、今俄かにいきちんと起直つたのである。

庸之助は語り續けるのである。

「それが又、お父さんや阿母さんに餘つ程可愛がられてゐるんだよ。私やアまだ實の孫だといふ事を打明しやアしないけども、親といふものは争はれぬもので、自然と其處に情愛を感じるものと見える。」

「眞實にねえ……あの娘も幸福ですわ、もう餘つ程大人になつてゐますでせう、見度うございませう事ねえ。」云つて限り無き愛の光を面に浮べて、笑に熔けるやうな口元、希望に輝く臉の、呢と庸之助の顔を仰ぎ見るやうにした。眼鼻立ちさすがに温い血の氣の通ふ昔の色に出でて、凄うといふよりは何處か斯う美くしい。庸之助

も、不思議返して、何となう味しき、懐かしき的情が泉の如く、胸の底から湧き上る思ひ。暫しは我を忘れて、十年前の昔に返つてゐた。

「あの、何卒一度……明晩でも連れて来て、逢して下さいましな。」と漸く云つた。

「明晩つて……そんな性急な譯にも行くまいが、兎に角二三日中に、連れて来る事にせう。」

「私、一刻も早く逢ひたいのですから……親子三人一緒になるつてえな事は、滅多に出来ないんですもの。」

「左様ですねえ……私も未だ親子の名乗をしてゐないのだから、汝と三人、斯う揃つた處で。」

「汝がね……嬉しいねえ……三人一緒になつたら何んなに嬉しいか。」莞爾と笑ふ、その満足さうな、左も愉快らしい顔色の、見るから引入れられて了ひさうだ。

庸之助も暫しは胸の懊惱も忘れて、何となう酔へるものやうに、楽しい、喜ばしい、心のどかな思ひであつたが、それも簾へば、針を植ゑしと知らで、絹蒲團にくるまる束の間の夢、果敢なく醒めてはやがて、起つても居てもゐられぬやうな遺溺なき苦痛と煩悶と恐怖と不快とが體中に漲り渡つて今四肢慄かるとばかりである。「もう晩くなつたから歸るとせう……そして、

下へは未だ金が拂つてないのだから、この中でよろしいやうに。調子は怪しく頓へてゐる。五回紙幣を一枚取出したその手附もいと周章てたやう。

「そんなに急かなくつても……今夜ア泊つて行つたつて好いでせう。」

「何一言も言つて置かなかつたんだし……家で何んとか思ふと、又出て来られないからね。」

「左様かね。」と暫らく思案して「ぢやア無理には留めますまいねえ、一寸位お待ちなさるのは好いでせう、ね。」と云つて、つと起つて、椅子をトン／＼と下りかける。

一人法師になると、庸之助は愈胸騒ぎがして、しきりに氣が焦いて、静としてはゐられな

い。丁度下の、戸口を明けた音に、吃驚して、息を屏め今にも刑事が飛び込んで来るかと氣も

そゐる、やがてさる氣色もない、内から婆か誰か出て行つたものと分つて、肚胸を撫でたもの

のまた探偵が何處か、この邊の隙間から覗うてゐるのではあるまいかと窓の障子の破れ目

を一々氣にして、天井の節穴、これまでが人の眼に見える。

其處へお澤が又上つて来て、「少し、お待ちなすつて、ね。」

「もう歸るとせうよ、今の次第だからな。」

「少し、十分程、ね、好いでせう。」

「何か、用があるの。」と、桃尻になつて、帽子の塵を片手で拂つてゐる。

「もう少し……」暫くと引留めてゐる中に又前の戸口が開く音。

やがて階下段の人氣色、庸之助は又胸をドキリとさせて、身中汗にしてゐると、「お待ちさま。」顔を出したのは老婆である。刺身の皿と、刺身を手にして下手に坐る。

「何うも御苦勞さま。」とお澤は手早く、幾何か握らせると、「何うしまして、その御心配にやア……」と辭退するを、強ひて納めさせた。老婆は餘多度叩頭をして、「誠に濟ませんのねえ……あの只今、直にお畑が出来ますよ。」と莞爾々々もので。

「酒を買つたの、……私やア少とも行けないんだよ。」庸之助は當惑顔。

「エ、そんな事があるもんですか、いけませんよ、いけませんよ、そんな水臭い事を云つちやア……何うしたつて吞まなけりやア承知しませ

ん、好いかね、吞まなけりやア歸しやアしませんよ、憂の玉締ですもの。」

「眞にねえ。」と婆は猶も追従口。

(三十五)

天に在す我等の父よ、冀はくば吾夫の胸に秘めた祕密を吾が耳に細語さ給へ。彼と我との心は同一つでありませうれば、彼の心の苦み惱みは、我が心の苦み惱みであります。何卒我が熱き心を以つて、彼に同情を表しまして、彼の心の病を醫す事を得ますやう、上より大能の御手を以つて、御冥助けあらん事をアーメン。とは、惠美耶が、頃日の朝夕の祈禱である。

惠美耶は自分の心の奥底から飽までも夫を信じ、夫を倚賴に思つて、如何なる辛い事、如何なる苦しい日をも堪へ忍んでゐるのである。

父母の國を離れて何千里、知らぬ異郷に、かよわい女の身の心細くない段ではない。人種も違ひ言葉も違ひ、風俗習慣が一つでない所爲からでもあらうが、自分の最愛い夫の父たり母たり人に、自分は何彼に就けて、快く待遇して貰

へないのが、一倍悲しさ、切なさ、心愛さの限りにも思はれる。それも一つは、自分の注意が至らぬからで、更々お怒み申す筋ではなければ、

その遣る瀬なき思ひに小さい心が張裂るかとばかり覺ゆる時、唯逃れて行く場處は夫の其優しい胸——その胸に凭れかゝる刹那はもう今迄

の苦痛は夢のやうに忘れて了ひ、唯何となく、

鷹に追はれた雛鳩がその古巢に歸り、牧者に鞭打れた小羊が、母の乳房に縋がり付くやうな心地の云はん方なき慰藉と平和と、そして喜が溢るゝのである。

その逃れの場處、安息の幕屋と頼み切つてゐる夫の優しい、温な胸が、今日この頃は何となう冷たく、鉛でも包んでるやうに重くるしうなの、自分の愛に燃ゆる指頭に觸れては、直ぐとそれがこの心に感じられるではないか、秘密を打明けて妻にその苦痛の半ばを分かち給へと掻き説いても、秘密は無いと打消して了はれる、強ひて根問をして怒られて、偶と自分でも氣が附くと、俄かに疎として體が慄へるやうで、その秘密といふのが外ならぬ、自分の身の上に關係つてゐるやうに思はれる。自分が夫の父たり母たる人の御氣に入らないから、それで自分を離縁するやうに迫られてゐるのではなからうか、それで夫が、打明かし惜いのかも知れぬ、左様……それに違ひなからうと、思つて見ると、不慚心怯えて何んだか斯う奈落の底へでも突き落されるやう、悲しさは早、胸に込み上げて来る。

併しそれならば左様と、寧そ包まず打明けて下さつても好きさうなものといふやうな氣も起

る。左様思ふと、一條の希望の光は胸の奥底に輝きそめて何となう心強くも覺える。それよ、あの人の心で自分を愛してゐて下さるその愛情にさへ變りがなくば何もそれ程の事包隠しなさるにも及ぶまいもの、日本ばかりに日が照るではなし、二人一緒に行きさへすれば、世界に至る處エデンの園、神の恵はいと廣きに、さりとて狭い御丁見よ。懷胎にまでなつてゐるものを、あまり御遠慮がちな其お心が却つて怨めしうさへも思はれる。それに此方の氣は少とお察し下さらないで、昨夜は又何うしたといふのであらう、沈黙つて何處かへお出でしひ、一時過までも待たせた上に、何だか酒の香をさせて御歸なさつたんだもの、何うした譯か聽かうとしても、胸に話つて口も利けず、こんな情けない事は生れてから始めてであつた。

左様思へば又この頃は教會の方も折々怠り勝になるゝのが氣に懸つてならぬ。肺の病と披露してはあゝの、信者の方が折節何の彼のと、蔭口も利かるゝやう、眞に何うしたら好いのであらう。妻の身の上も少しは御察し下さつても好きさうなもの、自分はその人の半身たる價打がないのであらうか。それとも……若しや、人種が違ふと云ふので忌氣がさしたのでは

あるまいか。否……否……あの人に限つて左様いふ事はない。自分の夫はそんな輕薄な心は持たない、肉體の、その眞の外皮の彩飾が異つてゐるばかりで、靈は皆神様の手から同様に授つたもの、靈と靈と相結び合ふ愛情の緒に、何んの變り、何んの隔があらう。これは自分の御だと、痛く身を悔んでも見る。

時計が丁度十時を打つた。足音がしたので、ふと眼を上げると、夫が今起床つたと見えて、寢室から出て自己が部屋へ入つて行く後姿が見えた。惠美耶は、臺所の椅子に倚掛つて、茫然、刺しかけの襦袢の布切を手にしてゐたのであるが、始めて心附いたやうに、それを其ま椅子の上に抛け出して、周章しく水口から下り立つた、片手には手桶を提げて。

(三十六)

安樂椅子へぐたりと頷るゝやうに身を凭せかけてなす事もなく茫然と、片手を額に當てて、庸之助は唯何となう壓し附けるゝやうな胸の苦しさを紛らす由もなく、耳邊では蜂の巢の破れたやうな唸り聲が聞える思ひ。我と我身を掻き撚り度く、殆々前後の分別も失せて了つて、中仕切の玻璃戸を開けるのに氣が附かない。閉ち切つた時の響で漸く頭を擡げた。

「あの水を取つてありますよ……そして、この手紙、郵便函の中にありましたの。」云つて惠美耶は一封の書狀を差出した、淋しさうに片まぐぽで笑んでゐる。

「何處から知ら……」呟やくやうに云つて、取上げて見ると、嚴めしく親展としてある。差出人は植木監督、庸之助は不思議色を變へた。

「監督さんからでありますね。」と、惠美耶はそのまゝ其處に佇んでゐる。

「ウム……何うしたのかな。」少し眉根に皺を寄せて封を切る。庸之助は今起床上つたばかりなので未だ顔を洗はないのである。例時はその次に、祈禱をして、聖書を読んで、然る後に、信書を開く人が、今朝丈は異例であるから、惠美耶は不思議さうに、夫の顔を見守つてゐる。

「彼方へ行つてゐるが好い、手紙を読むのだから……」と、叱言のやうに云つて、一寸頭をしやくられ、惠美耶は始めて氣が附いて、顔を眞紅にして、
「御免下さい。」と處女のやうに含恥んだ調子、心残りの體で、帷幕を引いて、その影に消えた。

目送して、庸之助は今更氣の毒な思もした。信書の祕密——夫婦間でもそれを堅く保ち合ふ

のは西洋の風である。自分が惠美耶に注意を與へたのは素より無なるべき筋ではないが、併し、此方の都合の好い時にはかり、西洋流を採用してその他はすべてが日本風で、妻たる彼に不少ぬ苦痛と恥辱とを忍ばせてゐるではないか。勝氣の女なら疾に女權を振廻して、離婚の請求をするでもあらう、又請求せられても仕方はないのだ。それに彼の女は心から優しく、只管我を倚頼に思つて、満身の愛を獻げてゐるではないか。思へば自分は、その愛を受けるには足りない身だ。彼の天使の如き女に夫として侍かるゝには餘り罪惡の多い體である。而と向いては彼の神々しく光るやうな白い額が、何だか自分の罪を照らす鏡のやうに思はれて、恐ろしくて堪らない。まして植木監督からの手紙、その中には如何なる文字があるか、自分の祕密が早くも洩れ聞えて、それを詰責の書面ではなからうかと、脛に疵もつ身の薄氣味悪く、先づ胸がときめくので、妻に退去を命じたやうな、淺果敢な、夷恥かしい次第だもの。

打顔ふ手先で少しづつ、片端からそれを擱けて讀んで行くと、始めは先づ尋常の挨拶、それから、中岡蘇平が牧師を廢めて、俗界へ墮落した事を憤慨するといふよりは寧ろ憐れんだ文句、

次には、自分を甚く信任の言葉で、將來の宗教界の雲の柱、火の柱となり、主の爲め、道の爲めに、善き信仰の戦を戦ふやう、喝望に堪へないとの事、惠美耶夫人の上をも非常に賞賛して、この夫にしてこの妻あり、神の攝理は實に幽妙測るべからざるものであるとしてある。

讀み了つた時にホッと一息安堵の吐息を吐いたが、直と後から良心の呵責が鞭打つやうに起つて來て、罪の子よ、惡魔の子よ、サタンよ、偽善者よ、蠅蛇よ、蠅蠅よ、とありとあらゆる叱咤嘲罵の聲は、今ありくと耳の底に鳴り響くのである。

ア、植木監督が斯くまで自分を信任してゐるのであるか、中岡を失うて、新に君を得たのは、小狐を逸して若き獅子を味方に附けたのよりも、猶優つてゐるとの一句、あの嚴格な、謹直な、他人に對して言葉もあり交へぬ人が斯程までに自分をと思ふと、自分はもう直に彼の人の足下に平伏して罪を悔いて了ひたいが、その時彼の人は果して何んなに驚くであらうか、何んなに失望するであらうかと、更にその段に思ひ至ると、愈々濟まぬやうな氣がして、今目當折角の信任を水泡に歸せしむるのは實に忍びないやうでもある。これは偽善であらう

か、偽善であると呼ばる。併し折角の信任、それを直に無にしないでと人情の叫ぶ聲、それにはつい、耳が傾き易い。

再び破戸が明いた、帷幕を捲き上げて顔を出したのは、お巻。

「あのー、二階から御用がありますつて。」

その聲、慥かにお澤のそれに似通つてゐる。そしてその眼元も、口元も。

(三十七)

「牢破りがあったんだねえ、牢破りが……」
母のお節は、席之助の顔を見るときいきなり斯う云ふのである。

「エー、左様ですか。」驚いたやうな顔色の、そして極沈鬱な調子である。

修造は眼鏡を懸けて、赤新聞の三面を黙讀してゐたが、一寸此方へ向いて、

「汝、あの岸野澤つて……岸野のお嬢さんなんだらう、あの人が監獄を破つて逃出したつて云ふんだよ。……昨日の暴風雨の晩……大膽な女になつたもんだ。」

「汝が常時説教に行く監獄なんだが、汝は一寸も逢はなかつたんだね……と、ちらと顔色を窺つて、早口に言葉を續ぎ、「そんな女なんか、善く牢破をやつたもんだなう。」

左様ですね……その……何うしたんですか。」
席之助は自分で何を云つてゐるのか分らない。血色は全く青醒めて了つて、唇が微かに震へてゐる。

「あの、お巻の阿母さんは、お澤つて云やアしないの。そして汝の産れた處は、市ヶ谷監獄ぢやアなかつたかい、思ひ出せないの。」とお節は今一途にお巻の顔を覗き込んでゐた。

「私知らないわ……覚えてゐないんだもの。」と鼻ひんで云ふ。

「何うも、私やア、左様思ふよ、何處か席之助に似てゐるんだもの、ねえお父さん。」

「ウム似てると云やア似てゐるやうだ。」
此時席之助は俯向いて、父が疊の上に投げ遣つた新聞の三面を見るときとなしに見詰めてゐる。

「一人斬られちやつて、二人は捕つたといふんだなう。」と修造は眼鏡越しにじろく席之助の横顔を見てゐる。

「成程……左様ですね。」

「何うも大膽な女だ。」

「母親は、まア何んでも好いわね、この娘は私の孫ですから……ハ、ハ、何うも實の孫のやうな氣がしてならん、なう、お巻、汝は孫になつてくれるかい。」と頭を撫でる。

「私、知らないわ。」

「知らないなんて、そんな事を云ふもんぢやアないよ。」猶しきりに愛してゐる。

「あの、階下のも懷妊なんだもの、今に可愛い孫が産れるんだから、お巻が孫になつてくれな」と云やア、その方許り可愛がる事に極めようぢやアないか。と修造は戲弄半分。

「まア忌な、申談にもそんな事を……毛色の赤い、眼玉の青い、そんなものは孫ぢやアありません、そんなものを孫にやア持ちませんよ。」

「だつて、孫は孫さ、アハ、ハ、ハ、と苦笑。」

「そんな事を申談にも……ア、ハ、又、階下で歌なんか大聲で唄つてゐるよ。眞に始末に了へない奴だよ。」お節は顔を覺めて、つと起上つた、席之助は唯木偶のやうに新聞の一面許り見詰めて、身動もしない。

「階段とんく」と踏み鳴して、お節が降り立つて見ると、惠美耶は今階下で約翰・馬太の二少年に椅子を與へて、讃美歌を教へてゐた。

「又そんな氣樂な事を……と呪まれて、惠美耶は如何にも辛うに、もじく椅子から起たり居たりしてゐる。

「もう……そんな事は……噓しうて仕方がない。」

い。」

「ハイ……」

「ハイチヤアありませんよ、こんな穀潰し其を集めて善うもまア……」

二少年は怨めしさうな眼色でじろくお節の顔を見てゐる。

一人を睨むんだな。小癪な、人を睨むんだな。

惠美耶さん、こんな失禮な奴はもう一刻も家に置く事は相成りません、只今追出して貰ひませう、追出して……追出すのが惡なら自分で連れて、疾々と出て行つて了ふが好い。」突慥食に極めて尋常ならぬ權幕である。

「ハイ……」とばかり、首を垂れて思屈した體。「出るよ、出るよ、鬼婆アめツ。」と忽元のチビ六に立返つて、小い顔をしゃやく。

お節は赫と焦き上げて、「汝ッ。」と云ひさま、傍の、棕櫚箒を逆に取つた。二少年は廿日鼠の如く、室の隅の方へ走つて行く。

「まア、一寸……」と支ふ惠美耶はいたゝか肩頭を打たれてよろ／＼と後の椅子へよろけかかる。

(三十八)

會堂の前面の、白く塗つた壁に木炭の切片で惡戯書がしてあつた、一方のは、へのへのもへ

いで、口の處へ鬼牙を附けて、頭の髪を、蟹の足の行列のやうに描いて、頭は縦に二本棒を引き、鬼婆ア奴と、覺束ない片假名がその傍に書添へてある。今一つは、それに並べて、不手際ながら、極念入に、女の顔らしいものを畫いて、横手に、神さま、マリヤさま、エミヤさま、アーメンと釘の折のやうな平假名が記してある。手の届き工合から見ると、無論眞の、子供の惡戯である。

庸之助は物を案じながら、何氣なく此所まで廻つて來て、今それを見附けたのである、誰の所爲であらう、二人の少年が昨夜から姿を見せないのに思ひ合すと——左様だ、全く彼等の所爲である。鬼婆とは勿體ないが、母上の事であらう、母上は決して左様、鬼と怨まるゝやうなお人ではない、自分へ對しては極めて優しく、極めて愛情の濃かな慈母である。その慈母を彼等無心なるそのまゝ天國に入るべき小兒の心に、鬼などと、怨ませるやうな事に立至つたのも、畢竟自分の不幸から起つた事、外國の婦人を妻に持つて、牧師なんかの職に居るのが、御氣に入らぬから出た八つ當りが原因なのである。濟まぬ、濟まぬ、如何にも濟まぬ、又一方の畫は、惠美耶の肖像といふ積りであらう、成程、

彼は心も清い、姿も清い、彼等無心の小兒でさへ、マリヤとも思ひ、神さまとも考へるのであらう。ア、自分はその人を妻にしてゐるのだ。その神さま、そのマリヤを妻としてゐるのだ。この汚れた、罪の地なる自分は、覺してそれを恥かしうは思はないのか。惠美耶へ對して氣の毒だとは感じないのか。否思つてゐる、感じてゐる。さればこそ、自分は彼を遠ざからうとしてゐるのだ。彼の神聖な身體へ、この汚れた者が近づくのさへ罪惡だと思ふのだ。自分はこのまゝ惡魔の子となつて滅びても好い、彼をして飽くまで天使たるの姿を保たせたいのだ。これがせめて、謝罪の意を表する所以の道ではあるまいか。

「良君、此所に……これ見なかつたのありますか。」

突如に聲を懸けられて庸之助は吃驚した。見れば惠美耶が雑巾を持つて、水滿々と盛つたバケツを手にして傍に佇んでゐたので。

「ヤ……何うしたの、吃驚した。」

「誰の惡戯ありますか……私、最前掃除する時見附けまして……」

云ひ／＼耳の根まで眞赤にして、雑巾を絞つて、先づ鬼婆の字から拭取つて行くのである。

その横顔の底白きが、紅に燃ゆるやうに輝いてる美くしさ。庸之助はそれを見てゐるのも恥かしいやうで直と横手へ曲つて、家の方へ歸つて行くと、お巻が丁度我を迎へるやうに、會堂の裏庭の、筵竹桃の葉蔭に立つて居た。

彼も罪の子だ、惡魔の子だ、否この自分の罪の記念だと思ふと、何だか堪へ切れぬやうに懷かしうなつて、小足早にと走り寄つて、その小さい、白い頸筋へ急遽に兩手を絡んだ。

「アラ……」眼をパチと睜つて、驚いたやうな顔色。

「阿母さんの處へ連れて行かうか。」と耳へ口を寄せて低聲で云つて、周章でたやうに振向くと、惠美耶の姿は未だ見えなかつた、斜めに、空を仰げば會堂の屋の棟の十字架、それが夕陽を浴びて、赫炎と金色に輝いてゐた。

(三十九)

「この子が……まア、こんなに大きく……阿母さんだよ、阿母さんだよ、私や汝の阿母さんだよ。」お澤はいきなり飛び附くやうに振抱いて、轟々と胸元で締め附けながら、煩摺して、早ボロボロ涙を流してゐるので。

「アラ……何うしたの。」とお巻は驚き呆れたやうに、兩手を張つて身を反らした。

「お巻、これが汝の阿母さんだよ。」庸之助も嬉しさに笑んでゐる。

「阿母さんだつて。」

「お巻、汝は知るまいけども、私が汝の、生の阿母さんなんだよ。そしてこの人が、汝の眞のお父さん……」眼を拭きながら、片手は慥と其小さい背に絡んで、永久も離し難なき風情。
「だつて、こりやア先生だもの……家の先生だもの……」

「お巻、今までは打明けて云ふ事が出来なかつたんだがね、私が汝のお父さんだよ。」顔へ聲で云つて庸之助も懷かしさに膝行り寄り、愛に燃ゆる温かい手で、後から確と母に抱かれてゐるお巻の小さい手頭を握緊めた。

「左様なんだよ、お巻、これが汝のお父さん、私が汝の阿母さん、嬉しいだらう、ね、嬉しいだらう。」

「眞實に……」振り仰いでキョト／＼二人の顔を見凝べてゐる。

「汝、嬉しいだらう、阿母さんは嬉しくて仕様がないのよ。七年……八年ぶりだもの、汝の顔を見るのは、八年ぶりだもの。」
荐りにハラ／＼と涙をこぼし袖口を濕らせてゐる。

「眞實に……先生が私のお父さんなの、貴方が阿母さん……」猶も半信半疑の面地で、例の狐疑深い眼が輝いてゐる。

「今まで云はなかつたもんだから、疑ふのも無理はないけども、私等が汝の親なんだよ。」

「眞實だよ、……可哀さうにねえ、親は有りながら今まで親の顔も見知らないで育つて来たんだもの……眞に私等が悪かつたよ、何卒堪忍おし……」

二人とも漸く手を放して其處へ坐らせた。

「汝にやア……お前にや何の罪もないんだ。これまで實に辛い目を見せて済まなかつた。」
庸之助は暗涙を滂べてゐる、お澤は唯俯向いて臉をしきりと手甲で拭うてゐる。

「眞實に、あのー、私のお父さんや、阿母さんかね。」

「眞實だとも、眞實だとも。」父は今、再び最愛子の兩手を確と握つておつとその顔を見詰めた。満身の血は愛の炎に沸立つのであらう、五體がぶる／＼慄へてゐる。

「眞實なの……眞實だとも嬉しいうねえ。」始めて莞爾した。その笑顔にはもう一點の邪氣もない、實に、世の常の少女が顔にこぼす花の笑み、接吻したいやうな愛くるしさである。

「貴方、可愛いぢやアありませんか。」と、お澤は眼を眞赤にして、膝行り寄り、庸之助の顔を見上げて又もお卷の小さい肩頭へ手を遣つた。

「可愛くなくつて……」

「もう三人、このまゝで此處を動かさないのねえ。」

「もう父さんも、阿母さんも、私を一人法師にしちやアいけないよね。父さん、ね母さん、私を一人法師にしちやア忘だよ。」いゝいゝ鼻汁を吸り上げて交るゝ二人の顔を見鏡べてゐる。

「一人法師にしちやアしないよ。」と、お澤はひしと肩頭を掴んで、背後から自分の體をその上に押截せるやうにする。

庸之助は黙つて、片手で眼を拭いた。今といふや、苦痛も心配も忘れて了つて、唯子の愛、それに加へて夫婦の情愛が、胸一ぱい、油のやうに湛へ切つてゐるのである。

(四十)

「まア、一つお祝にね……斯う親子三人が一緒になるなんて、お目出度い事ぢやアないかね。」とお澤は今、階下から老婆が持運んだ杯蓋を上り口から受取つて、其處へ置き列べたのである。

酒の香がぱんとすると、庸之助は又何だか悪

魔が誘惑に來たやうな心地、少し眼を翳らせ

た。

「貴方からお始めなさいな。」とお澤に杯を囁

れて、並まぬながらも手に持つ事丈は持つた。

「お父さん、お酌。」とお卷はちりと見上げて

いそゝ嬉しうに棚徳利を取上げる。

「私は禁酒なんだから。」と猶豫ふ。

「禁酒つて……先夜も召上つたんぢやアありませんか、……そんな禁酒はありますまいよホッ

ホ、……」

「否、あれは何うも無理遣、口の中へ注ぎ込まれちやつたんだもの。」

「貴方、濡れぬ先こそでさアね、……酒でも飲まなけりやア眞面目でこんな世界に生きてゐられるもんですか、それに今夜は、親子三人邂逅

ふつてなお目出度な晩なんですもの。」

「お父さん、注ぎますよ。」と、お卷は早、半分程注いで了つた。傾いた縁からぱらりと盛

の上へこぼれた。

「コレ……」庸之助の手先はぶるゝ顫へて、

瞳は異様に光つた。

「折角、お卷が酌をしたんですもの……ね、貴方、娘が折角お酌をしてくれたんぢやアあり

ませんかねえ。」

お卷は唯、父の顔を見て莞爾々々笑つてゐる。

「エ、もう斯うなつちやア……」舌打して、眼を睨りさま、ぐつと一息に吞干した。苦かつた

か、酸はかつたか、甚く酸を覺めたので、

「父さんあんな顔をしてホ、……と貝のやうな白い小さい前歯を現はして笑ふ。

「お藥でも飲むやうにね、……酒は百藥の長

つて、貴方、眞實に藥なんですよ。」

「藥だか毒だか知らないが、もう斯うなつちやアやぶれかぶれだハ、……と苦笑ひ。

「斯うなつちやアつて……濟まないのねえ。私

がこんな事にしちやつたんだから……私が連累にしちやつたやうなもんだから……」お澤はさ

すが鬱ぐやうに、伏目になつて、呢と考へ込んでゐる。

「何にさ……汝が悪いんぢやアないよ、身から出た錆なんだから、天をも怨みず人をも咎めず唯謹んで神様の罰を受けるより外にやア致方

がないんだ……オイ何を茫然してる、最前から囁してるんだよ。」

「オヤ、つい恍惚して、ね。」お澤が杯を受けると、お卷は酌をする。

「階下では何と思つてゐるのかい……何だか妙に

考へてやアしないの。」と、氣懸りなやうに、庸之助はさすが小聲で問うた。

「妙につて……階下の婆さんがですか、可笑いのですよ、私を妾か何かのやうに思つてゐるですものホ、ハ、ハ、」

「妾つて……イヤ、何うも愈墮落だねハ、ハ、」と頭を掻いて、又苦笑ひした。

「あの、惠美耶さんと云ふのが、御本妻といふんですかねえ。」杯を賜して、何んだか忌味らしい口調。

「さア、何方が本妻だか、……薩張分らないよ。」

「薩張つて……ねえ貴方、何方が御本妻でせうか、一つ伺ひたいのねえ。」

「左様さ、……まア、こんなもののある方が本妻かも知れない。」云つて、お巻の柔らかな頬邊を指頭で一寸突く。

「アラ、あんな事を……子供心の唯嬉しさう。お澤も莞爾眼元で笑んで、

「ちやア今夜ア本妻の處に泊つたつて好いでせう。と、庸之助の顔を見入った。

「泊れて、左様、現金に……まア、兎に角、そのお薬を、最少とやつ附けて、何も彼も忘れて了はにやアいけぬ。」

類然と身を横へて臥枕、顔は赤うなつて、眼は血走つて、莞爾とせせず、お巻とお澤とを交るゝ見舞へてゐる。

(四十一)

宿醉の、庸之助は頭が上らない。寢臺の上に空氣枕を當て、白い金巾を上敷にした掛蒲團の中に半身を入れて、そして、惠美耶の方へは背を向けて横たはつてゐる。惠美耶は、椅子を寢臺の側へ引寄せてその上に跪き、水を西洋手拭に包んで、夫の半面の、ビク／＼動く額縁の邊から、額へかけてしきりと冷してやる。體溫で水が溶けて露が瀧綿をなして流れかかるのを、手早く片手の手巾で拭取つて、何やら何まで、注意至らぬ限もなく必死と介抱の手を盡してゐる。覺を含んで少し青ざめた頬に、ほつれかゝる金髪を咄い前商で噛み締めて、昨に露味を持つて、夫の容體を打噴つてゐるその顔の、美しいよりは寧ろ高尚いやうだ。枕元の一方の、椅子に倚り掛つて、心配さうに控へてゐるのは父の修造なので。今朝庸之助が俥に揺られながら歸つて來たのは夜の全く明け放れる前一时间。東雲の雲が仄かに動き初めた頃であつた。お巻は連れて歸らない、何うした譯かと、先づ父母に不審打れた

ので、實は昨日、淺草見物に行つた途中、偶とあの子の親戚の者に出會せて、その家で自分も泊り、あの子は強て引留められて一兩日滞在の積り、いづれその中、仔細は分るとばかり、寢臺の上へ打倒れて了つたのである。

惠美耶は今餘念もなくしきりと水で冷してゐる。その冷い、絹のやうな手の指頭が、庸之助の額に觸れる度に、庸之助は何だか鼻へ沁み入る思ひで、空恐ろしいやうな又勿體ないやうな感がする。宿醉も苦しくて堪らぬのではあるが心の痛の方が寧ろ嵩高で、それに氣を壓せられて起きも得上らないのである。

「何うだい……何うもよろしくないかい。」と修造は耳邊へ口を寄せる。

「ハイ……イヤ左程に。」と聞取れぬやうな低聲。

「愈、何んならお醫者を呼んだが好いぢやアないか、その方が早く快くなるからだ。」

「否……醫者なんか……醫者なんか入りませぬ。」と少し周章でたやうな口調。牧師が、迫害の鞭撻、のろひの石塊でも打附られて、負傷したといふのなら主の業の爲めに誇るべき事でもあらう、それとは全く雲泥の相違、しかも宿醉で、醫者を呼ぶなどと來ては早論にも掛らな

いのである。このさまで、宗教界の雲の柱、火の柱——さて自分は何んたる罪人であらう、悪魔であらう。宿醉は未だ言ふにも足りない、昨夜は實に一大罪惡を再びして、罪の上塗をやつたのではないか。思へばこのまゝ消え入りた

いのだ、このまゝ死んで了ひたいのだ。死……併し、その死も自分を神の審判の大前に立てて、地獄の火に投げ入るゝべく命するのであるかと思へば、安息の場處どころではない。ア、自分は死ぬる事も出来ないのか、身も世もあられぬとは此れ——何うしたら好いのか、何うしたら

好いのか……庸之助は愈々頭がわく／＼し出して、血管が今にも張り裂けるかとばかり、眼先は又もや眩んで来る。仕切の玻璃戸が開いて人の入り来る容子、やがて耳邊へ口を寄せて、

「庸や、夏蜜柑を買つて来たよ……何んな容態かい……」母の聲だとは分つたが、返事は出来ない。

お節は夏蜜柑の皮を剥きかけて、爪先を黄にしながら累りと力んでゐるので。

「頭は大分冷たくなりましたのあります。」と惠美耶は低聲。
「庸や……少しは好いかい、さアお上りよ。」蜜

柑の一袋を背から二つに裂いて逆に剥いて、唇へさし寄せてやる。

「難有う……」と、漸く云つて、片手をさし出してその芳しい汁を啜つた。

「庸や、少しは好いのかい。」心配さうに顔を覗く。

「ハイ……少しは……気分はもう好いです。」

「酒なんか、汝飲まないのが、無理遣強ひられたんだねえ……お卷の親戚つて、何うしたの、あの子の事も私やア心懸りでならないんだが……」

「ハイ……そりやア浅草の方なんで……一兩日中に歸つて来ますから……」舌重くるしげに云ふ。

「まア、今間はないでも好い……一兩日中に萬事分明的といふんだから、間はないが好い。」と修造窘顔。

「そりやアまア左様ですけれど……オヤ、水が垂れて眼に入るよ。惠美耶さん、汝はマア何を茫然してるんだねえ。」と突慥食な調子。

「ハイ……」素直に答へて、周章で、手拭で拭く。

「氣をお附よ、茫然してちやアいけないぢやアないか、何んの爲めの介抱だと思ふの……」

惠美耶は唯首を垂れてゐた。

思へば福音を宣傳する手助にこそ云つて、借老の盟を交したのだ。宿醉の介抱にその手を藉らうとはさら／＼思ひもかけなかつた。又そんな事をさせてはならない筈だと、庸之助は愈胸が苦しい。

(四十二)

父母が今、午餐にと起つた、その後で、庸之助は靜かに惠美耶の手を握つて、ぶる／＼指頭を慥はせながら、直とそれを押退けて寢臺の上に起直つた。臉は、一ばい、血汐を流へたやうで、眼の周圍が腫れぼつた、櫛の齒入れぬ散髪、この頃、亂れに亂れて、顔色何となく沈み切つてゐる。

「何うなさつたのありますかね……、良君、御氣分よろしいありますかね。」と惠美耶は、愁はしげに顔を覗き込む。

「難有う……何うも誠に濟まなかつた。」

「私……心配したのあります、寢臺の上へ御倒れなさつたのありますからね。」

「イヤ誠に……何うも濟まなかつた、つい昨夜はその……親族の家へ行つて、泊り込んで了つてね……」

んのありましたよ。」

「三時まで……何うも済まなかつた。」と不思議眼を睜つて、直と下を向いて、如何にも氣の毒さうに頭へ片手を遣つてゐる、暫は、二人ともむつつり。

「あの……良君……」と、惠美耶はやがて夫の方をちらと見遣つて、後は何だか云出し憎さうに、唇を顫はせてゐる。

「何ですか……」と云つたものの、庸之助は今更胸の悸くを覺えて、早、心臓の鼓動は高まつた。

「あの、良君……他人が強て勧めたのありますかね……あの、お酒、強て勧めたのありますかね。」美しい眼は今閃くがやう、呢と、夫の顔を見入つた。

「ア、……何うも實に……家が寄つて来つて私の口へ注ぎ込むのです。」さすが慄へた調子で、心應せたやうに、愈俯向き込んで、顔は得上げない。

「いけませんのねえ、そんな事をする人……いけませんのねえ。」

「實に面目ない……私も左様云ふ譯で無理遣強ひられて、前後も知らないやうに酔つて了つてね……實に……何うも……」

「あの……良君、何卒私に、秘密打明けて下さいね。」と、惠美耶は俄かに言葉を改めて、眼の中に一ばい、涙を漲らせた。

「エッ……とばかり、庸之助は一寸惠美耶を見遣つて、直と又頭を俯垂れて了ふ。

「良君、私に打明けて云つて下さい……私お父さんや、お母さんの御氣に入らぬありますう。私、それ知つて居りますけども、良君は私愛してゐて下さると思ふのあります、良君、私に秘密隠して、云うて下さらないから、私心配で心配で……」右手の手巾を、水を入れた銅盥の上で絞つて、それをひたと自分の眼に押當てた。

庸之助は深く、顔を衣服の襟に埋めて考へ込んでゐたが、やがて苦しさうにホツと太息を洩らして、

「何……そんなに……そんなに心配しなくても、いい、秘密と云つて……別に……その經濟上の……金が足りないぐらゐな事なんで……」

「あのお金足りないのです……それで御心配なさるのありますかね。」と惠美耶は上眼道の稍安堵したやうな、又、唇に落ちぬやうな面地。

「米屋、薪屋その他の支拂が附かないやうに思ふので……それ等も心配で」と言葉は濁る。

「そんな事なら早く云うて下さるよろしいもの……」と少しは愚痴も出たが、直と又、氣の毒さうに俯目になつて、「私、父の處へ云つて遣りました孤兒院の方の金、未だ來ませんので……私、悪いのあります、小兒養うて、金は出さないで、私、悪いのあります。一悄然として暫く考へ込んでゐたが、

「あの、私の衣服、装飾、賣拂うて下さりませんか、私も必用ありませんから。」云つて、暗に淫々しい光を浮べて、庸之助の顔を見上げた。

「そ……そんな事が……」と周章てたやう。

「否、わ、衣服装飾必用ありません、良君に御心配かけて、私、そんな物持つに及びません。」云つて起上つて、其處の西洋戸棚の觀音開の戸を左右に開いた。紫や、緋や、葡萄鼠や、金茶織や、いろんな上衣、袴が花紅葉めづらかな色を競べて掛けられてゐる。

「そ……そんな事を……」と、庸之助は甚く悔めるやうな眼色で、唇を顫はせてゐる。

(四十三)

二階では親子四人、額を掲めての談合であつた。ね、庸や、姉さんもア、してわざ／＼來てく

れて、おめてゐるのだし、私等も、借銭取に度々遣つて來られて、大きな聲を出されると、二階で聞いても冷々するだらうぢやアないかね、まア、あの女が、洋服なんか賣つて、少許金の都合が附いたもんだから此度丈は何うか斯うか治まつたやうなもの男が餘り働が無過ぎるやうに思ふね。元來働きが無いのなら、それでまア諦めも附かうけどもさ、左様ぢやアない、お金を取らうと思やア、何時だつて百圓位の月給にヤア有附れるといふ人なんだから、正宗を菜切庖丁に使つてゐるやうなものぢやアないかね。と、お節は齒痒さうに一膝膝行り出る。

「女房のお蔭で……あんな異人なんかのお蔭で清線を附けるなんて、庸さん、あんまり意氣地がないやうだよ。」と、お柳も焦つたさう。据洋燈の火影でその姿が前の障子に映る、肩先が何んとなら萎けてゐるやう。

「異人のお蔭で……左様ぢやアないさ、お蔭つてえ程の事ぢやアない。元來あの毛唐人が、お節介な、乞食なんか拾ひ上げて來て、高價の米の飯で飼立てゐるんだもの、一つは大等からも、家の活計向が遣り切れなくなつたのだよ、お蔭でこんな貧乏する位なもんさ。五十圓や六十圓の金を都合したからつて、なか／＼儼が

附く處ぢやアないのよ。」

「庸、何分これぢやア遣り切れないから、銀行の方へ行つちやア何うだ。」と修造は沈着いて云ふ。

「左様です……併し何うも……」と庸之助は何と云つて好いか、何うすれば善いか、當惑が顔に讀まるのである。

「姉さんも始終、この家の事許氣にしてるんだもの、汝濟まないぢやアないかね。」と母は温やかな調子。

「この頃は、妾が來て泊り込むのですし、それにもう何や彼や私の居るのがお氣に召さないと見えましてね、随分當り散らされるのですよ。私とやア黙つてちつと辛抱してるんですけれど……」

親の家が確乎して厄介になれるやうなら、寧ろ飛出して來ようかと思ふ事が度々あるんですよ。」と、お柳は詰らなさうに身の上を訴へて、黒の紋付の羽織着の下から、水淺黃縮緬の襦袢の袖口そと引出して昨を拭うた、頬が少し殺けて來て、色艶が好くないやうだ。

「そんな事を……そんな事を云つちやア困る、随分辛い事は辛いだらうけども……」

「この子がこれぢやア、姉の肩身が狭いんですもの、それ等の事から馬鹿にせられて辛い目に

も逢ふんです、姉も實に可哀さうで……」お節はさすが女氣の、早徐々涙含んで來る。

「私も實際……實際、この儘ぢやア立行かないですから、何うか最少し收入の附くやうにと、考へてはゐるんですが……」と庸之助は一寸頭を掻く。

「それぢやア、銀行へ來る事にしが好いぢやアないか、あの、中岡さんで云ふ方など、此頃は立派な身装をなさつて、金時計なんか買つてさ、車ぢやア體裁が好くないからとか云つて、馬車の古手を探がすなんて豪い勢なんだから。」とお柳は淋しさうな笑顔を見せる。

「中岡さんで……ウム、あの人がそんなに……」

「まア、そんな贅澤は兎に角、このまゝぢやア親子が壽命に及ぶばかりだから。」と父は眉を擧めてゐる。

「ね、庸さん、早くしないと折角の好い口が又飛んで了ふ事になるからね、それが私、心配でならないんだもの。」

「眞に、庸、もう大概にして心を決めたら何うだね、お父さんと私等にも少しは樂な目を見せておくれ、汝、それが孝行と云ふもんぢやアないか。」

「ハイ……」と猶躊躇して、額に愁の皺を寄せ

てゐる。

「異人の方を、直に何うせいと云ふんぢやアないよ、兎に角、銀行へ出勤の事にすりやア好いんだからね。」と姉は弟の腹を讀んだつもり。

「その方は……左様云ふ譯でもないんですが……」

「兎に角、私に任せちやア何うだね。」とお柳は呢と見る。

「任す事におし、姉さんに任す事に……ね、それが好い、それが好い。」
庸之助は黙込んで腕又をする、折ふし車輪の音が聞えて、それが門前でハタと止まつたやうだ。

(四十四)

惠美耶は何となう二階の談合が心懸りで、この身の運命に係つてゐるやうな気がしてならぬ、獨つ、然と、洋燈の火影を見詰めながら椅子に凭れかゝつて、小さい胸を抱いてゐる。夫には未だ自分の赤心が通じないのであらうか、秘密といふのも、唯一家の活計向の都合が好くないから、その心配の仕過ぎより外にはないと聽いてさへ、今まであまり隔てられてゐたやうで寧ろ知めしく、衣裳、飾具一三昧賣り拂つて、その方の償ひはして貰うたのに何うしたものか、それ

から後は愈鬱ぎ込まれるやうで、眼を見合せても直とそれを翳らせて了つて、談話を仕掛けてもあまり口數を利かれない、自分を愛するお心が無くなつたのであらうか、あれ程親切に、この身を勞つてくれ、慰めてくれ、そして熱き接吻を交してくれたその人の唇は、何時の間にか冷い、氷と閉ち切つて、自分と相擁して白と紅との薔薇の花を咲き合ひながら、楽しい嬉しい戀の語を囁き交した新姫の夜の、その終生忘れ難なき記憶は最早、夫の胸の底からは消え失せたのか、左ほどまでにこの身は、夫に捧ぐる愛が足りないのか、情が薄いのか、又信仰が弱いのであらうか。

併し、これも自分の思ひ違であらう、自分が疑深いのであらう、我夫はそんな輕薄なお人ではない、如何程、自分が不足ものだからと云つて、假初めにも神の子たる人間を玩弄物にして、厭氣が來たから突放さうといふやうな、不義不正な事をする男ではない、恐らく家族の間の不調和が基で、それであのやうな陰氣臭い、鬱ぎ勝のお人になられたのもあらう——左様、若左様とすれば、自分は實に氣の毒千萬で、何と云つて謝して好いやら分らない。温い心で自分を愛してゐるあの人は、又温い心で親を愛し

姉を愛するであらう。その、自分を愛する心と、親兄弟を愛する心とが胸の中で相闘つてゐて、それがために、苦しい切ない思ひに慄んで居るのか。左様……若し果して左様であるならば、自分は何としたら好いか、自分はこの家を出て行かねばなるまいか。あの人と分ればなるまいか、否……否……神の合せ給ひたる夫婦の中を、人の意志で自由に離す事は出来ないのだ、又あの人と分れて了ふ程なら寧ろ死んだ方が増な位。それに自分は早、尋常ならぬ體だもの、何うしてそんな事が出来るものぞ。

惠美耶が思ひ屈して、ホツと肩から出るやうな吐息をして、その細い優しい、手を片頬へ押當てた時に、丁度門前に、件の車の音が止まつたのであつた。

氣が附いて、洋燈を手にして、小足早に駆け出て見ると、玄關先にお爸が立つてゐた。

「オヤ……まア……」

「阿母さんを連れて來ましたの。」
「何うしたのありますつて。」と怪訝顔、その中に薄闇い門口の方から人氣色がするので、見れば一人の女、瀧綿の絲織の袷に、黒縹子の帯の古手と見えて、耳の少し靡り切れたのを絡め、髪は捲卷、つと立寄つて、洋燈の火を正面に浴

びた所爲か、顔が凄く程青白い。眼はひいて涙として、手頭にも白綿の細帯をしてゐる。

「あの、膚さんはお在なさるんですか……お澤が來ましたつて、左様云つて下さい。」と蓮葉な調子。

「何方様からでありますの。」

「唯左様云つて下さりやア分明りますのですよ。」と嘲むやうな眼色である。

「私が左様云つて来るわ、もう眞實の阿母さんが來たんだから、毛唐人なんか追ひ出すんだよ。」とお卷は、小ましくくれた口を利用して、つと奥の方へ入つて行く。

「何うしたのありますかね。」と、その後影を見送つて、惠美耶は一向解せない様子、當惑さうに躊躇うてゐる。

折ふし、二階の段階子を下りる音。
「お父さん。」と、下から、お卷が氣負うた聲。

(四十五)

お澤を己が居室へと誘ひ入れて、膚之助はいく心、安からぬ面地の、宛ら藍のやうに眞青になつて、尤まれる胸の動悸の人の耳にも聴えるかとばかり、腰はなか／＼椅子に落附く段ではない。

「何う……何うしたんだ。」と調子もいとどしく

顔へてゐる。

「何うしたんだつてもう……何處かへ一緒に逃げて下さいな。」これも心周章だしげである。

「何う……何うしたんだ……何うしたんだい。」

「もう暴露れちやつたの……今朝から迂散臭い男があゝの路次を迂路々々してたんだがね、お午過ぎに、あの婆さんの處へ紙屑買に來た奴が矢張それなんでせう、もう直とズギが廻るんでさアね。」

「エツ……それは何うも……」總身一時にぶるツと戰慄いて、危く椅子と共に反様に倒れんとし、僅かに踏み留まつた。

「もう斯うなつちやア、所詮駄目ですから、お家の方へあの子の事もよく頼んで置かうと思つてね。」とさすがに情氣で云ふ。

「實に……何うも……」今更途方に暮れて、唯呆れ惑ふばかり。

「貴方は一緒に……もう綱は張つてゐませうけども、一緒に逃げて下さいな、實がありやア……」

「逃げるたつて……もう駄目だつて云ふぢやアないか。」

「それがね、二人一緒に捕まつたつて私やアもう何にも殘惜しくはないんだからね、貴方が

それ程まで……實があるんだと思ふやアもう捕まつたつてもいいんだからね、逃げられるだけ一緒に逃げて下さいな。」眼を星のやうに光らして、そして、何だかそは／＼、後を見たり、横を振返つたりする。

「逃げるつて……何うも……」

「貴方はそんなに、私の事なんか思つちやアるないんですかね……私を弄み物にしたんですかね。」と怨むが如く、眦をキリ、と釣つた。

「決して、左様いふ譯ぢやア……」

折ふし、仕切の玻璃戸が開いた。

二人は驚いて振返る途端、お卷が先に立つてどや／＼と、母、父、お柳は丸鬚の中を銀釵の脚で掻きながら入つて来る、後から悚々と惠美耶も從うた。

「これが孫だつてねえ、眞實の孫だつてねえ。」と、お節は左も愛らしさに得堪へぬもののやうにしきりとお卷の頭を撫でながら、顔の相好を類してゐる。

「何うも、誠に不思議だなア、膚、早く左様云つて聴すればいい事に……」と、父も愚癡を溢しながら莞爾々々もの、お柳も尾に附いて、

「眞に、不思議な事ですねえ、この娘から皆聴きました、何うも不思議ですわねえ。」

「あの……お初にお目に覚ります。」と、お澤はさすが恥らふやうに、一同へ挨拶する。

「あの……貴方がお嬢さんで……岸野のお嬢さんで……」と云つて、會釋しながらお節はしげしげと見詰めた、眼元は稍霽んで来る。

「何うも飛んだ事で……」とばかり父は胸が塞がったやう。

「庸之助が事で何うもいろ……私は姉でございます。」と云ふ聲も濕つてゐる。

「オヤ左様でございますか、……何分、この娘の事をよろしうお願ひ申します。」

「孫ですもの……聴かない中から何うもそんな氣がしましてねえ。」と、お節は鼻聲。

庸之助は唯俯向いて、息を屏めてゐる。と見ると、惠美耶が悄然と後に立つてゐるので、お節は振返つて嘲み顔。

「ア、これは私等の孫だよ、此所のが庸之助の本妻だからね、汝左様思つてお居……もう、もうお巻を叱り付けたりなんかする事は出来ないだよ、好いかい。」

惠美耶はパチと眼を睨いて、そして今怨を含んだ瞳の、睨むが如く庸之助の方を見遣つた。

貌は颯と血走つて、宛ら燃ゆるがやう。不思白い齒を噛み締めた、途端足元が踉蹌とよろめい

て頬邊には一滴、血のやうに温かいのが。突如、玄關口に、どや／＼と靴音が亂れて、騒々しく駆け込む人景色。

「御用ツ……」の聲耳を劈いて、警察の提灯が三つ四つ、ガチャン／＼と激い響がして、碎けた玻璃戸は早、蹴倒された。

(四十六)

秘密……夫の秘密そのものを、始めて悟り得た惠美耶の心は傷れたのである。未だ嘗て、嫉妬といふものを知らなかつたその胸は、怪しく燃えて、張り裂けるかとばかり、愛のために濺いで未だ嘗て怨の一念に零さなかつた、涙、それが今、拂へども／＼、しとど臉を曇らせて来る。

父も母も自分には辛れなくて、事の仔細を話してはくれないまでも、あの女を本妻だと云ひ、お巻を實の孫といふからは、昔の情婦と未だ縁は断れてゐなかつたのである。よくも人を欺したもんだ、よくも處女を弄んだもんだ。否、神様

の前で嚴かな式まで擧げて、立派に結婚をして置きながら、斯様な事があらうとは、あまりと云へば大膽過ぎた、天父を輕んじ、聖靈を汚し、實に地獄の火に投げ入れらるゝにも當るほどの、大罪惡ではあるまいか。何の罪で拘引されたものか、その廉は自分には分らないけれども、あの

女と一緒にあつた處を見ると若しや姦通……そんな事ではなからうか。あの人が斯る惡魔であらうとは、知らなんだ、知らなんだ、夢更々知らなんだ、これまでその人の半身とも思ひ、身も靈も捧げて侍つてゐたものを、欺すにも程のある、騙かすにも法のある。口惜しいツ……口惜しいツ……もう口惜しうて堪らない。

白い鷲ペンを執つて、紫のインキの、この事一始終を米國なる父へ報知の手紙二三行横文字の、走り書にしたが、さて、口惜しさと悲しさと、切なさだが、胸一杯込み上げて来て、なか／＼ペンは動かない。ぼたり涙が落ちたので、紫の文字が浮いて、汚點になつた。エツ……と切商して、直と又ペリ／＼それを噛裂いて、揉みくちやにして、物狂ほしく床の上へ投げ捨て、了ふ。

又一枚、紙を展べてさら／＼と走り書、四五行進んでペンは又動かない。このやうな事報知せて遣つたら、父は何んなに驚ろくであらうか、日常病身の母が、何んなに驚ろくであらうか、最初、日本人との結婚は不賛成だと云

張つて反對した、あの頑固な叔父さんが、何んなに怒り立て、兩親達を虐める事が、懷妊のやうなと云ふ報知を送つた時喜んで、早く

赤兒の寫眞を一枚と、氣逸に云つて寄越した末の妹が、又、裏の花園で自分と別れを惜んで泣いた、その時よりも、更に泣いて、泣いて泣きくつをれるであらう、思へばこんな報知をするのは、一家の平和を擾亂す魔の使を遣るのも同じ事、左なきだに、海山萬里を隔たりて、自分の身の上を氣遣うてゐる家族の者を、氣遣に死なしむるには當らぬ事、寧ろ止めて置かうか、止めた方が好いかも知れない。

とはいへ、これが報知せてやらねばとて、そのまゝで済む事ではない。自分獨で泣き死ぬよりは、親兄弟にも泣いて貰つて、その悲を分つのがせめてもの心遣り、報知せてやらう報知せてやらうと、又も二字三字と書いて行く。寧ろ歸國つて了はうか……とも思つて、茫然考へても見たが、夫が拘引さるゝ時、如何にも悲しく、切なさうに、哀を求めるといふ眼光で自分を見て、「許してくれ、よろしく頼む」と、低聲ながら三度許繰返した、その刹那、もう云ふに云はれぬ憐れさの情が、胸の底から湧き出でて怒みつかみも忘れて了つた事——その事を思ひ出して見ると、又實に、夫が可哀さうでならない。如何に其罪は憎むべしとはいへ、「許してくれい。」の一句には悔改めの心が充滿てゐるでは

あるまいか。許してくれいよろしく頼む。」自分のやうな者を頼みに思うてゐる、その心の中を推測すると、又謂知らぬ涙も出る。

考へては書き、書きては考へ、やがて漸く五六葉書き了つたので、一應讀み返して見ると、冒頭から夫の罪惡を並べ立て、舊情婦と、未だ内縁の切れなかつた事、しかもその仲間の子のある事、自分の欺された事、二人の拘引された事、一々書き附けて如何にも口惜しさ、怨めしさの文字づくめである。二度、三度、讀み返して見る中に一種云ふべからざる不快の情が、胸に斯う重石を置くやうな氣味合で、あまり自分が人の罪を數へ上げる心の淺猿しうも思はれる。何故、夫が拘引せられて行つたか、如何なる仔細のある事か、詳細い事情を知りもしないで輕率な心が附くと、何處かで神様が自分を嘲つてお居なさるやう。ふと眼を舉げると、傍の壁にビンで留めたる牌の文字「There is none righteous, no not one」(義人ある無し、一人もあるなし。)とあつた。

惠美耶の眼は今、電のやうに閃めいてペリペリと手紙を一葉一葉裂き始め、果は粉塵微塵に引きちぎり、掻き破り、そこらの床一面、落花狼藉の模様を印した。二階には母が病氣で

臥つてゐる「よろしく頼む。」その言葉が今再び、耳根で囁やかれたやうで、急速に、身を起して階段の方へ走つて行つた。面は宛ら希望の光で白々と輝いてゐる。

(四十七)

「御容子如何ありますの、阿母さん……お暇入みなさつたのありますかね。」と、惠美耶はお節の枕元に差寄つて、横顔を覗きながら恐るゝ云ふのである。

「イヤ、格別、左様心配する程の事でもあるまいよ。」と修造は傍に控へてゐる。

昨夜、庸之助が突然拘引せられて行つた時にお節は驚愕と失望と心配とが一時に込み上げで、その場に卒倒して了つたのである。かねての持病もあるが、心臓に異狀を患してゐるといふ醫師の診斷であつた。

「あ、お粥煮るよろしうありませんか、牛乳は阿母さま、お思ひましたのね。」

「ウム、牛乳なんか、向附くと云つてゐるのだ。」と、修造、嘲み顔。

「鶏卵、よろしうありませんうかね。」

「左様さ……まアそんなものなら、好いだらう。」

「今朝、少しもお食ひなさらないのありますか

「ら、心配あります。」と、訴ふるやうに修造の顔を仰いだ。

「やかましいッ……やかましいッたら、静かにしな……病人の枕元で、何んだい。」と棘々しう、しかも術なげに我鳴り立てゝ、お節は寝返りした。

惠美耶は如何にも濟まなさうに、耳の縁を眞赤にして、俯目になる。

病人は、ハアハ太息を吐きながら「あの子が……あの子が……あんな事になつて、私がこれほど……死……死ぬるほど心配してるに……やかましい、枕元で……喋舌るなんて……」後は一座寂然と、暫し咳拂ひの聲も聞えなかつた。

段階子を昇る足音、やがて顔をさし出したのはお節、小さい手に薬瓶を提げて、惠美耶の顔を一目睨むやうに、修造へは笑顔で、そこへ正坐つた。

「オ、御苦勞々々……」と、祖父に勞はられて甘えるやうな調子。「私」待つてゐましたの……薬取が澤山來てゐるんだもの。」

「オ、左様だつたかい。」
「ね、祖父さん……お父さんは何故歸つて來ないのだらうね……」と又思出したやうに、祖父

の顔色を窺うて、やがて淋しさに邊りをじろじろと眺めてゐる。

「ウム……その中……今に歸つて來るだらう、心配しないが好いよ。」

惠美耶は黙つて、二人の問答を聞きながら薬瓶の、横に印の入つてある處まで、小さい玻璃杯へ濺ぎ込んで、「今、差上げて、よろしいありますね。」

お節が領いたので、膝行り寄つて、
「阿母さま、お藥あります。」

「何……一服を降つて、少し身を起しかけて、杯へ口を寄せる途端、不思議返つて、コホコホと吹き入つた。

「オヤ……」周章で、背中を撫で下さうとすると、沒義道に身を揺つて、咳ながら、
「人を……人を……何んだ。」罵りさま、玻璃杯を取つて投げ附ける、發止、惠美耶の横顔へ當つて碎けて、颯と散る藥の水沫、皮が傷れて一滴、葎のやうな紅い玉がぼろろとこぼれる。

「呀ッ。」と思聲を立て、手巾を押當てると、白い絹地に唐紅が見る／＼しみ渡つた。

「こ……これは……」修造、さすがに驚いて、如何にも氣の毒さうに、惠美耶の方へ一膝膝行り出る。

「何んだつて……この……この異人……この毛唐人めがあるばかりで、あの子、あんな事になつたんだもの……」此奴のお蔭で……殺したつて……殺したつて腹は癒えぬ……」と病人は物狂ほしげに叫り立てる、恐くは、魔の叫び聲であらう。

お節は子供心の、只米れてゐた。

(四十八)

惠美耶が、無法にも顔を傷けられて、鮮血の道中にも苦痛の色を見せまい、煩悶の様子を隠さうと力むるいちらしきには、さすが、父の修造も心折れて、かほどまでに優しい女、假令、毛色が異へばとて、障の色が變つてゐればとて、それが何程の事であらう、庸之助は好い妻を持つた、自分等は好い嫁を娶つたものだ。思へば是迄何彼に就て邪慳に當り散し、出て行けがしの仕向をしたのが、つく／＼恥かしうなつて、罪の報酬の空裏ろしくも感ぜられる。今更それと謝罪るといふも可笑なものだし、さればと云つて、このまゝでは氣が濟まず、せめてもの心遣り、以後はお節にも云聴せて、あの女を優しう待遇ふやう心得させ、自分は又嫁ながら力になつてやるが好からうとまで、思ひ定めたのであつた。

罪無くして血汐を流した十字架の上の人……それを憶へば顔に受けた微傷が何程の事であらうか、凡夫の身の淺猿しさには、一時は怨めしくもあつた、口惜しくもあつた、又何とも云ふに云はれぬ、掻き撚り度き思が、胸の中に込み上げて來たのもあるが、自分が悪い、自分の足らはぬ所爲だと、我と我が心を抑へ附けて、さて振仰いだ時に、彼の十字架上の人が夢幻の中に見えて惠美耶は限り無き慰藉と、盡きぬ喜びの情に満され、自分で謂知れぬ涙を浮べたのであつた。それさへあるに父の修造、今まであまり口も利いてくれなかつたのが、その時より心熔けたやうに、さまじく自分を勞り慰めて、何も彼も打明けてくれ、眞そこ我が娘待遇、此方にも早、何だか實の父のやうに、懷かしきの情も起る。

夫の身の上も、聞けばなか／＼自分が怨めるやうな筋ではなく、今までの邪推とは裏反對の、氣の毒な、哀れな、身を切らるゝやうな、いとしさの限りである。一時の迷から、國元への手紙を書きかけた、その事が今更、背へ汗の浸潤む程恥づかし、よくも思ひ止まつた、これにも神の冥助の難有さを感じるばかり。思へば我が夫——いとしの人は今頃何うしてゐるゝ

であらう、「許してくれい、頼む。」と云はれた、その言の中には自分へ對して謝罪の意が、無限に罩められてゐるではないか。勿體ない、偶とした事の齟齬から、斯う云ふ次第になつたのだもの、自分は謝罪の辭を夫から受取る謂れはない。否、自分こそ、一時の邪推、僻見、それを夫に對して謝せねばならないので、又、飽まで同情を寄せてゐる事を、夫に知らせて、慰め、勞らねばならないので。

斯く思ひ至つた時に、惠美耶はもう矢も楯も堪らない。密々父へ相談して、早速その承諾寧ろ贊成を得た。

「では、一寸行つて參るあります、阿母さん……一寸……」

お節は背を向けて臥つてゐる、惠美耶は顔に、白木綿の細帯をしてゐた。上眼縁が少し腫んで來てるやうだ。

「行つて來るが好い、家の事はあまり心配せぬやうにと、左様云つておくれ、母が病氣の事なども云はない方が好からう。」と、修造は、眼の中を濡ませてゐる。

「ハイ……よろしうあります。」

「席に、逢ひに行くんかい。」と、案外優しい聲でお節は云つて、振返つたが、細帯を見ると、

直と又、彼方へ寢打返。

「ハイ、行つて參るあります。」

「私が心配してゐるから……早う歸つて來るやうに……左様云つておくれ。」

「左様、申します。」

「何處へ……父さんに逢ひに……」と、お卷は、祖父の顔を見ながら云ふ。

「汝も一緒に行かないかい。」

「私、父さんは見たいけどもね。」

「一緒に行きませうか。」と、惠美耶は笑顔。

「父さんや、母さんは見度くて仕様がなないけども……」

(四十九)

鍛冶橋監獄に繋留中の未決監囚場宮席之助は看守と看守長との立會で、妻の惠美耶及び子のお卷と接見を許されたのである。

板で中仕切の、唯、小さい狭い窓口から席之助は顔許差出してゐる。俄かの間に、早煩の肉がげつそりと殺けて、額骨が目立つやうに高く現はれ、眼窩が際立つて、陥込んでゐる。

一日見るより、惠美耶は唯涙であつた。

「何うしたの……そ……その額は。」と席之助は妻の細帯に目を附けて、氣遣はしげに尋ね懸ける。

答もしないで、鼻汁を吸り上げてゐた。

「父さん、母さんは居ないのね……、母さんは何處に居るの。」とお卷は子供心の、足を爪立て、春伸をして、窓の中を覗かうとする。

「オ、……阿母さんは……阿母さんはゐないよ。」

「あの、良君、嘘ぞ御難儀ありませうね……」と惠美耶は漸く咽ぶやうな聲音で云つた。

「何とも……何とも早、面目ない……仔細は聞いて下さつたでせうが、唯、私は決して貴方を欺いたのぢやアありませんから……當初、結婚する時に決して貴方を欺いたので無かつた事だけは、承知して貰ひたいので……」語氣もいと改まつてゐる。

「そ、それは存じて居るのあります。」

「私はもう神様からも、人からも見捨てられた體です。この上何んにも申しやうはありませんが、唯一言貴方に謝して置きます、是迄、満身の愛を捧げてこの、罪深い私に親切を盡して下さつた事、これだけは、私は死んでも忘れませぬから、その段は……」呢と俯向いて暫しは聲を吞んだ。

「良君、そんな事を……神様からも、人からもつて……左様、お見捨てられなさる譯ありま

せん、良君悪い事ありません、事の顚離からで……私、決して良君を見捨てる處ではないのあります……」

熱心、面に現れて、瞳には同情の火の燃ゆるがやう。

お卷が、ずりりと手柵を滑りぬけて窓口に兩手を掛け延び上らうとするので、「コラッ……」と云つて、看守長は、その小さい肩を押へて、靜かに手柵の外へ出した。

「そんなに……そんなに思つてゝ下さるのは難いよりは、寧ろ、苦しいです、この罪惡の塊を貴方のやうな……天使のやうな方が、左様云つて下さるのは、實にもう、胸が張裂けるほど苦しいです。」

「そんな事、良君……そんな勿體ない事……」と、惠美耶は手巾を噛み締めてゐる、顔の筋肉が、痙攣發作のやうに顫へて止まない。

「父さん……父さん……何故、歸られないの、母さんと一緒に居るの。」とお卷は鼻聲。

「オ、汝も……汝も何卒……決して悪い事をしてはならんぞ、惠美耶さん、この子の事と、そして懼りながら、親達の身の上を顧みます……貴方の額は又何うしたのですか、それも氣懸でならんですが……」

「これ、少し負傷をしたのあります、眞の少し……」と言葉を濁し、扱改たまつたもののやうに、

「私、鳩宮夫人あります、お父さまや阿母さまの事、御心配入りません、この御子私の子と云うて可愛がります、私、子産れましたら、同胞二人になりますから、良君此所から出なさるありますと、何んなに樂しいありませう……阿母さまも御心配なさつて……良君の早く御出獄、俟つてゐられます。」

「左様でせう……實に不孝とも不義とも……」聲を顫はせてゐる。

「何卒、體の御用心第一ありますよ。」

「ハア、難有う、貴方も何卒……お卷や、好いかい、これを汝の阿母さんと思つて……眞實の阿母さんと思つて、大切にするんだよ。」

お卷は眼に涙を灑らせて、早しく泣いてゐる。

「お卷さん、……泣くいけません。」と、惠美耶は片手をお卷の頭に遣つて、自分は少し俯向いて眸に溢るゝ涙を拭はうとせず、胸を押へて行んでゐる。

看守長は今、果りに懷中時計を眺めて、又窓口の上の柱時計と見競べてゐる。

「何卒……何卒、よろしく……父にも母にも……植木監督には、實にもう……」云つて俄に心細さうに惠美耶を見入つて、「お察し下さい私の罪は、夜も晝も、私の心を責めて寸時も眠る隙はありません、神様の罰は、地獄へ陥るのを待たないで現世で報いてゐるのです……差入物は聖書を願ひます。惠美耶さん、私は毎夜毎夜苦しい夢に魘されてゐます、何卒、私の爲めに、貴方の清い祈を願ひます。」語呂もしどろに亂れてゐるので。

惠美耶は返答も得せず、今は手巾で額を蔽つてゐた。

(五十)

植木監督は銀のやうな白髭を撫でながら脇掛椅子に倚りかゝつて、片手は洋袴の上へ落し、兩足揃へて如何にも威儀嚴然と姿勢を崩さない。そして、其鐵の寄つた額際には何となう愛が溢れてゐる。

「私も一時は驚ろいたのです……何かの間違だらうと思つたのですが、併し、事情を聴て見ると實に氣の毒千萬な譯で……脱獄者を隠匿したといふ點は、鳩宮君に似合はない事をやつたものですが、それも前後の行掛りで、人情負けて了つたのでせう、私は決して、鳩宮君を悪くは思

つて居ません。」と、隔意なく打解けた調子。

「貴君、そんなに仰やつて下さるありますと、私もう、斯の上臈しい事ありません……夫も、貴君へ面目ない申しまして、それを苦にして居るのあります。」惠美耶は唯もう胸迫る思ひで、正面に監督の顔を仰き見る事は出来なかつた。

「左様ですか、それは何うも氣の毒です、何れ手紙でも遣る事にせまう。實は今日、御留守宅へお見舞旁々伺ふつもりでゐた處へ、丁度御出で下さつたやうな次第で……」

「御見舞下さる事ありません、それでは済まないありますもの。」

「否、何うしまして……教會の信者方も又何とと思つて居るだらうし、實はそれを取銀め旁々参らうと思ひましたので。」

「ハイ、誠に難有うあります……」

「鳩宮君が御留守中は、貴方代つて、教會を牧して頂き度いですな。」と稍改まつて命ずるやうな語氣。

「ハイ……私、そんな事出来ません……信仰が弱いありますから。」顔を赤らめてもぢくしてゐる。

「左様御辭退には及びません、貴君が御承諾下されば、教會の信者方一同が幸福です。」

「ハイ……難有いお言葉ありますけれど……」と、思ひ餘つたもののやうに、羞慚向いて考へてゐる。

「主の爲めですから、當分お遣りなさい。」

「ハイ……」と漸く面を上げて、「では私、力限り致して見ます、何卒御援助け下さるやう願ひます。」

「よろしい、御承諾下されば、私も及ばずながら力を添へませう、そして御一家の經濟向も随分御困難だらうと察してゐますが、折角、駿河臺の女學校の方に會話の教師が缺員だと云つて來て居りますので、貴方その方をお遣りなすつては何うでせう。」

「それは何うも難有う……折角、その方の事も御相談したい思つて、上りましたのあります。」と、惠美耶の眼には喜びの色が溢れてゐる。眉も軋々と、心から嬉しさうで。

「左様して下さると、私の方也非常に好都合です。」と監督も左も満足げに、豊かな頬邊に微笑を浮べて不知々々、卓上の白磁の花瓶に活けた黄菊の花の、手近なのを一輪撈り取つて、嗅いで見るのであつた。

「實は母、病氣ありますし、差入物致したうもありますし、何彼と費用掛りまして……」

「左様でせう……お察し申します。」と、老牧師の顔には今一點、露が光つてゐる。

「今、何時ありますかね。」と思出したやうに問うた。

「未だ早いです……五時です。」

惠美耶は新婚の記念の爲めに、特に誂へて造らせた、精巧の、小形の、器械に金剛石を鑲めた女持の金時計、それを昨夜見倒屋に賣り拂つて了つて、米屋其他の支拂残を一應済ましたのである。衣服も早大分汚れて、洗濯屋に廻すべきであるが、着替一枚も残さないで、それならず、竊かに自分の後影が見らるゝやうだ。

「あの、お暇致します。」

「まあ好いでせう、序に晚餐でもお済ましなすつては如何です。」

「難有うありますが、あの、今晚祈禱會ありますから……と悄然椅子を立離れた。

(五十一)

「一旦、柿色の囚衣着たものが、牧師さんに成れるでせうか。」これは牛込教會の金曜日の祈禱會が始まる前、婦人席の一椅子から起つた聲である。

「牧師面ぢやアない、車夫になつたつて、人が相手にしやアしないわ。」と四十恰好の、痘痕面

の大年増。

「乞食になつたつて、鏝一文も遣りたくないわ。」と、之に和するものがある。

「だけでも、悔改めりやア善いやうに思ふんだがね、牧師さんなんかには、左様行けないもんでせうか。」と、原案提出者は恐らく懷疑派の一人と見える。

「悔改めたるたつて、エスを賣つたユダは何うです、首を吊つて死なねばならなかつたぢやアありませんか。」と、眼鏡を掛けた一人の女學生。

「そりやア、ユダなんかはお話にもならないんですが、外の、法律上の罪を犯してそして後、悔い改めたものは何うでせう。」

「處がその法律上の罪を犯すと云ふのが、ユダのエスを賣つたのも同じ事になるんだらうぢやアないかね。」と、女學生愈々得意。

痘痕面も、雷同者も、乃至懷疑派の原案提出者も今、既に鐵案を下されたやうに、唖ツと感じ入つて黙り込んで了ふと、突如、

「それはいけません、そんな事を云つてた日には、一人だつて救はれるものはありやアしませんわ。」と椅子の隅から、被布を着た活潑さうな婆さんが喉を入れる。

「否、間違へちやアいけませんよ、牧師になれ

るか何うかといふ問題なんですから……。」と、女學生先生至つて鷹揚である。

「牧師にだつて、神様にだつてなれますとも、悔改めさへしたらね。」

一句に荒腔を挫かれて、人々互に顔を見合せて暫、口を噤んだ。

「ですけれど、出獄人保護事業なんか、まあ適當でせうよ、牧師さんかやア何うも……。」と顔色無かつた女學生が、漸く盛返した。

「××さんが……あの、×××の女房なんか、矢つ眼、説教を聴きに來たつて、常時この席へは入らないで、あの柱の隅ツコの方へ小さくなつて屈み込んでるのですもの、まあそんなものですわ、物の譬がねえ。」と、例の痘痕面が氣を上げる。

「そりやアね、世間は矢つ眼、理窟許りぢやアいけませんからねえ。」と、援兵一人。

「理窟を云ふんぢやアありません、唯、愛の一字で結構ですよ。」と婆さん、寸鐵に留を刺す、一座寂然。

衣ずれの音、腰掛の、長椅子と長椅子との中間の一條の通路を、聖壇の方へ向けて靴音淋びしげに歩んで行くのは惠美耶である。夜會くづしの髪は亂れて縋帯の上で渦巻いてゐる。

鈴が鳴つた、一齊に衣紋を揺るる、惠美耶は此方へ向いて、愁然と椅子に倚かゝる、顔色も青白く曇つて見えたが、雙の瞳には何となう瑞々しい、希望の色が輝いてゐた。

讚美歌は、「くもぬのみや」の一節、それは、今夜の司會者たる惠美耶夫人の胸に深く、印刷されてゐる——夫が新任披露の當夜、満堂に鳴り響く聲も高く唄はれた歌ではないか、それを今、唄うて見るのが又慰藉の便宜ともなるので。

一齊に會衆は早、聲を張揚げた。その中で一縷、際立つて耳を貫くやうに悲しい、又憐れな、泣くが如く、訴ふるが如く、細く長く引く聲音が紛れもせず、あり／＼と聞えてゐるのである。あはれ斷腸の聲とは是であらう。

會堂の鳴りどよめくやうな、歌の餘波が今漸く四方の壁に消え込んだ時、惠美耶は手をその綯帯で結んだ額際に加へ、額を斜めに、俯向いて、卓上に片腕を凭せ、

「天に在す我曹の父よ、我が夫は愛の爲めに獄屋に繋れました、同情の深かつたあまりに獄屋に繋れました、何卒、彼の罪を赦させ給へ。オ、父よ、我夫は愛に満ちて居ります……父よ、我夫は……我夫は獄に……赦し給へ……」

父よ。」帛の破るゝ如くいと打顫へたる聲音の、果はしどろに亂れて、わつとはかり、卓の上に泣伏して了つた。

(五十二)

「まア、そんなにまでして、お氣に入り度いと思ふのですかねえ。」とお柳は、父から一分始終の談話を聞いて、如何にも感に得難へぬやうな面地の、片手は乳際へ、片手壁に突いて、ホツと吐息をした。このごろ一入寢れたやうで、何うも血色が勝れてゐない。眉間には消えやらぬ愁の小皺、左様思つて見る所爲からか、眼が少し窪んだやうな。

「私はもう氣の毒でならないんだよ、阿母様にも虐めるの丈は止つて云つてゐるのだが、何うも折々無理な事を云出して困らすんだよ。」

「そんなにね……そんなに親切に介抱したり、機嫌を取つたりしてゐるのなら、阿母さんも成丈ね……」

「親切つて……あの女の爲めに、庶之助が牢へ入つたんだと思ふア……それが怨みで……」とお柳は此方へ寢返して、眼を絲のやうに睜つて、お柳を見る。

「そりやア汝、何んでもない思ひこつてえもんだらうちやアないか。あの女の爲めにつて

……少とそんな事はありやアしないぢやアないか。」

「阿父さんは……阿父さんはこの頃、大そうあの女を御忌辰になさつてね……忌な……毛唐人なんか……」

お柳は一膝押進めて、

「阿母さん、今聞きますれば、彼女が餘つ程親切にしてくれるといふぢやありませんか。私なんかも、何うも毛嫌をする方の質で、あまり氣に入らないのでありますけれど、そんな事を聞きますと自分の身に引比べて見て何だかもう可哀さうになつてね……私も家で、この頃は随分辛く當られるもんですから、もう飛出さうかも飛出さうかと思ひ詰めてゐます其心中の苦しさ云ふものは、何とも彼とも云へません、が、惠美耶さんの事を考へるとね……そんなに額なんか割られても、それを何とも云はないでぢつと辛抱してゐるなんかにえな事を考へて見ますればね、私の辛いなんかと溢してゐるのは、未だ……我儘だと思つて却つて、恥かしい位ですわ。」

お柳もさすがに、顔色を動かしたやうだ。

「左様さ少しは我が子の事も考へて見て、あの女が可愛くたけりやア、せめて憎まないで

ゐてくれりやア好いんだ……席之助が此度の事件も、先の女が基なんで……岸野のお嬢さんから起つた事なんで、少ともあの女に關係のある譯ぢやアない。飛んだ考違ひから怨を人に着せて虐めたり、苛んだりするのは、實に罪な事だよ。」

「私のは、旦那に虐められると云つても、打つたり叩いたりせられるんぢやアない、唯まあ見せ附けられる位なんですよ……それを何うも……阿母さん、もうくく酷い事をなされますな。」

「この頃は毎日、女學校へ行つて、随分勞れて歸るんだから、少しは氣の安まるやうな言葉も掛けてやらなくちやア……」

「左様でございますよ……庸さんがあんな事になりましたのも、何方かと云やア、畢竟惠美耶さんを、家で、あまり虐めるもんだから、それで自分にも面白くなつて、先の女に繋合を附けたつてえやうなものですからねえ。」

「其處も大ににあるよ……それに、次第とお腹が大きくなるのだしね。」

「左様ですつてねえ。」とお柳は一寸思案顔。

「私も……子さへありましたら……」と云つて、「愚癡ですわねえホ、……」

お節は又眼を睜つて顔に皺を寄せて「種種兒なんか忌な事だ。」と嘆きつゝ如何にも憐むやうにつくく娘を見て、「汝、子がないからつて、そんな事をくよくよ思つて、何卒病氣なんか出さないやうにしておくれ、庸は……庸は彼様だし、汝許を倚頼に思つてゐるんだからねえ。」

「ハイ……とお柳は、もう鼻を詰らせてゐる。

「もう、彼は、孫も歸りさうなもんだ……この頃は、彼が女學校の一年生で、勉強家といふのださうなハ、……妙なものでなう。」と父はわざと笑を粧うての自慢顔。

「オヤ……左様でござりますか。」と、眼をばつちり。

(五十三)

惠美耶は今日も女學校の退出際を、連れ立つて、例の如く監獄署へと廻路し差入物を済ましての戻り掛け、海老茶の袴を穿いて、書物石盤の包を小脇に插み、毛糸で編んだ辨當袋の緒を小指に絡んだお卷の肩へ手を造つて、綺れつ純れつ今我家の門を漕らうとした時、丁度玄關口から棍棒を擡げて引き出す蟻塗の車、紫編子の蝙蝠傘を掲げてゐるのを、見上げるとお柳であるから、周章しく禮をする。

「オヤ、お歸りですか。」と、優しく云つて、丁寧

に叩頭を返した。車夫は早、引き出して行く。

惠美耶は、嬉しさに胸を跳らせた。お卷に向いて云つたのではあるまいかとも思つて見たが、併し姉の瞳は慥に、自分の瞳と合つてゐたのであるから、自分へ向いての言葉に違ひない。従前はひどい顔も見せず、口も碌々利いてくれなかつたお人が、今日はまた打つて變

つて、優しく、馴々しげに物を云ひかけてくれたといふのは、何うした譯であらう。お父さんが左様云つて下さつたのかも知れない。誠の貴かぬ道理はなく、愛に克つ敵はないとはいへ、自分の愛自分の誠は未だ……盡し様が足りないのに、思へばお父さんのお情も難有く、姉さんの御心の解けたのも、嬉しい事の限りと云ふもの、

阿母さまもその中には、屹度、自分を愛して下さるに違ないと、早天國へ昇る路筋を見附出しでもしたかのやうに、勇み立つ心を押へ、茫然と、俥の後影を見送つてゐた。

「母さん……母さん……」虚空に聲あつて叫ぶやう。

「母さんてば、母さんてば。」漸く氣が附いて見ると、お卷が二階の櫺子窓から顔を出して、自分を呼んでゐるのである。狐疑深く見えてゐたその眼光、このごろは唯もう愛らしく、無邪氣な色

を浮べて、頬の肉附ふくやかに、氏より育ち、器量も一段と立優つた美しい小娘である。

「オヤ……もう上つたの……」と云つて莞爾、

いそぐと惠美耶は入つて行く、額の縞帯はもう取れて了つて、傷痕は小さく癒えてゐるが、それが眉間の痣のやうで、一層慈悲の相にも見える。毛糸で編んだ、目の疎い手提の中には、林檎が何が入つてゐた。

お巻が母さんと呼ぶのは滅多に無い事である。祖父はいきりとそのやうに教へてゐるが、先生と云つたり、叔母さんと云ふ方が多い、併し、この頃は次第に懷いて來て、昔日のやうに、白い眼なんか見せる事は、絶えて無くなつた。

「只今……」と、惠美耶は下手へ正坐つて、丁寧に挨拶して、

「あの、阿母さま、御病氣如何ありますの……少しはよろしいありますか。」傍へ膝行り寄つて、様子を覗ふのである。

「別にもう髪りはしない……、追々快くなる方だよ。」と父は執成顔。

「あの、今日、好い林檎ありましたので。」云つて、手提の口を明け、皮の紅く色ついで、一部は未だ少し青い、小手鞠程の林檎三つ四つ、取出し、轉け廻るのを押へて、「阿母さま、これお

上りなされませうか。」

「オ、お節……惠美耶さんが、林檎を買つて來ておくれだよ。」

「左様……」と云つて、一寸振向く。

「只今、皮割きます。」ナイフを手提の底から取出して、銀の刃に、蛇のうねく巻き附く如く、やがて巧に皮を剥き了つた、乳白の質の、汁が滴りさう。

「さア、お節……」修造が、それを口端へ差寄せてやると、吸ふやうにする。

「母さん、私にも……」とお巻は甘える。

「上げるのあります……」階下の部屋へ行つて勉強して、それからね。」

「オ、お巻、階下へ行つて、復習して來るが好いよ。」

「さア、お出でなさい。」と、先へ立つ惠美耶の背へ小羊が母に縋るやうに、もつれ附いて、
「復習したら林檎をおくんなさいな。ねえ母さん林檎をね……」

(五十四)

牧師鳩宮庸之助が、囚徒逃走の教唆及隠匿の被害事件と、それに關聯した脱獄の重罪囚、岸野澤の公判は、愈々本日、東京地方裁判所法廷に於て開かるゝ事となつた。豫審は意外に早く

終結して、是迄の手續は頗る敏活に運んだのであるが、畢竟、被告人が敢て抗辯もせず、潔く服罪したからでもあるといふ。

時刻前から傍聴人は陸續と詰掛けて、早満延立錐の餘地もない程であつたが、中に殊更、人の注目を惹いたのは、前の凡格に、病み疲れた老婆を片手で抱きかへて、愁ひ顔の色青さめ、髪を覆ひの、性來、眉鼻立の美しいのに照り映えて一入いぢらしくも見える大丸鬚の、白襟紋付、黒縮緬の羽織着流した奥様風俗、これは田島のお柳である。同じく件の病人を一方から支へてゐる手先の妙にふるふる懐へて止まないのと、目の下の皮の痙攣發作でも起したやうに、果りと微かに動いてゐるのが、人の目に怪まるゝやうなのは庸之助の父の修造、お巻は例の、海老茶の袴で祖父の横手に悄然と控へてゐる。その小さい手把つて、自分の膝の上に載せ、眞黒な洋服着の飾氣のない冕帽を眉深に冠つて、いたく思に沈めるものやうな様子の西洋婦人は、即惠美耶で、之が又最も満堂の注意を呼び集めた。

程なく看守に導かれて、傍の入口から悄々と宛ら小羊の屠場に引かるゝ如く、しかも又何處か寛裕と、覺悟を定めたものやうに、敢て迫

らざる態度で、やがて裁判長の面前に、悠然として突立つた鳩宮席の助、黒のモーニングの、垢つき汚れたるを着て剃刀當てぬ髯の髻々と、口邊から顎一面を蔽ひ隠し、頬骨は高く尖り、眼窪陥りて血色いたく勝れず、一體斯う育氣のない、枯びたやうな調子。兩眼のみは、皺を疊める臉の底から爛々と、星の如き光を放つてゐる。一座を竊むやうに見廻して、其視線が、ふと前の几椅に陣取れる人々の上に落ちた刹那、眼中異様に閃めくものがあつた。直と俯向いて、愁然と足の爪先を見詰めてゐる。

「庸や」と叫びかけた弱々しい、左も疲れたやうな聲音は、ハタと、修造の片手で遮られた。

「黙つてるんだよ、お節。」耳邊へ口を寄せて極めて底い聲で囁くのである。看守の眼は、雷光の如く此方へ凝がれた。鼻汁を咬る音、それも今は邊を憚るやうであつた。

その時更に満堂の視線を一身に引き集めて、看守に導かれながら手櫛の前に歩出でたのは、例の柿色の囚衣を着し、手錠を卸された、色の青白い巻髪の方である。始終俯向勝て、如何にも萎げ返つてゐるが、折々席の助の方を竊視するやうにして、哀を乞ふやうな眼色であつた。

被告兩名の者は、敢て辯護士を要しないと云つて、其屑出を遣らなかつた爲め、當日官選辯護の貧乏籤を引き當てたのは、未だ新米の、年若の辯護士、この頃番へた許りと見えて、一本宛數へられさうな薄ら髭を捻り立て、痰吐器に唾を吐き込んでオホンと澄し、例の黒装束の、未だ着慣れぬらしく、しきりと容體を作つてゐた。

式の如く、住所姓名職業年齢の訊問を了つて、さて裁判長は、虎趾の檢察官が提起せる公訴に據り、被告鳩宮席の助が、女囚岸野澤を教唆し、内外相應じて、遂に之を脱獄せしめ且隠匿したる嫌疑の廉々を述べ、事實如何と、嚴然威儀を正して問ひかけた。

席の助は涙ある眼光に、呢と裁判長の顔を見上げて、いとしく打慄へる調子。

「閣下……私は何にも申上げません、私は大罪人であります……何卒御嚴罰を……」とばかり、悄然と頭を俯垂れて了つた。

惠美耶は仰き見る事も得せず唯手巾を噛み締めた。お澤もしく泣いてゐる。

(五十五)

申上げまして……眞實は、この人に罪はありません。」と、お澤は今甚く悔めるもののやうに、涙含んだ聲の途切れ、「黙れッ！」と、裁判長に一喝されたのも、格別耳へは感ぜぬ如く自由ならぬ手の痛々しげに、只管胸を押へて、眼を拭いて、靜に席の助の方を眺めやりながら、如何にも濟まなさきやうに、打訕びるやうな顔色の、總身をぶるゝ戰慄せてゐるので。

この時、席の助は裁判長の方を仰いで何か云つてゐたのである。

「……私は、若氣の誤過で、一度犯した罪が斯くまでも根強く蔓つて來ようとは夢更思ひも懸けませんでした、今日に至つて見ると、實に空恐しくならんのです、折角、一旦悔改めて、神様の御名の下に立働く身となりながら、其昔犯した罪の爲めに、吾自らを欺き、妻を欺き、親を欺き、社會をも欺いて果が、國家の法律にまで觸れるといふ、實に淺猿しい次第に立至つたのです。私は神様の嚴罰を蒙るべき體です……と甚く激せるやうな調子の暫は言葉も塞つたやうに、席の助は片手を額に加へて呢と俯向いた。

「全く……全く私が悪いからで……この人に罪はありません。」と、お澤は哀訴するものの如

く、裁判長の顔を見上げた。傍聴席の、お巻の眼は怒はしげに瞬きつ、彼の母の顔に従うて動いてゐる。

「否、私は罪人です……大罪人です……罰を逃れようといふやうなこの上卑劣な考は決して持ちません。否、寧ろ、この大罪に相應した嚴罰を受けたら多少我心の苦痛を減ずる事が出来るだらうと思ひます。辯解も、何にもする必要はありません……お澤さん、……貴方に對しては、實に何とも、お詫びの申上げやうもありませんので……」心の底から悲を絞り出すやうな聲で、席之助はちらとお澤を見やつて、而ななさうに俯目になつた、惠美耶は心に、何か祈るものの如く眼を瞑つて、兩手を膝の上に又み合せてゐたが、此の時、如何にも夫の上を憐むやうに、霽んだ瞳を呢と睨つた、病る母、父、姉、いづれも、庸之助の惡快れず覺悟を極めた男らしさ、健氣さに、謂不知涙を催ほすのである。

裁判長は、やがて被告お澤に向つて事實の訊問を始める。お澤はいと殊勝しく、應じたる色もなく、

「ハイ、私は豫審廷で申上げました處は、全く事實とは違つてゐまして、つい心にもない事を浮か浮か御答致したのでござります。私、

が、脱走致しましたのも、自分一人の考からでありまして、その夜、この人の處へ逃げて行きますと、この人は非常に驚きまして、隠匿してくれる事は思ひ直ぐに自首するやう達て勧めますのを、無理に私私が据り込んで動きません。とう／＼心にもない事をさせるやうに仕向けたのであります。豫審廷ではつい呆然してたものと見えまして、曖昧な申立てをしてこの人に嫌疑を掛け甚だ相済みませんでした。今のやうな次第で、この人に罪はありませんですから……何卒この人だけは無罪になすつて……」語尾はさすが顔へて、消えて了ふ。

辯護士はしきりに薄い聲を捻りながら何か考へ込んで、鉛筆の尻でコト／＼卓の縁を叩いてゐる。

虎髯の檢察官は眼を順らして突立ちながら、一本官は被告澤が只今の陳述は、殊更に其犯者を庇はんが爲め、虚構したものであつて、本心より出たものでないと認めます。裁判長は公明なる御判斷あらん事を一言注意致して置きます。」

「決して、私は諱は申上げません、この人には罪はありませんのですから、何卒、私丈を罰して下さいまし、この人が私を隠匿したの

ではなくて、私の方から無理に逃げて込んで行つたのですもの、此の人の心から出た事ではありません。それを罰するといふ法はありません。假令父、それが本心から出た事にしても、其處は人情です、檢事さんでも……」と嘲弄るやうな口調。

「黙れッ！」

裁判長の大喝に、傍聴席のお巻は、子供心の深へ上つてわつとばかり泣出した。

席之助と、お澤とは、一齊にその方を振り向いて、見返りさま、バツと瞳が合つた。惠美耶は蔽ひかぶさるやうにお巻を抱き寄せて、看守の白い眼を遮りながら、慈悲の溢るゝばかり懇め賺すのであつた。

(五十六)

物淋しい時雨がしと／＼と宵の程から小止みなく降りしきつてゐる。市が谷監獄の冬の夜の陰に深けて、暗い暗い魔の住家のやうな監房の其處此處、早敷の聲も聞えてゐる。彼方の、女監取締の見張處には微かな角燈の燈火が、怪物の眼の如く、薄氣味悪い光を放つて、その幻のやうな影を地上に投げ、何となう冥府の光景を想ひ起さしめるのである。

お澤は又今宵も寢就れない。角格子へ手拭を

縛り附けて、縊れ死なんとして死損ひ部長に見附けられて厳しい譴責を喰つたのは早十日も前の事常座は暫の間も眼を離さないやうに、一舉一動に注意してゐた女監取締も、昨今日、漸く氣を許し始めて、此方も亦油斷をさすやうに、左りげなく仕向けてゐたので、今は早心安い。それに付ても、庸之助さんは今頃、何うしてゐられるやら、何の罪も無い人が、自分故に一年の重禁錮、嘔辛い、悲しい思をして、憎い奴めと怨んでも居ての事か、否寧ろ、怨んで居て下されば、又この胸の遺る瀬もあらうに、あの、義理堅い、同情過た御方の事故、公判廷で自分に向ひ、一言半句怨言がましい事云ふではなく、唯々自分で自分を責めて詫言までしてゐられたやうに、矢つ張神様の罰だと諦めて己一人で悶え苦しんでゐてのであらう。思へば、女心の凄果敢な、一日見てより苦戀しく懐かしく城へ切れぬ愚癡が嵩じ、果は大それた半破りまで金んで逢ひに行つたのが抑もあの人の御身に災難のかゝる基、今更この體を八つ裂きにして御詫びするとも猶飽足つた事ではないに、剩さへ惠美耶夫人が如ましく、夫婦一緒に監獄仕居すれば、それをせめてもの心遣と淺猿しい、倭ぢけた根性から、豫審廷で暖昧な事を申立て

て、あの人にあらぬ嫌疑を掛け、非常に迷惑な目を見せたのだもの、済まぬ、済まぬ、如何にも済まぬ、夫は思ひやればやる程、我ながら愛想も小想も盡き果てた、罪深い體、汚れた心、この心が鏡に映てあの人にありくと見られようものなら、自分は何として立つ瀬があらうものぞ、この儘に消えよとばかり、胸を打てば、ジンと總身に響いて、足頸に倅められたる鐵の釧の、今更緊く骨身に喰ひ入る許である。傍では物凄き齒軋の音、ムニヤムニヤと又の分らぬ寢言、子守唄の眞似のやうなのは定めて愛兒に添乳の夢でも見てるのであらう。お澤は愈々、自分の心が心を責めて起つても坐ても居られない。思へば、自分は庸之助さんに對して實に済まぬばかりではなく、父なる人母なる人又姉のお柳さんへも申譯の仕様はない。のみならず、大切の夫を寝取られたやうで口惜し紛れに自分は嫉妬の炎を燃してゐた戀の敵のあの惠美耶が、法廷でお卷を愛してゐて呉れた其素振を見て一日にそれと、その親切の讀まるやうな、何と思つても憎まれない程柔和な愛心の深きやうな顔に、忽自分の心の邪淫の角も折れて了つて今は唯もう氣の毒さが胸一ぱい……。晝間、工場の手仕事の隙にも

始終これ等の妄想に驅られ詰め、夜の床に就けば一々それが胸の上に刺でも植ゑたやうに、苦痛の種となつて、再び入監して以來、未だ一夜さも落々寝就いた事はない。神經は高ぶる、食事は進まない。總身骨が立つて、板敷へ据るも臂の痛さほと／＼堪へ難いやうで、偶々心氣の疲勞にうと／＼と夢幻の境を辿るかと思へば、庸之助の姿、惠美耶の顔、お卷が泣出したその當時の有様があり／＼と眼前にちらついて、折節は、自分が手に懸けて殺した血まびれの人が、恐しい、白い眼を剗いてハツタと睨み付ける。其度毎骨も肉も削り取らるゝばかり、走馬燈のやうにそれを繰返してゐるのである。慙に生てゐて、日夜この苦しい目を見るよりも死んでお詫びと思ひつめて、先夜の失敗には懲りもせず、今宵こそと覺悟を極め、お澤は今薄い冷い衾を蹴つて起上つたのであるが、丁度折悪しく、軒下を靴の音がしてゐるので、又寂然と、寝靜つた振を粧つてゐた。處へ、部長が巡廻つて来て、忍びの角燈よりちらと射出す一線の光、房内の隈々を照し、囚人の動靜を窺うてやがて、立去つて了ふ。片晷を吞んで靜まり返つてゐたお澤は、この時むくりと起上り、手早く上の囚衣を脱捨て、

素肌に唯お仕着の襦袢一枚となつた。夜寒骨に透りて、ガタ／＼と齒の根も合はず胸懷つくを我と我が身に力を入れてちつと堪へながら、件の囚衣を取つて片端からべり／＼と噛み裂き始めたのである。

音が立つので、屢々躊躇うて、邊を窺ひながら或は手で裂いて見たり、齒に懸けて見たり、止めたり續けたり、兎角して、漸くそれを解き了つたらしくホツと小さい吐息を吐いた。一つ宛持つべき筈の手拭は、縊死の失敗以來、取上げたまゝで與へてくれず、細紐で、帶の代用をさせてゐたのである。

せめて、遺書をとほ、臨終の際に、お澤が念頭に浮んだ處であつた。庸之助と、お巻との儂は今あり／＼と暗中に現れて、懐かしさに得堪へない。抱き附かうとすれば忽消えて了ふ、再び描かうとすればおぼろげである。死神が白衣を着て、隅の方で自分を呼んでゐるやうだ。見れば、それは、自分が手に懸けて殺した人で、怨めしさうにハタと腕まれ、總身一時に水を浴びた如く冷淡つて、暫し氣を失つたやうであつたが、やがてその幻が消えて、再び庸之助とお巻との儂が現れたので、欣々語り掛け、周章で、聲を呑んで、グサとばかり、小指の先を

噛み切つた、生暖かいものが、暗中ぼた／＼と滴つた。定めて黒い血であつたであらう。

(五十七)

金の七つの燈臺、その燈臺の間から人の子の如きものが現れた。その身には足まで垂る、紫の衣を着、胸には金の帶を束ね、頭の髪は白きこと宛ら羊の毛の如く、目は火焰の燃ゆるらんかと許、足は爐に焼る眞鍮、聲は大水の響、右の手に七つの星を持ち、左の手に角の鉤を把り、兩刃の利劍その口より出て、面は輝く口の如くである。

我、末の世を審判かん、我、罪の子を滅さんと、叫ぶ響宛ら迅雷の如く轟波つて一聲、鉤を吹き立てるより早くも、一人の天使が白い駒に騎つて、疾風の如く馳せつけて來て、一の星を授けられたかと、見る間に、それが朱の弓と、白い翳矢を手插んで、戦を宣すべく、何處ともなう去つて了つた。金の燈臺の火が一つ消える。次には二聲鉤を吹立てると、こたひは赤い馬に騎つた天使が駈け來つて、また一つの星を授けられる。星は巨なる銀の如き刀となつて、地の平和を奪ひ且人類をして互に相聞ぎ、相殺さしむる權威を與へられた。金の燈臺の火が又一つ消える。三聲目の鉤で、黒い馬に騎つた天使

が現れて、又一つ、授けられたその星は正しき權衡となつて銀十五錢に小麥五合、銀十五錢に大麥一升五合、油と葡萄酒を損ふべからずとの宣託を受けた。金の燈臺の火は又一つ消える。

鉤の第四聲目に、一匹の灰馬が哮けり狂つて跳び來り、投られたる星の一つを銜んだ。これに騎れるものの名は「死」、「陰府」なる天使の一群の後に從うた。彼等は刀劍、饑饉、疾病、及び地の猛獸を以て、世の人類の四分の一を殺すの權威を與へられた。金の燈臺の火が又一つ消える。鉤の第五聲目に、多くの殉教者の靈魂が、一つの巨なる星を中央に取巻いて、宛ら火輪の如く廻轉しつゝ、血の酬よ、血の酬よ、と叫んだ。金の燈臺の火が又一つ消える。第六聲目に非常な大地震が起つて、日は毛布の如く黒くなり、月は血の如く赤くなり、靈空の星は無花果の樹、大風に搖れて、未だ熟せざる果の、枝を離るゝが如く、地上に墜ち、天は巻物を巻くが如く去り行き、山々島々皆移つてその處を變へた。地の諸々の王、貴人、富者、將軍、勇士、凡ての奴隸、凡ての自由、悉く洞穴に墜れ、山の巖の間に逃れた。七つの燈臺の火は六つまで消えて、七つの星は唯一つ残つて血紅色に燎めいてゐる。

庸之助は、火の山、火の岩、火の谷の中を、命辛々逃げ惑うて、漸く向方に、安全の隠れ家らしき洞窟一つ見附けたので、しきりとその方へ心焦かかれつつも、自分の手と手を緊と握り合つたお澤が、無残にも早半は焼け爛れて足腰も立たない體を強ひて引起して、無理遣連れて行かうとする、お澤は唯絲のやうに片眼を睜つて、今にも息を引取さう、額の皮は剥け爛れ、白い頬骨が現れ出て、見るから傷ましい瀕死の姿をそのまゝ地上に横たへようとする。今一步と勵まし立て、叱り立て、遮二無二、引摺り行かうとすれば、「もう、私は……私は、神様の罰で、此處で死んで了ひます……何卒、貴方は、體を御大切に。」とばかり、末枯れの蟲の音を振絞つて、ばたり地上に倒れて了ふ。庸之助は周章で、坳起して、

「何んだ、氣の弱い、これ迄一緒に連れて来て今更、私は汝を捨てやアしないぞ。」と、之も呼吸の迫つたやうな苦しげな聲音。

折ふし、第七聲の鐘が、世界の滅亡を宣告すべく鳴り渡つた。

(五十八)

第七聲の鐘が鳴り渡つた時、一人の天使が雲の翼に乗つて、大聲に呼はり行くかと思ふ間に

血の雜つた雷と火と地に雨降り、地の三分の一焚け亡せ、又樹木の三分の一焚け亡せ、凡ての青草も亦焚け亡せて了つた。

更に、第二の天使が立現はれて、電の如く巨なる刀を揮つて指揮すると思へば忽ち猛火に焚くる大なる山の如きもの、海に投げ入れられ、海の三分の一は血潮に變つて、海の中なる、鯨、鯢、鰐魚、海豚を始め凡ての活物三分の一は死し、船の三分の一は粉微塵に破壊されて了つた。

更に、第三の天使が立現はれ、虚空に向かつて白銀の翦矢を射かくるかと見る間に一の大なる星、明燈の如く燃えながら、怪光を放つて天より墮ちた。即ち水の源は塞がれ、河の三分の一は碎かれて了ふ。この星の名は「菌陳」、水の三分の一は菌陳の如く苦く變つて、多くの人類は爲めに滅んだ。

第四の天の使が、奇なる呼び聲を發して、それが宛ら天地を震撼かすやうであつた。見る見る、日の三分の一、月の三分の一、星の三分の一、皆撃れてその、三分の一、凡て暗くなり、晝三分の一、光無く、夜三分の一、光無し、一羽の鶯、蒼空の中央を飛び廻りて、大なる聲にて呼ぶを聞けば、「地に住むものは禍なるか

な、地に住むものは禍なるかな。」

その時、庸之助の手には、唯、累々たる白骨のみが残つてゐてその軀體からはしきりと白い煙が立つて、それが次第と黒焦に焦げて行くのである。將に腸を斷ると思ひで、そこら邊を見廻したが、お澤の傍はもう幻にも浮ばなかつた。ふと氣が附くと、曉の明星の如く一つ果りに明滅する金の煙臺の影に、紫の衣曳ける人の子、然ゆらんやうな瞳を睜つて、自分をハタと睨み詰め、右の手に一つ消え残る、血紅の星を頭上目覚めて、投げ附けんず凄まじき憤怒の形相、一日にアツと誇、聲も得立てず、身毛竊立たせてぶる、と戦慄しつ不思議地上に抑伏つた。地は一面に熱鐵が熔解けた如く、眞紅に煮え返り、沸き立つて、中を泳ぐ蠕蟻の群れ、忽ち安息の場所を見附けたやうに、頭手足の嫌ひなく、縛れ附き這ひ上つて膚を刺す、肉を咬む其苦しさ、切なさに、狂氣の如く、打ち拂ひ、振落し、駈け出さんとすれば、何時しか焼け爛れて紫がかつてゐた體中俄かにむづ痒さを覺えて、血の精のやうな眞紅な斑點が、ばつと花を散らした如く、皮膚一面に浮び出た、目的の洞穴は、早壞れ込んで、脚の周囲は湯の池、火の池、見る／＼それが血の池

と變る。上よりは星の塊が飛んで亂れて雨と降り、日が碎け落ちて穀と散り、身はこれ生ながら焦熱地獄の呵責。この時までも手を放さなかつたといふものの白骨は、血の池の中から金甲を着たやうな毒龍が頭を擡げて奪ふやうに、それを咬んで、沈んで了つた。後には唯小く太く渦が卷いてゐるのみ。

罪の子よ、惡魔の子よ、汝は神の御名を汚したり、汝はエホバの譽を傷けたり、女子の榮の冠は、其節操にあらぬ乎、然るに汝はその節操を奪ひ、處女の神聖を犯したるにあらずや。人の子の誇はその偽らぬ愛にあらぬ乎、然るに汝はその愛を弄びて、妻なるものを欺きたるにあらずや。殺人犯を出せしも亦汝の罪なり、私生兒を生ましめしも亦汝の罪なり、親同胞を泣かしめしも亦汝の罪なり、社會を欺き世を偽りたるも亦汝の罪なり。就中自ら使徒と名乗り、神の聖靈を汚したる大罪惡、天地共に容べからず、今や世界の最終、審判の日、汝が身も魂も、地獄の火に燒かるゝなり。と敵がな、怒れる如き、犯し難き叫び聲が、彼の口より、頭上にはためく雷とぞ、響き渡るのであつた。

庸之助の體からは、今炎々たる猛火が、黒い

焰を揚げて、紅蓮大紅蓮とぞ凄じく燃え上り、足、腰の肉は早、白蠟の流るゝ如く熔け去つて了ひ、細い白骨のみが頼れもせずに立残つてゐる。斜めに、胸際へ十字架を描いて、又み合せた左右の手からも黒い黒い絲のやうな煙がゆら／＼と立昇つて、次第々々に燃え上るのである。苦しい、苦しい息、それも青い焰となつて、アツと呼ばんとすれども、舌は爛れて聲が立たなかつた。

(五十九)

生汗がびつしより、體中宛ら浴びたやう。邊は眞暗で物の文色も分かぬ、何だか斯う地の底の暗い窖へでも投げ込れたやうな心地の、庸之助は暫く正坐つて夢耶現耶を疑つてゐた。

薄い藁蒲團の、一種、微臭いやうな、垢臭いやうな忌な臭氣のするものが、むつと鼻頭に立込むやうで、氣持の悪い事と云つたらない、時雨はしとしとと降りしきり冷い冷い夜の空氣が襟元から水のやうに流れ込んで、姉と麻柱寒く、不思議を締めわた／＼と戰慄を禁じ得なかつた。

傍では、高く低く、黙の呻くやうな軀の聲がしきりと聞えてゐる。それが何だか、罪の子よ、惡魔の子よ、と罵つてゐるやうにも聞き做れる。庸之助は再び戰慄した。

暗中瞳を凝して、呢と見廻したが、何物も眼には入らなかつた。唯もう天地眞暗闇の、月も星も虧けて落ちて、太陽もその光を失うて了つた世界滅亡の目の、慘憺たる光景を想ひやらのみで、左様思ふとそれが又、あり／＼と幻に現れて来て、自分の體から炎々たる猛火が燃え出るやう。邊が一面、血の池になつて、人の子の、物恐しい叫び聲が宛ら頭上には、ためくが如く、氣も心も次第に遠く何處かへ引き去られて、そのまゝ、冥府へ導かれて行きさうなので、是ではならぬと自分で自分を斷ち立て、漸く心を収直して見たが、何だか眼の光に斯う白い物が動いてゐるやうな氣がしてならぬ、手を出して捉まうとすれば、陽炎を追ふやうに、何うしても、捉まらぬ。眼を瞑つても、矢つ張それが何處かで見えてゐる。

神經の所爲だと氣が附いて、やがて靜かに眼を開くと却て鮮明として、その白いのは體か白骨のやうだ。お澤の白骨……左様思ふと、幻影と知つてゐても、何うも幻影だとは思はれない。不思議な氣持がして、暫くそれを見詰めてゐると、次第々々に白い衣と化る、上には面が見える、色の青ざめた、如何にも牢々とした様子で、そして霜味ある眼光の、しきりに謝するが

如く我を見るのである。

ふと心附くと、その幻影は忽ち掻消えて、七つの星が現はれた。七つの金の燈臺が見える。唐之助は今、堅く眼を瞑つて思ふまじ考へまじとすれど、又してもお澤の顔、それも公判廷で、累りと自分に陳謝してゐたその時の姿があり／＼と描かれるのではないが。

自分は決してお澤から謝罪せらるべき謂は無い、否、自分こそ、彼の足下に身を投げ出して、詫びても／＼足りないのだ。彼の一生を誤らせたいのも、全く自分の仕した仕業で、これが爲めには如何なる酬が来ようとも、自分は甘んじてそれを受けねばならないのである。浅果敢な女心の、あらぬ事に神経を悩まして自分への申譯など、飛んだ事を仕出かしてくれば善いが、この頃毎晩毎夜、あの女の事を夢に見て、何うも胸騒がしてならない。何卒、心得違ひのないやうに、神様の御保護の御手に縋るより、外はないのである。

併し、神様はこのやうな不義不信な者の祈に果して耳を傾け給ふであらうか、神は愛の神、なれども、又義の神である。このやうな汚れた、腐れ切つた者にも猶愛の御手を差し給ふやうに思ふのは、あまり得手勝手ではなからうか、

あまり蔑に仕過ぎた話ではあるまいか——左様だ、自分は最早、世からも人からも、又神様からも見捨てられた罪の塊、悪魔の子——生恥曝してゐようより、寧ろ自殺して了はうかと、思ひ立つた事も屢で、今夜も又、頻りとそのやうな氣が潮してならぬのであるが、唯恐るゝ所は自殺が又一つの罪惡であるといふ事、その罪惡を敢てして、罪に罪を重ねるのは、愈々神様の怒に觸るゝのみか、生きてゐてさへ、この苦しい思をしてゐるに、まして死んで神様の審判の臺前に立つた時、何のやうな心地がするであらうか。又地獄の火に投げ込まれて、何のやうな呵責を受けねばなるまいか。その戦慄すべき恐ろしさが、實に自殺を思ひ止まらず鎖である。

その上又一つの心残りは、妻の惠美耶が少しも自分を怨む氣振はなく、未決監に居た時には、日々心盡しの差入物、今も度々、慰めの手紙を呉れて、「早く御無事に御出監を、朝夕神様に祈つてゐます」と飽くまで優しい、親切しい心掛けの、あの罪の無い、潔い人の祈には、定めて、神様も耳を傾け給ふであらうに、それを何も仇にして一層の嘆を掛けては、愈罪のやうでもあり、父母の事姉の事、そしてお巻の上もそ

れからそれへと思ひやらるゝのである。

(六十)

ぼたりぼたりと地を穿つ軒の雨垂の音、それが何だか怨鬼の囁くやうにも思ふされて薄ら淋しく、肌膚に迫る夜寒のいと／＼堪へ難くなつた。行儀善く揃へた膝節しきりに慄かれて、祈るが如く鎖に加へた兩手も風に戦ぐ蘆の葉のやう。唐之助は總身冷え渡つて、暫し氷の如くであつた。

このまゝ凍え死んで了ふのであらうか、それよ、自分は寧ろそれを望むのである。自殺といふ罪惡を重ねないで、この命を奪ひ去る事が出来るならば、自分は何よりも嬉しくそれを感じるのである。今の自分の身の上では又しても又しても、死より外に、この儼める心の安息の場所はないかとも思はれるのだが、唯一念、その死の門の後に、神様の審判の御座が聳え、地獄の火が炎々と燃えつゝあるかといふ事に思ひ至つてはそれが更に幾層の、恐怖の情を喚起して、このまゝ死んではならぬと、今更のやうに滅入り込んだ氣を引立てんと力めるのであつた。

凝つた血が溶けて流れてそれが再び脈管を通じ始めたのであらう、身内少しは温つて、稍人心地が附いた。眼の前では、暗中、花火の

閃めく如く速りと幻影が消えては現れ、現れ
ては消えてゐる。中にも、お澤が、法廷で自分
へ向つて詫びてゐた當時の有様が、何うも一番
あり／＼と目に附いて、何だか胸元へ針でも刺
さるゝやう、思へば思ふほど、堪らずなつて、
胸を掻き撚り度くもなる、あの女に何の罪が
あるか、あの温和しい、素直な、人の顔を見て
面差んで逃げ出しさうであつた清淨無垢の處
女を一朝墮落させて、今日のやうな境遇に陥
入れたのは抑も誰の罪であるかと、又しても、
自ら責め來つては満面から火の出る思ひ、頸へ
は鐐でも縛り附けられたやうに、自づと首俯れ
て了ふのであつた。

時折「神よ、我が罪を赦し給へ アーメン。」
とばかり得堪へぬやうに愁訴の聲を洩らすので
あるが調子は至つて低く、微かな、やがて、胸
を打つて、「ア、……と絶望の嘆息を發して、
「駄目だ／＼。」と呟いて、顔の手を膝頭に落し、
戰慄しながら暗中、邊を見廻すと、隅の方に、又
例の白いものが立つてゐるやうだ。

眼鏡を拭いて見返しても、何うも白い物がふ
ら／＼動いてゐるやうな氣がしてならぬ、若しや、
お澤の幽霊ではなからうかと、斯う思ふと、そ
れがいたく心がかかりで、何だか胸が壓迫けられ

るやうだ、成程幽霊といふやうなものは、迷信
であらう、人々は迷信と云つてゐる。自分も又
左様思つてゐたが、併し、人の靈魂はこの世限り
でなく、死の門を潜つて更に義人は永久の生命
を得べく天國へ昇り、不義者は永劫の罰を受く
べく冥府に降るものだと思つて疑はざる以上
は、その不滅不死の靈魂が、再びこの世へ驅は
れて來ないとは又斷言し難いではあるまいか。
蓋し人が死すれば肉體の滅ぶのは素より争は
れない事實であるが、その肉體の滅ぶといふの
が、畢竟唯、形體を變へるに過ぎないので、物質
の不滅則は科學上の原理である。物質已に不滅
である以上は、況してそのエネルギーたる靈魂
が痕跡もなく滅びて了ふといふやうな事は、何
うしても信用し得られぬではないか。科學上の
議論はさて置いて、人世はこの世限り、不義者も
榮え、義人も虐げらるゝ儘のものであるとした
ら、神様の正義しき審判は果して何處で行はれ
るのであるか、人間の意義といふものは、果し
て那邊に存するのであらうか。さらば、自分は
恐れながら神様の存在を疑はねばならぬ。
然り、今の自分の身の上では神様の存在し給
はぬ事を望むのである。寧ろ無神論の眞理であ
る事を欲するのである。乍併、この心中の恐

怖、良心の呵責、神様の御聲は慥かに聞えて
ゐるのだ。畏れ多い事を思ふも罪だと、今更に
胸の悸くのを覺えた。

神様に祈る事さへならず、人に訴ふる由もな
く、悦樂と平和との、全く缺けた胸の中に、何處
としてもなく、微かに通ふ慰藉の聲——それは、
惠美耶が朝夕、我が爲めに祈つてゐると書き送
つた彼の手紙の一句ではあるまいか。庸之助は
又しても、それを考へ出して、遙かに一點、希
望の光明を認め得しやうに、謂不知、感謝の
涙を浮べて、我がためにも、祈るものがある、我
がためにも祈るものがある。それに自分は入監
以來一度の手紙も遣らないのだ。否、書きかけ
ては、引き破り／＼したのであるが、これほど、
自分に同情してくれるものに、あまり踏み付け
た仕打と怒まれてはと、思ひ至つては矢も楯も
堪らない。夜の明けるのが非常に待遠しくなつ
た。白い影は、前に後に動いて次第々々に烟
の如く消えて了ふ。

(六十一)

「お巻や、もうそんなに泣くもんぢやアないよ、
私も折角快くなつたのが、汝がそんなに氣遣
してゐるのを見ると心配で／＼、又舊のやうに、
病氣になつて了ふからね。よ、よ、好い子だか

「お節は昨今、床上をしたばかりで、體がまだ十分舊のやうには調つてゐない。瘦せて寝て一層深く皺の寄つた顔を悉くに擧めて、孫が疊に擔げた新聞紙の上に突伏つて、果しもなく泣き歎き泣いてゐるのを見遣ながら、氣遣はしげに、宥めてゐるの。

「お袋、大概にしてお廢止よ、あんまり悲しんで汝、病氣になつちやアいけないぢやアないかい。」と果ては、小い肩へ兩手をかけて引起さうとする。

「だつても……母さんが死んぢやつたんだもの……私もう、母さんに逢はりやアしないんだもの……」涙聲で云つて、又一しきり悲しさの迫つたやうに、よゝとばかり聲を立て、泣く。

お節も密と眼を拭いて、

「そりやアね、……そりやア、悲しいのは尤も

だけども……もう、そんなに何時までも泣いてたつて死んだものが生返ちやア來ないんだからね、諦めなくちやア、汝……」

涙の下から鼻汁を吸上げながら、「牢の中……首を……首を吊つたりなんかしたんだもの……私の事なんか……母さんは少とも思つちやアゐないんだ……」言葉も途切れ／＼の後、

は嗚咽の音に埋れて了ふ。

「左様云ふ譯ぢやア決してないんだよ……阿母さんが、汝の事を思はないなんて、そんな譯があるもんかい。汝の事が氣に懸つてりやアこそ、自分の指を噛み切つて、その血で以て牢屋の壁へ遺書なんかしたんだらうぢやアないか。自分が悪いから計してくれい、あの子の事を頼むつてね、左様書いてあるんだらう、その新聞に……」

「……」

「汝の事を思はない段ぢやアないんさ。」

「それほど……それほど、私の事を思つてゝくれるもんなら、何んにも……何んにも、そんなに首なんか吊つて死ななくつても……」

「そりやアまア左様だけれど……そんな事を云つて怨んでた日にやア死んだ阿母さんが可哀さうぢやアないかい。」

「だつても……又お父さんも、母さんが……母さんが死んだなんて聞くと、自分で又、死んで了ふかも知れないんだもの……」小い鬚毛を戦かせつゝ、少し顔を上げて今、兩手で眼を磨つてゐるので。

お節も茲に思ひ至つては、暫し言句が塞がつて、不覺顔色を失つて了つた。成程、庸之助が

若しもこの事を耳にしたら、牢の中で又自殺するかも知れない、實に氣遣しさの限りである。

「左様思ふと、起つても坐ても居られない。又もや、心臓の鼓動が怪しく高まつて來るやうな氣持、片手で乳房を押へて、暫らく思案に沈んでゐたが、やがて少しは、自ら慰める處があるやうに、

「だけれど、お父さんからは今朝手紙が來たんぢやアないかい……。健康でゐるから安心してくれいつてね……」

「だつてお父さんも、未だなか／＼歸つて來るんぢやアないんだもの。」と心細さうに、獨語くので、

「……」

「手紙だつて、今朝來たが初度でだわ……お父さんも、私の事なんか思つちやアゐないんだ……」

二人ともやがて押黙まつて、唯かすかに咽び泣きの音を忍ぶのみである。

折ふし、段階子を昇る足音のして上つて來たのは修造、他出しての歸りと見えて、折目正しい羽織着である。

「代書人の處へ行つて聞いて見ると、死體は、引取人があれば下渡すといふ事だから、引取つ

ては何うだらうかの。」

「左様さねえ……」と、お節は、涙を押へながら此方を見上げた。

丁度懶げに、段階子踏む足音が聞えて、やがて上り口から顔を出したのは惠美耶、重たさうに、漸く體を運んで、究屈さを堪へて、下手に正坐する。腹部の膨脹の目立つやうで、血色は至つて勝れてゐない。

「あの……お澤さん……此方で葬るよろしいではありませんか。」と半ば涙含んだ、如何にも悲しうな調子である。

修造は、直と後を受繼いで、

「惠美耶も彼ア云つてるんだよ……葬式の費用なんか何うでもするから、引取つて貰ひたいつてね……」

お節の目は、ギロリと光つて、「汝、もう腹痛は好いんかい。今朝から痛むつて寝てゐたのが、もう快くなつたのかい……まア、そりやア好いね、私や又……餓鬼なんか産みやアしないかと思つて、心配でならなかつたんさ……」

(六十二)

「お節、汝何時もそんな邪憚な事はかり云つてゐるのだが、少しは後先も考へなくちやア、汝の病中も惠美耶が何んなに心配して親切に介抱

してくれたか、汝、それを知らないのかい。」と修造は窘める如き口調で、呢とお節を見た。

「親切に介抱つて……何んにも此方から頼んだ點ぢやアありませんし……介抱する位、當り前です。」

「そんな事を云つてちやア、汝、あまり酷からうぢやアないか。席の助はあの通だし、お柳も昔とは違つて十分に金廻も利かず、家内の食代から、汝の藥代まで一切皆惠美耶の手一つで、遺縁を附けてるやうな譯なぢやアないかい……一節、汝の重體であつた時は、彼女は夜ほの目も寝ず、三晩といふもの、枕元に附切つて、眞に座も居去らさずと、介抱してたんだよ。現在、實子のお柳が、あれほどの辛抱が、善く出来る事だつて、恥ぢ入つて、感心してた位なんだもの……それを汝は、何うして何日までも邪憚なんだらう。」と稍霽んだ調子。

惠美耶は謂知らず悲しくなつて、唯、俯向いて、何にも云ひ得なかつた。

「オヤ、まア、汝さんはそんなに惠美耶がお氣に召しましたのかね。では澤山と可愛がつてお遣が好いわ。今に玉蜀黍の毛を精附けたやうな、茶眼の孫が飛出して來うてえもんだから、お樂みさねえ……私やア、お澤さんが可哀さ

うでならぬ。席の助の事を思ひ詰めて……あの子が、牢獄に入れられたのを自分の所爲だ、如何にも濟まん／＼といふ一心から、首を吊つて死ぬなんて……指を喰切つて、遺書したなんて……思やア思ふほど、私やア腸がちぎれるやうで……」お節は齒を喰縛つてゐる。

暫し泣き止んでゐたお卷が又わッとはかり聲を上げて袂を顔に押當て、突伏さつて了ふ。

「お節、汝があんな事を云ふもんだからこの子が又氣遣つて泣くんぢやアないか……お卷や……お卷や……もう泣いちゃアいけぬ。阿母さんに逢はしてやるからね……阿母さんを此方へ引取る事にするんだからね……」と傍へ摺り寄つて、背中を撫でて、宥めてゐる。

「だつて……死んぢやつたんだもの……逢はしてやるたつて、死んぢやつたんだもの……」少し頭を上げて、臉を摩り／＼泣歎欲してゐるのだ。

「もう、泣いたつて……泣いたつて、死んぢやつたものが、生きて來るんぢやアないからね……汝が、あんまり愁嘆し過してると、阿母さんが又迷つて、行く處へ行かれないからね。」

「お卷……もう泣くんぢやアないよ……お祖母さんも、もう……泣きやアしないからね。」と襦

梓の袖口から出して、臉に押當てながら、コホンコホンと咳拂した。

「お巻さん……もう泣くありませんよ」と、惠美耶は微に聞取れぬばかりの低聲で云つて、忙しく眼を瞬いた。右の手はくの字形、胸腹へ押當て、吐く息もホツと苦しさう。

「汝はもう、階下へ行つて寝てゐるが好いよ、我慢して、體に障つちやアいけないからね。」と修造は惠美耶の氣色を覗うて、心配さうに眉を蹙めてゐるので、

「ハイ……難有う……」も、口の中。

「眞實にね……大切な孫が産れるんだから、随分と體をお厭ひが善いよ。」といち悪く云つて、そのまゝ俯向いて思案に餘つたやうに、ホツと太息を吐く。

「汝そんなんに……そんなんに面當がましく云はなくつても濟む事ぢやアないかい。まあ、その中、孫の顔を見たら、汝もまさか殺し度くは思ふまいよ。惠美耶もあまり心配過ぎないが好いよ。今にも産れさうな腹を抱へてゐて、いんな事を氣にかけてから、血の道を上げたりなんかしてくれちやア唐之助も死んで了ふだらうし、私だつて、もうこの世に生てる氣はしないんだからなう……」飽くまで恩愛の情の罩つた

言葉、惠美耶は我不知、頭垂れて、はら／＼と冷たきものの頬邊に流るゝかと覺ゆる間に、露がぱたり膝頭に落ちて、衣服の地に浸染み込むを認め、周章で、手巾で顔を蔽つた。

「へん孫なんて……毛唐の孫は持ちませんよ、私の孫はこればかり。」と、お節はお巻の細い首筋へ、その瘦腕を纏つた。

(六十三)

惠美耶は寢臺の床の上に仰向けに打倒れ、兩手を額に當て、微かに呻吟の聲を洩らしてゐたが、やがて腹の痛も少しは薄らいで来て、心に物思ふ餘裕が出来ると、何うもいろ／＼な事が考へ出されてならぬ——自分は出来るだけ、物事親切を盡して御氣に召すやう／＼と、眞に寝た間も心を碎いてゐるのに、阿母さまは一向打解けて下さらぬ。左程この身がお憎いのであるらうか、それとも自分に未だ足らはぬ處があるのか知ら、孫さへ満足に産み落したら、屹度彼も心が融解のからと、左様云つてお父さまは自分を慰めて、氣を引立てるやうにして下さるのだけれど、その孫が何うも、阿母さまの御氣には入らぬ様子、猫の眼とやら何とやら、産れぬ前から大層忌がつてお居なさるんだもの、この子が満足に産れた日には、自分は愈辛い日を見る、死ぬるほどの苦しい、切ない思をせねばならぬのであらう。寧ろ……寧ろ……母子共々に天國へ旅立つて了ひたい。その方がどれ程氣安いか知れぬので。

けれども故國に在す父上母上、さては同胞の者の數の程を思ひやると、なか／＼容易に死なな／＼處ではない。それさへあるにこの頃は自分を實の娘のやうに可愛がつて、依頼に思つて、蔭となり、日向となり、庇つてゐて下さる今の父上に、悲しい目を見せてならうか、お巻の行末も心に懸るし又掲て、獄屋の中に、慰めもなく憂き月日を送つてゐらるゝ我が夫の上を思へば、早く赤兒の顔を見せて、喜んで貰ひ度さが胸一ぱい。自分の生命は二つあつても足りる事ではないに、死んではならぬ／＼と、我と我身を勵まし立てて見てもさて何だか初産の心細く、そのまゝ息を引取つて了ふのではあるまいかと、つい氣が減入つてならぬ。

こんな事を思つてゐては、誰が眞にならうも知れず、心丈夫にと、氣を取直して、掛蒲團の中へ片手を遣れば、ガサリと鳴もの、引き出したを見れば夫が監獄から送つて寄越した、長々と註びの文句懺悔の文句で満された手紙なのである。惠美耶はそれを何んだか、我夫に逢うた

やうにでも思ひ做して、懐かしく肌身を離し難い風情。又しても擧げて見て、繰返すのであった。

昨夜の夢に、世界滅亡の日の大審判を見たといふ事、自分は何うしても天火に焼かるべき罪人だといふ事、両親の事、姉の事、一家の事、さてはお卷の身の上をよろしく頼むと、繰り返し繰り返し丁寧に書き附けて、やがて、自分が満期出獄の日には、御身の足下に平伏して靴の紐を解かんといふ。その一句に讀み至つては、恵美耶は又してもくわりなく涙に咽んで、手紙を接吻するやうに、顔の上に押當てゝ了ふのである。

いよいよぬれまさら手紙の、更に其末段に至つてお澤が悔改めて天國に入るやう、何卒御身の熱き祈を願ふといふ文句、これが父、恵美耶の腸を斷つやうに、悲しく憐れつぽく感ぜしめるのである。指を喰ひ切つて、血汐で遺書して、自分の罪を悔ながら縊れ死んだ人の上は云はでもの事、夢更かくとも知らないで、猶その人の靈の救を祈つてゐる夫の心事は又思ひやるさへ涙の種である、この世は何うしてかくまでも悲しく出来てゐるのであらう、神様は何故に、人の子を泣かすやうに天地をお造りなさつたの

であらうと、ふと思ひ至つては、何だか空恐ろしくも感じた。

突如に、室の戸が明いた。振返つて見ると、修造が、愁しげな顔色で、

「気分は何うだい。何事も心配しないが好いよ……あの、お澤の亡體は今引取つて來たのさ。汝のお蔭で、この家から葬式を出して貰つて、彼女も定めて満足であらうよ。」

(六十四)

死の前には恩も仇もなく、罪も咎も消えて了ふのである。白木の棺桶の中に眠れるが如きお澤の死相、頬は殺け、眼は窪み、永の牢舎住居の寒々しく、骨と皮ばかりになつてはゐるが、しかも、その額際の何處かに斯う、心安げな、從容とした様子がほの見えてゐる。紫がかつた脣、それが今にも動き出して何か語りもしさうである。昔は定めて、花の顔匂やかに、兩の頬邊には若い血汐が騒いだでもあらう。兩の頬は星と輝いたでもあらう。妖刀を把つて男一疋刺殺した其手頸に、今はしをらしくも念珠を懸けて、西方淨土を欣求するかの如く。生恥曝してゐた柿色の衣は娑婆世界に脱捨て、一點の斑點も汚もなき白衣と着替へられ、そのまゝ蓮の臺の人ともなりさう。色と呼び戀

と叫び、罪と罵り、惡と譏る、觀じ来れば夢の中の夢、幻の中の幻ではあるまいか。人間一度死」といふ問題に思ひ至れば、茫然として迷はざるもの果して幾人であるか。

「お澤、何卒、後に心残さぬやう、成佛しておくれ……お澤……成佛しておくれよ。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。」とお節は涙ながら、水晶の念珠を爪繰つて、口の中で念佛を繰返してゐるので。

「母さん……酷……酷いわ……し……酷いわ……私の事なんか……何うでも……何うでも善いつてね。」歎歎げく咽び泣するお卷を、お柳は背後から勞はり慰めて、

「もう、汝、そんなに泣くもんぢやアないのよ。阿母さんの死顔に涙なんか掛けると、靈魂が浮ばれないつて云ふんだからね。もう、善い子だから泣くのはお慶止よ。ね……」
「だつて……母さん……私を一人法師にしちやつて……」

「一人法師つて云ふ事はないわさ。お父さんもその内、歸つてお來なさるんだし、私等も居るんだからね、そんな駄々を捏ねるもんぢやアないのよ……阿母さんもね、お父さんの居室へ斯う引取られてお來たんだから、まア不幸の中

の幸といふものさ。左様思つて諦めなかつちやアね。」と濕めつた調子。

「……」

「よう、お婆さん、もう泣くんぢやアないよ。

……オヤ、涙が落ちて、線香の火が消えて了つたぢやアないかね。」とお柳は白標紋付の、縮緬の二重襦袢次もなく紅絹の下着の、裾をひらりと捌いて、今經机の前に正坐まり、燈明の蠟燭の火で新に線香を燵して立てた。香烟縷々と絲の如く立昇つて、橘の香の、それも何となう、胸に迫るやうである。

どきどきと、足音がした。體て入つて來たのは惠美耶であつたので。

「眞に、お前殿止ば好いのに……尋常の體とは違つて、こんな時にやア義理も絲瓜も入用つたもんぢやアないから……」と、宥めるやうなのは、修造の聲。

「いけませんねえ……、もう今にもお産れなさうといふ體で。」と小叱繰つてゐるのは、今しが備つて來た産婆なのである。

惠美耶は強ひて返事もしないで、無理遣と我を張つて、蒼ざめた顔色の、いかにも術なささうな吐息。兩方から扶けられて、漸く此の座へ入つて來たので。

「まあ……惠美耶さん……そんな體で出て來なくつても、静と寝んでお居て好い事にねえ。」と、お柳は、振返つて見て、いとも氣の毒さう。

「否……一寸……お告別して……お祈し度うあります……」動もすれば、倒れさうな體を右

左から支へられて、お柳には、背後から抱き上げらるゝやうにして、棺桶の中を覗き込んだ。三寸息絶えて、今は早、苦も憫もなく眠つて

ゐるやうな死顔を見て、謂知らず、惠美耶ははらはらと涙を流した。

「汝が……汝が見に來たからつて、お澤は少と喜びやアしないよ。」と、お節は泣目立つて、憎さげに云ふ。

「阿母さん……そんな事を仰るもんぢやアありません、あんまりですよ。」

「エ……お柳まで、この異人最厚になつたんかい……ア、お澤が一番可哀さうだ喲。」とお卷の頭を撫でると、下からはいよ、獻敬げて、

果はわつとばかり泣き入つてしまふ。

「オヤツ……」と産婆は憐憫の聲を發した。今まで、默齋する如く、手を額に當てゝゐた惠美耶がこの時、全く死人のやうな顔色をして、横腹を緊しく押へて、物も得云はず、後さまに倒れかゝつたので。

(六十五)

柔かに寢臺の上に昇き込んで、水を吹きかけ、名を呼び立てゝの介抱の後、惠美耶は漸くに息吹返した。

「何うでござんす、御氣分を確かにお持ちなさ

らなくちやアいけませんよ。」と、産婆が、顔を差覗いて耳邊へ口を寄せたので、

「お腹が何うも……」と、絲のやうな、か細い聲で云つた限り、額際に小皺を刻んで、微かに、

「ウン……ウン……」と呻き出した。兩の眼を睜つて、堅く口を結んで、切なげに折々、それを歪めるのである。

枕元にはお柳が左も氣遣はしげに、悄然と椅子へ倚掛つて控へてゐたが、未だ嘗て産といふものをした覚えのない身は、何んだか、恐ろしいやうな、氣懸りなやうな、手持無沙汰で、

呻吟の聲が高まるにつけ只管、産婦の顔色を見守つては、怯々してゐるのみで。

呻吟の聲は、漸く一刻一刻と太くなつて、長く引いて、傍の見る目も苦しさうで堪らぬのである。お柳は愈ゝ不安の面地して、尻も椅子に落付かぬ風情。産婆の方へ向いて細聲になり、

「何うです、大丈夫でございませうか。」産婆は唯頷いて、産婦の兩腕を確と握つて抱

き上げるやうな氣味合で、方を附けながら、
「あの、奥さん……最少し枕を高う。」と、至つて低い調子。

「ハイ……とはかり、お柳は立寄つて、蒲團を巻いて高枕を拵へ、靜にそれを宛がうてやる。

ウーン……ウーン……と産婆は力味始めた。

ウーン……ウーン……と産婦の、病めるやうな聲は微かに、如何にも切なさうで、お柳は閉苦しくてならぬ。嘸辛からう、嘸術ない事であらうと思ふと、つくく、最惜うて堪らない。自分が斯かる目に逢つて居るのなら何うであらうと、さまざまに思ひ廻らしても見たが、ふとこの苦しきは、一時の事である、この一時の苦しい目を見得ない爲めに、自分は始終、心の中で苦しい思ひをして夫には疎まれる、奉公人には馬鹿にされる、何ぼう口惜しうてならぬか知れぬと、密かに自分の上を憐れむのであつた。

呻吟の聲は愈切に、愈迫つて、惠美耶は今必死と産婆の肩に絡み付くやうに、身を悶え苦しんでゐる。ウーン、ウーンと産婆は一生懸命に勵を附ける。お柳はいと愁ふる如く、暫开を見遣つてゐたが、やがては得堪へずなつて、さし俯向いて、所作なささうに、襦袢を揃へ、赤ん兒に着せるべき、桃色の小い衣服の、皺を

伸しなどしてゐた。産湯は、傍の小盥に滿々と、蒸氣をしきりに上げてゐるので。

産婦の額に、今ぼつと油の珠の如き生汗が浮いて、産婆は兩手にしと湯のやうな熱い汗を握つた。潮時であらう、呻吟の聲ハタと止むかと思ふ刹那、「オギア」と一聲、帛を突裂くやうな初聲！

産婆は手早く、産婦の腹帯を引締めて、襦袢切でそこら取形附け、泣きしきる初兒を抱き上げた、お柳は狂するが如く、傍へ馳寄つて、

「シッ……」と制せられた。
産毛の少し縮れた、ばつちりと黒眼勝の、宛らむき玉子へ紅をさしたやうな、ふくやかな、愛くるしい男の子が、湯盥の中にさざ波を立てて、小い拳を花びらのやうな唇へ押當て、無心に泣いてゐるのを見て、お柳は直ぐにも抱き上げて喰ひ付いてやりたいやう。

産婆は寐ながらその方を一目見遣つて、神に感謝の祈を捧げるのか、片手を眼の上に加へてゐた。

何時しか、斯くと報知せて行つたお柳の、背後から修造急ぎ足の、氣もそゝるに、

「どれく、見せてくれい。」と差し寄つて、盥

の中を覗いて見て莞爾。

「産れたく、孫が生れた。婆さん……婆さん……産れたく。」ほくく雀躍しつゝ、産婆が、初兒を取上げて大巾の西洋手拭で拭つて件、桃色の衣服を着せ掛、襦袢を纏ふ間が待遠しく、密と、抱き取るやうに抱き上げた。

「お父さん、私に……」とお柳がせがむ。

「まア、汝は小兒らしい事を云ふな。」と云ひ捨て、室の戸明くれば、周章で、避けるやうにする、お節の鼻先へ。

「さア、見ろ、これでも憎いか……これでも汝の孫ではないか。」

さすがにお節は、嘲むやうな眼附で、密とそれを見やつた。人形のやうな愛くるしい赤兒が、可愛い口元を微動めかして唯無心に泣いてゐる。これが孫かと思ふと、お節は俄かに心が動いて、わりなく抱き附きもしたいやう、暫し恍乎となつた。

「あら可愛いものねえ、一寸私に抱かせてよ……ね、祖父さん。」と、後に立つてゐたお巻が、涙を拭きながらせがみ出した。

(六十六)

丁度櫻の散る時分、會堂の櫓内の庭の木々も生々と、梢に緑の芽を吹いて、風も薫を送つて来る。この頃は惠美耶一家、睦しく、

折々は調子高い、笑ひ聲も聞えてゐる。一つには、庸之助が出獄の日も漸く近づいて來たのもあるし、又一つは孫の惠太郎が日に増大くなつて、智慧ついで、愛らしさが勝つて來たからであらう、お節も漸く打解けて、昨今は惠美耶惠美耶と無くてならぬもののやうに懐かしんでゐる。お巻も又、母さん母さんと云つて、慕ひ出したので。

修造が時折折串談口に、「汝は何故惠美耶最辰になつたのかい。」と問かけると、お節は生眞面目、「でも孫を産んでくれたんですもの。」と、何時もくくの紋切形であつた。

今日は日曜の午後、惠美耶は、早教會の方の勤務も了つたので、搖籃に眠つてゐた惠太郎を抱上げて、今門口を出掛けようとした。

「惠美耶や、汝、何處へ行くのかい。」と、丁度、木小屋から出て來た母のお節は、周章しう聲を懸けた。如何にも愛の罩つた調子。

「ハイ……」と振返つて、「アラ、母さん、おいででありましたの、駄つて失禮ね、あの、昨日の處へ行かうと思ひまして。」

「庸之助の處へかい……そんなら宜しいけども私やア、今日未だ一度もその子を抱かないから何んなら、守役をせうかと思つて喃。」

「左様でありますか……では、お抱きなさつて。」と莞爾笑つて二足三足戻りかける。

「否……否……それぢやアよろしいよ、まア早く行つて、早く歸つて來ておくれ……」庸も、見度がつてゐるやうから、喃」と、水口の、柱に凭れかゝる。

「左様でありますか……では、私歸りましてからお抱きなされませ。」

「ア、左様しようく、早く行つてお來。」

惠太郎は眼を醒してむづかり出す。

「ぢやア、御免下さいまし。」と、子を賺しながら心残りの體で顧りみがちに出行く。

「可愛い奴だ……あの嫁も、眞に優しい。」と、呟きながら、そこへ下駄を脱いで奥の方へ入つて行く。

惠美耶は、愛らしい赤兒を緊と懷に掻き抱いて、その赤みがかった、色の底白い顔をつくづく見守つて、紅の蕾のやうな小さい唇へ「噫い」接吻をしながら、道々考へ出さるゝのは、自分はいふまでもなく、これまで母を怨めしいやうに思ひはしなかつたか、母な人を邪慥だと考へはしなかつたかといふ事である……若し、夢にでもそんな事があつたすれば、實に恥かしい、穴へも入りたいと、背は早汗に浸染むのであつた。

以前の辛かつた事、悲しかつた事それが、今は皆一場の夢と消え失せて了つて、唯もう楽しい嬉しい希望に輝いた世界となつたかのやう。これも神様の恵みである、と思ふと、只管に感謝の涙を流す外はないので。

唯、そればかりではない。人は神様の子であつて愛の爲めに遣されたのだといふ事も、今更思ひ當るではあるまいか。父なる人も、自分は當初愛のない人のやうに心得てゐた。姉も又、そのやうな方かと思つた。勿體なけれど、阿母さまが、あのやうな優しい、實のあるお人であらうとは、夢にも思染めなかつた。自分の思慮の足らぬのを、恥づべきは素よりであるが、さて世間には鬼はないものだ、と思ふと、非常にこの世界が尊く、美しいやうだ。

「惠美耶は、庸之助が此の頃、他の囚徒の中に立交つて、月山の邊で土運をしてゐるその處へ、今、愛兒を見せに行かうとしてゐるのである。生垣の、衡門の、屋敷町を、思案に沈みながら辿つて行くと、丁度傍へ、とある堀際の晩櫻が折からの風にこぼれてはら／＼と、落花雪の如く飛んで舞うて髪に、肩に、衣裳に、さては小さい女靴の痕へふりかゝる。その白い花びらの一つが、赤兒の、唇頭へ落ち散つた。惠美耶は直とその上へ

接吻する。風が一しきり、落花が又はらりと、宛ら白い蝴蝶の亂れ飛ぶやうである。

六十七

戸山の原の、麥畑を埋め立て、地均をして、石垣を築上げて、其處に、看守學校を建てようといふので、この頃、日々毎日、何十人の囚徒が、朝から晩まで牛馬の如く追つ立てられて、切々と立働いてゐる。箆で土を持運ぶもの、鍬で石を掘起すもの、砂利積んだ荷車を押して行くのもある。凸凹の處を搔均らしてゐるのもある。柿色の衣の、右に左に閃めき合ひて、鎖の音の淋びしげに、而も忙がしさうに鳴るのであつた。彼處此處、看守の帶剣は、麗かな春の日光を浴びて、銀の如く輝き、押丁の足元は、休む隙もなさうに、右往左往である。

今日も亦、昨日の西洋婦人が、赤兒を抱いて、睫毛の長い、紺瑠璃の球の、露を浴びたやうな眼光でしきりと、大勢の囚徒の方を見遣ながら、そこら遶りを立徜徉つてゐるので、看守押丁、さては囚徒の中にも、怪訝に思ふものがあつた。

一四、と、惠美耶は、確かにそれを記憶してゐた。今、自分の前を、棒杭の差荷ひで土、山盛りにした箆を運んで行くのは、一一五と二三といふ番號を各々柿色の襟の、白う抜いた

所に記してゐるが、竹笠の下から、野獸のやうな目を怪しく光らせて見るから兇惡な相。わざと、すれ違ふやうにして通つたのである。番號が一つ違、何うでもこの近處で働らいてゐるのであらうと、不意、其處の繩張の方へ近寄つて行く、

「何うしたんです、あまり此方へ寄つて来ては好けないです。」と、其所の棒杭の立つてある傍につく然と佇んでゐたちよび袴の、菊石面の看守が、ぐつと反り身になつて、注意を與へた。

「御免下さりませ。」と少し顔を赤らめて丁寧に會釋しながら、惠美耶は四五歩退つて、猶ほもしきりと眼を配つてゐる。赤兒が又むづかり出すので、襟の扣釦を外づして、恥かしさうに後ろ向いて、ひたと抱き寄せ、玉の乳房をその小さい唇に咄ませつゝ、笑に熔けるやうな眸で、ぢつと、愛くるしい顔を見守つてゐた。

鎖の音が近く聞えたので、惠美耶は、ハッと思つて顔を擡げた。竹笠の二人念珠繫ぎ、砂利の箆を差荷ひの、前なるは春低で、後のは春高、若しや彼ではと、ついそんな氣がしたものの、最早、彼方の群の中へ紛れ込んで後姿も分らずなつた。本意なさうに、暫し茫然と佇んで了ふ。

やがて漸く、氣を勵まして、横手の方へ廻つて見たり、又戻つて見たり、果りとその邊を徜徉つてゐたが、一四、の番號は、一寸目に附かなかつた。夫の方からは未だ氣が附かないのであらうか。自分の此處邊にゐるのがお目に入らない筈はないのだが、又昨日のやうに自身で恥ぢて、お顔を見せて下さらないのか知ら。さりとてあまりお情ない御心——それとも又、この中にはお居なさらないのか知ら。

惠美耶は稍暫し、根氣よく其處邊を立廻つてゐたが、やがて少し疲勞を覺えたので傍の一寸小高い、茅萱や、雜草の生茂つた丘の中腹へ上つて、一の平い石に腰を掛け、氣拔したやうに茫然と、囚徒の立廻らるのを見守つてゐる。

「何を愚圖々々してゐるんだ」と不意に叱る聲。驚いて、其處邊を見廻すと、横手の、土を掘り廻して、赤禿になつてゐる。つい、四五間下の處で、例の念珠繫ぎの竹笠の囚徒が、箆の中へ、土を掻き込んでゐた。一人の如何にも、疲れたやうな、柔弱きうなのを看守が叱つてゐるので。

「横着者めが、そんな眞似して怠けようとしたつて駄目だよ。」びしやりと横面を打つた。惠美耶の瞳は、今火の如く輝いて、一さん

に丘を駆け下り、いそ／＼小足早く、その囚徒の方へ近寄つて行く。

「馬鹿者め……」と又一打、囚徒は黙つて面を上げた。その眼と、恵美耶の眼とヒタと合ふ。恵美耶は、中を隔てた雨の水溜をひらりと飛んだ。白衣の女が、赤兒を抱いた姿。ちらと水の底に落ちて、雲がゆら／＼、その上を掠めて去つた。

(六十八)

「お結構でございますよ、鳩宮さん。今日は無事に御歸宅なさるのですし、坊ちゃんも愈愛らしくお成遊ばすんだし、第一、恵美耶さんの信仰がお堅くつて、お心掛の好い方に入つしやりますから、御家内が誠に、お睦じいといふ事を、田島の奥さんからも承はりました。眞に何よりお結構でございますよ。」と、中岡蘇平の妻のお寅、今日は庸之助の出獄を出迎ひ旁々久しぶりの、御無音勤に來たのであつた。お絹布ぐるみの、琥珀の帯なんか締め込んで、誠に立派な奥様姿。唯顔附は何んとなう淋びしさうで、眼中に、沈んだ色が見えてゐる。

「何うしまして、結構どころの話ぢやありません。家内はまア、睦じいかも知れませんがこんなに暖くなつても、未だ襦袢袴を引張つてるやうな爲體で、お恥しい事でございます

ホ、。と、お節は強ひて笑顔を作る。

「御家内の睦じいのが、何より一番結構でございますよ……私なども、今更悔んでゐますの

で。」
「貴方が、そんな悔むなんて、何を仰やるのです？」申談云つちやいけませんよ。」

「否、眞に、申談ぢやありません、幾何貧乏したからつて、昔の方が何んなに好かつたか知れ

ませんのですよ。夫の事を彼は云ふぢやありませんが、この節はもう無茶苦茶にお金を費

ひましてね、始終家を明通しなんですもの、矢張神様の罰が當つたのでございませう……私の身にね。」と云つて、萎けて、早眼を露ませてゐる。

「そんなに……あの、中岡さんが、そんなにお成りなのですか、何うも殿方といふものはねえ……併し、その中、屹度お目が醒めますよ、御心配なすぢやアいけません。」

「眼が醒めますか何うだか……」云つて、後は半ば、喉へ押詰まつたやう、苦しうに咳拂をする。

折節、段階子の人氣勢、さや／＼と衣ずれの音がして、
「中岡の奥さん……」と快活げな、その底には

少し露味を持つた聲で呼びかけたのはお柳。
「まアこの子を見てやつて下さい……私が設けましたのですよ、ホ、。、。」と淋しげに笑みながら、恵太郎を抱いて、上つて來たので。

「オヤまア、好いお子さんです事ねえ、可愛いらしい……」と、指頭で一寸頬邊を突いて、そのばつちりした柔和な眼で、じろ／＼見廻すのを、只管笑顔で迎へてゐる。

「眞實にお柳も、こんなのを設けりやア好い事ですのにねえ。」とお節は今更愚癡つぽく云ふ。

「だつて、これ丈だけは、設けようつたて出來るもんぢやありませんわねえ。」

「何んの……この子を私の子にしつちまへば、文句はないぢやありませんか。恵や、汝の子になつておくれよ……ね、ね、私の子になるんだわねえ。」云つて、一ツ、頬邊に接吻して、さも憎い程可愛いやうに、頬指りしつゝ、何時までも離れ難い風情。恵太郎がむづかり出したので、周章で、

「オ、。、。」と賺してゐる。
「その子を汝に持つて行かれぢやア大變だよ。私の可愛い孫だものホ、。」とお節は笑顔。

「だつて、こんな孫は孫ぢやアないんだつて、未だ産れもせぬ前から、阿母さんは何時も口癖のやうに云つておいでなすつたんぢやアありま

せんかね、私が貰ひますのよ。そして立派に育てますのよ。」お節は唯苦笑。お柳猶も唾を呑み込みながら、「子でも育て、それを樂みにしてゐなくっちゃア、とてもこの世に生きてる甲斐はありませんわねえ。奥さん、私等はやめ同様なんですものねえ。」

「眞にねえ……何か一つ樂みがなくちゃア、とても遣り切れませんわねえ。それでもまあ、貴方なんかは斯うして、御父母方揃つておいでなさるんですから、此家様へお越になりやア、其處に又お樂みがあらうといふもんですが、私なんかと來ちやア東の死んだのと一緒で、から、行く處はなし、眞に詰まりませんわ。」

「だつて、貴方のお家なんかは、未だ好い部ですよ。私の處には、妾なんかを引張込んであつて、家へ歸つたつて、何方が眞の奥様だか分らないんですもの、尿面白くもないから、つい一寸々々親の家へ出掛けて來たくなりますわ。」

「男といふものは、何うして彼ア氣強いのでせうねえ。」とホロリ。

「だからもう、私は一生懸命にこの子を可愛がります。」と、又接吻した。

お節は唯、斯う胸の上へ、手を十文字に押當てゐた。

段階の上り口から、お卷が小さい面を出して、「あの、植木先生が入つたから、お祖母さんも伯母さんも一寸降りて來て下さいつて、今母さんが左様云つてよ。」

「エ……」とお寅は、顔色を變へて、恥らふやうに、身の周囲を見返つた。

(六十九)

市ヶ谷監獄の厳めしき門口を丁度今、潛つて出たのは、五分刻の、頭髮の毛の延びた、眼窩の陥込んだ、色の青白い、見るから牢籠のしてひよろひよろしたやうな男で、古ぼけた洋服を着、革の鯨子張つた古靴の、足も痛々しげに、呪と伏目の、折々は竊むやうに左右を見廻しながら、薄氷でも踏んでる如く、徐々と、十歩ばかり歩んで來た時、向の差入物屋の月口から飛んで出て、つかつかと脚寄つて、急速に、その手を握つたものがある。男は驚いて、はつちり眸を睜つて、「オ……」と云つたきり、茫然と囁の如く佇んで了ふ。

「良君……御無事で……」頭へ聲の、手先もわなわな慄きつゝ、ホロリと一雫こぼるゝ涙を拭くもあへず、嬉しさと悲しさと、一時に込み上げたやうな顔色の、之も二の句を續き得ないのは恵美耶であつた。懷には、愛らしいのを

抱いてゐるので。

「何とも……何とも申譯が……」庸之助は、如何にも、面目なさうに、仰き見る事を得ないのである。

「良君、無事かつたありませんわね……まあ御無事で、何より結構あります……この子……この子御覽下さい。」と涙含んだ聲で乳房にうとく眠りかゝつてゐるのを、抱起すやうにして見せつける。

「オ……」と庸之助も霽んだ調子。片手で、赤兒の、二重に括れた頸を上げて左も懷しげに見入つてゐる。兒は未だ眠むさうに、小さい手でいきりやと臉邊を摩つて今に泣出しもしさう。

「泣くありませんよ、お父さんあります……お父さんありますよ。」と揺り起さうとしてゐる。

「まあ起きなくつても善いよ。」

「鳩宮君」と、不意に呼び懸けられて、吃驚して振向くと、白の、ナポレオン帽の縁を押へて會釋してゐる、セルの背廣服扮装の老人の姿、一目見るより、周章てたやうに、頭を下げながら、

「植……植木監督ですか……誠に……」

「無事に御出獄なさつて、何より嬉しいですよ。と感謝に握手の禮を施されて、唯恐れ入つて、うろ／＼する。

「庸さん、御無事で。」

「鳩宮さん……御無事で。」

ついでさまに、後、前から挨拶されて、庸之助は愈々狼狽へる。姉のお柳は、眼に手巾を當てる。中岡の夫人は、如何にも氣の毒さうに、伏目である。會釋しつゝ、振向くと、何にも云はず、取絶つてゐたのはお巻であつた。

父の手に、軽く頭を撫でられていくと泣出した。

「見ともないよ……往來で泣いてちやア……」とお柳は、自分の眼邊を拭きながら、お巻を着めたり、贈したり。

「車夫さん。」と植木監督が呼んだ。

聲に應じて、差入物屋の前に五六輛、梶棒を竝べて、蹴込へ毛布腰卷の袴を据ゑて休んでゐたのが、皆一齊に立上る。

「鳩宮君、俥に乗り給へ。」

「それには及びません。」と恐縮の體。

「その爲めに儲つて來てあるんだからね、庸さん、お乗よ。」と姉に言葉を添へられて、お巻にせがまれて、惠美耶に促されて、やがて漸く前から二番目の俥に乗つた。お巻は懷かしげに早速前膝へ凭れかゝつたので。

前なる車夫と、後なる車夫と、相呼び、相應

じて、今五輛の俥は轆々たる車輪の音威勢よく風を截つて、砂塵を揚げつゝ、其處の街角を鐵の手に折れて曲つて、監獄の高い築土手に沿うて西に走つた。庸之助はそゝろ振返つて、昨日までの、否一瞬時前の苦痛を思ひ出しては、疎とするのである。

やがて幾曲り、幾うねり、だら／＼とした坂道を下つて、再び焼餅坂を上らうとした時、タンバリンの音、太鼓の音、合奏の調子の騒々しく妙な節で、高きやかに唄つて來る聲が聞えるので、庸之助は何事かと思つて、そゝろに注意してゐると、坂の上から次第に降りて來る一行、皆一様に、赤い筋つ入つた帽子を冠つて、赤い織衣を着込んで、揃ひの黒の羽織は、彼の救世軍であつた。此處にも、主の福音の戰士が勇しく進軍しつゝあるかと思ふと、我不知、腋の下に冷汗が出て、何となう尊敬の念慮も起る。その中、ピタと行違ふやうに相迫まつた。見れば、その先頭に立つて、タンバリンを鳴らしてゐる二人の少年、何もう誰やらに似てゐるやう。それよ、約翰のチビ六馬太の上州のやうだ。御目かと思つて、再び見返さうとした時は早、向には氣附かなかつたのであらうか、行過ぎて了つた。「アラ、チビ六に上州だわ!」とお巻は振

返つて、父の顔を見る。後の方で、「オヤ……」と云つたのは、惠美耶の聲。

(六十)

時計は今正に一時を打つた。日白の鐘の音は陰に微かに響いて來る。何うしても寢就かれないのである。自分が又、寢就かないのであると、惠美耶が闇雲に心配して、眼を塞がないのだから、今まで眠つた風を粧つてゐたのであるが、心底何うしても眠られない、父の悦んだ顔、母の嬉し泣に泣いた顔、さては姉の笑んだ顔、中岡夫人が氣の毒さうに、見舞を言つてくれた、その時の様子などが、あり／＼と眼の先にちらつてゐて、植木監督が、最も嚴肅なる態度で自分の爲めに、罪の赦免を神に願ひ、今後は眞に生れ變つた人間となつて、福音の宣傳に一生を委ねるやう、熱誠を單めて祈つてくれた、その姿、その言葉、一々はつきりと、自分の心に印象されてゐるやう、何んとなう恐ろしいやうな、又恥かしいやうな氣持がしてならぬ。

傍の寢臺には、惠美耶が子を抱いてすやくと、絲のやうな纖細い躰の聲を立てゝ安らかに眠つてゐる。自分の直ぐ側には、お巻が微かな寢息を枕に通はせつゝ、左も安心したやうな面色で、夢路に入つてゐる。これも最惜しい、彼も

可愛くてならぬ。が併し、惠美耶に對しては、いと可愛いと思ふさへ、勿體なく、何だか罪のやうな心地がする。今宵は久しぶりに、夫婦が一堂の中へ寢床を列べるのだもの、山々積る話もしたく、陸言も交して見たさは胸一ぱい。惠美耶からも、それを話し掛けて、腹藏無く赤心を打明して来るのであるに、面と向つては、自分は何うも氣が咎めて、思ふ事口へも出されず、唯々、自分の罪を許せくとはかり。果ては、妻の心を良君はまだお疑ひなすつてかとまで怨ませて、彼女を泣かすやうな始末に終つたのではないか。嘸ぞ無情漢と思つてもゐよう、あまり隔がましいと考へるでもあらう、けれど、自分は決して無情でもない、又隔てるでもない。唯此の汚れた者が、亭主顔してゐるのも、神様から叱られるやうな氣がして、言葉を掛けるのさへ、何だか空恐ろしいやうに感じられてならないので。

左なきだに、始めて聞き知つたお澤が横死の一條、舌を咬み切つて、首を吊つて、無惨の最期を遂げたといふ、その事を思ひ遣ると、自分はいつ、大罪を重ねたのではないか、實に可哀さうでならぬ、不憫で堪らぬ。左ほどこの身の事を思つてゐてくれたものを唯一人で先立た

せて、自分は阿容々々、この世に生延びてゐられた義理か。地獄も苛責も、死後の譴も、斯うなつては、もう構つてはゐられない。第一惠美耶へ對し、又植木監督へ對しても、自分は元々生面向けられた筈ではないに、教會の人々へも今將た何んと挨拶の言葉が出ようか。思へば獄中で何故自殺を遂げなかつたのであらう。今更後悔の脚を噛むばかりであるが、兎にも角にもこの現世から唯もう逃れて了ひたい。後は何となれ構つてはゐられないのだ。

斯く思ひ詰めては、何うしても生存へて居られぬ義理と、心に領き、少し身を起して、左右を振返れば、お卷の寢顔、惠美耶母子の寢像、今宵は安心して何にも知らずや、と眠つたのではないか。眼が醒めて見ると父の姿はなく又、夫の影が見えなくなつたら、何んなに悲むであらう。悔みであらう。父母にも今まで大概に苦勞心配をかけた上で、猶前足らず、愁嘆の淵へ突き沈めようとする。自分は鬼か、惡魔か、ア、寧ろその世へ生れて來なかつたら幸であつた。我不知、お卷の頬邊へ接吻すると、妙に、少し顔を歪めた。振返つて、こたは惠太郎の、柔かきやうな頬邊へ口を寄せようとしたが、餘念なく眠つてゐる惠美耶の手頭に觸りさうなので、

暫らく猶豫うてゐる。其中にも、心は鈍つて、氣は減入つて、さすがに又類然と崩るゝやうに枕に就いたが、併し、何う考へても、思ひ直して見ても生きてゐられた義理ではない。それよ、自分が寢屋の中で、一度ならず二度ならず自殺を思ひ留つたのも、一つは罪の上に罪を重ねんよりは、寧ろその罪滅しに主の爲め道の爲め、浮世の戦場で男らしく戦死するに若かずと覺悟を極めての上からでもあるに、さて、部屋を出て、一步、婆婆の土を踏んで見ると、自分の周圍には、悉く、自分の罪惡を照らす淨玻璃の鏡が掛けられてあるやうで、良心の呵責は暫しも止む隙はない。殊に汝は、お澤を惨殺した大罪人であるといふやうな、嘲ける如く、罵る如く、責る如き叫び聲が、何處からか、又しても、耳根に鳴り響くやうで、寢てゐても、何だか、寢床の中から投げ出されさう。枕も飛んで了ひさうで。思へば、天涯地角、ほとゝ身を容るゝ處もない。夢か、幻か、オ、お澤が、自分を手招きしてゐるではないか。扉の助は岸波と刎ね起きて寢床の上へ正坐つて、眼を瞑つて、左右の手で胸を十文字に抱き、祈るが如く自づと頭を垂れた。廿日過ぎの月影が青白く、窓蔽の際から玻璃窓を通して、ぼつと、

瘦細つた頸筋へ射しかゝつた。上帝の審判の座で現世の罪人が罪を俟つてゐるかのやう。

(七十一)

何うして吾家を脱けて出たのか、何時の間に、此處まで辿つて來たのか、庸之助は今、永代橋の下手の大川端に、茫然と影の如く佇立んで、考へ込んでゐるのであつた。

下弦の月は斜めに、大川の水の流に碎けてそこら一面、水銀の海のやう、向河岸の彼方此方漁船の燈火が夢の如く、ぼんやりと瞬いて、淡霧の中に、巨な墓や、倉庫の白壁や、高い塔などが、宛ら屋氣樓の畫のやうに浮んでゐる。天籟、人籟、全く鳴を沈めた小夜中に、水蒸氣を含んだ、重くろしい空氣が濕々と肌に降つて、魔の手で、斯う撫でられでもするやう、不思議とするのである。

天地創造の時は斯うでもあつたらうか。流石の大都會、今は全く眼に落ちて、其處に醜惡なる人間の聲は絶えて聞えない。唯もう咬々たる天上の月の光と、滔々たる水の流れの、盡きせず、磨せず、絶えせざる永劫の相を示してゐるのみである——と思ふと、何んだか祟高い、神聖な感が骨の髓に浸入るやうであるが、一念、自分の身の、罪惡の塊であるといふ事に思ひ

至れば、忽ち、今は正に世界滅亡の時で、此の寂寥、此の幽靜は、人類が全く葬り去られた大なる墓場のそれであるかのやうな氣がしてなぬ。自分は最も罪惡の深く且大なる惡魔の王であるから、それで最も終まで取殘されて、最も嚴酷なる罰を受けるのであらうと、斯う考へ來つては胸が張裂けるやうで、不思議邊が見返るゝのであつた。

永代橋の上を車輪の音が響いた。默想の夢は忽ち破れて、その方を見返ると、提灯が一つ西から東へと渡つて行く、自分を追駈けて來たのではなからうか、自分を探し廻るのではないかと知らと、左様思へば如何にもそのやうに思ひ做されて何だか斯う居心地がせぬ。小急いで、其處邊の水際近く下り立つて、やがて杭に繋附けてあつた一般の小舟の纜を解いた。

舟はやがて水の行方に従つて、漸く下流の方へ流れて行く。水銀の海の上へ、颯と一條の痕を残して、長々と末廣がりに姿は見えぬ龍女が、銀の裳を曳くかの様。參差たる兩岸の人家は、何だか白く塗られた墳墓の様にも見られて、汀の杭にヒシと舳先を並べて幾十艘繋ぎ捨てられた漁船の中に、一つ目に立つ小形の帆前船の、高く抽出した櫓柱の頭に、丁度、紫

の星が薄く濃く輝いてゐた。鵬がぱたぱたと、雪のやうな眞白な翼を打つて、近く頭上を掠め右から左へ、又左から右へ輪を描いて舞うてやがて傍の小舟の篷の上に留つた。

暫らく、船端に打伏つて、何れ彼も一切忘れて了はうと勉めて見たが、左様思へば思ふ程猶彌増にいろ／＼な妄念妄想が湧き上つて來て、堪へられぬ胸中の煩悶、唯もう掻き撚つて捨てたいやう。自分は今何處に行くのであらうか、このまゝ冥府の世界へ流れ込むのではなからうかと、ふと氣が附けば、波の音が甚く高まつて、船が揺れてゐる心地。眼を上げて見ると、何時しか、此所は早河口で、漫々たる水が遠く廣く海へ續いてゐて、その果の、一刷毛横に曳いた露の上に、房總の山か、雲の影か、ぼつかり夢の如く浮んでゐる。月の光は波上一面に銀鱗を散らしたやう。

舟がほと／＼動かなくなつたので、庸之助は櫓を立て、試みに押して見た。漂ひつゝも徐徐と浪を亂して五間十間、やがては大海の中へと漕ぎ出した。陸の人家は次第々々に霞んで來て、幻の中に消え込んで行く。

庸之助は今端然と舟の中央に坐して、手を擧げて靜に祈つて見た。併し何うもその祈が、神

様の御座に達するやうにも思はれぬので、ホツと絶望の吐息を洩らして、力なげに、舷から見下した。蒼黒い浪が忌に物凄く光つて、うねうねと何だか毒蛇の群の千萬疋、舟を圍んで絡み付き纏ひ付き、今にも這ひ上らうとするやうで、一思ひに飛び込まうとしても、何うも脚が立たなかつた。

ばた／＼と頭上を蹴るやうに掠めて行くものがあつた。驚いて振仰ぐと、白い、一團の雲のやうな天使の姿。その中に、惠美耶の傍がありありと現はれて次第に小さく、遠く、彼の紫の星を目覚めて飛び去つた。月が冴えて、今、満天清く澄み切つてゐる。

(七十二)

上野の森の下蔭ほの暗く黄昏れて、月は未だ昇らぬ途程の時、どんよりとした灰色の空にはあるかなきかの星が、三つ四つ二つ、瞬いて、早鳥の鳴き聲も止んだ。軌道に沿つて、一人の男が、物思ひに沈んだやうに頭俯垂れつゝ、とぼとぼと、喪家の犬の如く歩んでゐる。それは彼の庸之助であつた。

庸之助は、昨宵、海の上で死損つて、茫然と氣拔けたやうに、一日そこらを漫歩してゐたが、今又、死所を此處に求めるべく來つたので。

彼の眼の先には、絶えず斯うさま／＼の顔形がちらついてゐて、何んだか暗くなつて了ふやうだが、併し分別は附かない、悲しいとか、氣遣はしいとか、胸が押潰されさうだとかいふ境は早通り越して、唯もう、無茶苦茶に死んで。少しは精神に異状を呈してゐるのであらう、否、寧ろ、知覺を失つたのかも知れない。

「オイ、危ねえよ、今に汽車が行つて來るんだから……」と、突如に喚かれて、ぽかんとして振り返つて見る。丁度、踏切番の老爺が、灰色に汚れた旗を捲いて、柵へ凭れ掛つてゐたので。

柵はず、沈黙つて、又のこ／＼歩み出した。

「コラッ、危ねえつて云ふに、鈍馬め、最つと傍へ寄つて行くんだ。」と囁み付くやうに怒鳴る。庸之助は相不變黙込んで、返事もせず、少し左手へ避けて行く。「命不知奴ッ」間拔め……と、後ではいきりに罵つてゐる。

振向きもしないで丁度其處の山際を曲つた時、藪々と地響がして、汽笛一聲、帛を裂くやうに上野の森に鳴り響いた。

つと、軌道の中央に歩み出る。眞向へ、眞横な兩眼を睜いた大怪物が藪々と凄まじい響を立てながら、小き輪轉に向つて一直線に迫つて來る。大足か、毒蛇か、地獄から我を迎

ひの魔の使ひか。この時、天地は早、闇の幕で限取られてゐた。

骨も餘さず碎けて飛んで、罪の肉塊は今此世から烟のやうに消え失せて行くのであるかと思へば、何となう心安く、又何處か疎くして凄いやうな。庸之助は確と、胸を抱き緊めて、軌道の中央に石像の如く突立つて、閃めくやうな眼光の凝然と、近づき來る汽車を睨み詰めて、冷かに笑んだ。

一秒時……一秒時……眞紅な兩眼は次第に、怒に燃ゆるが如く、鮮になつて甘間……、十間……、轟然たる鐵輪の響は耳を聳し、總身に應へてそのまゝ捲込まうやう。すはやと思ふ刹那、非常汽笛が血を吐くやうな音を立て、空氣を振はせた、天から降あつて、自分を大叱咤したるものの如く思ひ、踏踏と庸之助、不覺軌道の外へ倒れた、其瞬間、風を切る地響の音、誰か黒る聲、轟々たる車輪の唸りは、耳を押潰すかのやう、幾多の窓口から漏るゝ電燈の影を、夢の如く左右の地上に印しつゝ、颯と疾風よりも早く、汽車は過ぎ去つて了つた。

星の薄明で透して見れば、斑々たる鮮血であらう、黒い、泥々した泉のやうなものが一ぱい邊へ溢れ、肉や骨が微塵に碎けて飛んでゐるらし

い。血生臭い臭がして、早胸が悪いやうだ。庸之助は今、もう自分は肉體を離れ、靈魂となつて、自分の罪の死骸を見下してゐるのだと思つて、如何にも淺猿しい死様であつたと、今更悔むのである。

汽笛が丁度上野の森に鳴り響いた。

(七十三)

漸く我に返つて、自分は未だ死んでゐないのだと氣が附いた時に、庸之助は謂不知胸の安きを覺えて、ホツと肩から出るやうな吐息を吐いたが、さてもこの無慘の死を遂げた人は誰であらう、何んな罪を犯したのであらう、男か女か、覺悟の自殺か、それとも誤つて轢死したのか知らないと、いろいろな事を考へてゐると、角燈の火影が、此方へ向いて走つて来る。二つ三つ、暗中を流るゝ星のやうだ。

庸之助は急に何だか恐ろしくなつて、周章で橋の外へ駆け出してつた。

薄暗い、細長い町を足も空に通じ抜けて、やがて、本通へ出掛くと、其處は十字街頭で、丁度、鐵道馬車が二輛、左右から人力車が混雜合つて、動かないでゐた。向角の牛肉店の電氣燈、此方の軒の瓦斯燈の光で、街は白晝のやうに明る。自分は顔を見られぬやうに、俯向いて、小急い

で車と車との間を駈抜けようとした途端、

「ヤア、庸さんか、何うしたんだね。」

と思掛なく車上から聲を懸けられて、吃驚しながら、恐るゝ見上れば、その人は田島保衛であつた。

「ハア……」とばかり、行詰つて言ひが出ない。願れば、身は、寝巻着のまゝであるのだ。

「家妻も大そう君の事を心配してたつて……何處へ行つたんだね。」と、マニラを煙らしながら保衛は機揚に云つた。

「ハイ……その……」

「馬宮君か……ヤア失敬。」と高調子な聲。見れば後の車上のは中岡であつた。麥酒ホールで

早一壺を傾けたのであらう、顔の色艶が異つて、ニヤリ／＼笑んでゐる。

「マア兎に角、早く歸り給へ。」と、保衛は早口に云つて、マニラの先の、灰になつた處を

摘み落した。漸く馬車が動出して、俥は際かさず、後前懸聲をしながら、二輛とも早、駆け出してつた。

果然と、後影を見送つて、庸之助は暫し木偶

のやうに佇立んでゐたが、「べらんめえ」と俥

屋に衝突を喰はされて、始めて氣が附いて、そのまゝ居所の羊の情々と、横手の薄暗い町へ折

れて行つた。

今の二人は、恐らく俥を北廓へ飛ばして、浮世の歡樂を買ひに行くのであらう。思へばこれも人間の一生、随分氣樂に遣つて見ないも損だ。

自分あまり眞面目に、あまり堅苦しい考へ過して、こんな境界に陥つたんだもの、寧ろ下ら

ぬ、四角張つた信仰だとか義理だとかいふものは、綺麗さつぱり廢止してつて、これからは面白可笑しく命長う生き延びて見ようか。

併し、今の我身は、そんな氣樂な、浮世の事を思ふ餘格はない筈、唯如何にして死ぬべきか、生命を絶つ手段を考へてゐるのではないが、馬

鹿馬鹿しい、夢の世界に、夢の歡樂、何を苦んでか、そんなものを求めようぞ。人生は兒戲だ。浮世は暫し現れて忽ち消えてゆく霧のやうなものではないか。

だが、その死ぬるに就ては、天晴男子らしい死んで見たくもある。山の靈を汚すか罵るか罵る者は罵れ、富士一萬四千尺の絶巔に攀ち上つて、吹き下す天風に衣を拂ひ、朝暎に彩

られて金色濃く雲の中へ、飄然と飛び下りたら何んなに愉快だらうか。海の靈を犯すと嘲けるか、嘲ける者は嘲けれよ。太平洋上の月芽えて

萬里水と天と相連るの夜、檣柱の頭で高く讀

美歌を誦して、そのまゝ身を真逆さまに、雪山類るゝが如き大浪の底に消え込んだら、何んなに愉快だらうか。然らざれば浅間山嶺の紅連大紅連と燃え上る噴火口に身を投じて、生ながら天の火葬を受けよう。然らざれば那智の大瀑布の上流へ跳り入つて、百丈の懸崖に暫し人間の生血を流さう。

折ふし、ふと遠音に響く音楽の音、庸之助は忘想の夢から半ば醒めて、聞くとともに立留まつて耳を欬てゐると、微かに妙なオルガンの響、つゞいて、優しい、美しい讃美歌の聲、體がジンとして何だか骨の髄に浸み入るやうだ。

(七十四)

庸之助は、唯もう引附けらるゝやうで我不知その歌の聲する方へ近附いて行つた。微妙なオルガンの響に合して、清い、美しい、神々しい歌ひ聲が、深く、深く、胸の底へ沁み渡つて、神より受けたまゝの八面玲瓏罪無く、汚無き靈魂を微すかに呼び醒して來るかのやう。何となう懐かしい、慕はしい又慰められるやうな、醉はされるやうな心地がして、つい早足になつて、其處の街角を曲つて行くと、直ぐ傍に、護謨の樹が、白壁に映らうてゐる教會堂の、玻璃窓からあかあ

かと燈火の影が外へ漏れて、神の榮光が輝けるが如きを見るより、足は大地に吸附けられたやうに、そのまゝ其處へ立竄んで了つた。

讃美歌は今、當にその一節を了つて、司會者の祈禱が始まつた様子。莊重な、嚴肅な語氣が途切れ／＼に洩れ聞えて來ると、庸之助は何んだか、首筋へ氷の刃でも擬せられたやうに、凍として、そぞろ身の寒さを覺えた。

つい、中へ入つて見たいやうな氣もするし、又何んだか進まぬやうでもあるし、思案しながら、浮々と、一段、二段、やがては五六の石階を登り盡して、我不知、會堂の玄關口へ立つた時、「何卒お上り……」と、親切に案内するものがあつた。

ハツと思つて、眼を遣れば、信者の一人であらう、「何卒、お上り……」と極めて優しく、又丁寧に云つてくれるのであつた。

今は早、辭むにも辭まねずなつて、案内されるまゝ堂内へ上り、一番最後の長椅子の片隅へ小くなつて腰を卸した。善男善女、會衆は堂内に充溢れてゐる。庸之助は何んだか顔を見らるやうで、眼を深く襟元に埋め、呢と俯向き込んでゐた。

嘗ては聖壇に立つて、人々を導くべく許々

乎として説教を試みたものが、今は却て座の片隅に縮込んで、他の説教を聴くといふ。移れば變る世の習とは云ひながら、あまりの事に、自ら耳熱する思ひであつた。

頭の赤けた老牧師は今音吐朗々、路加傳第十六章、第三節を読み始めた。

若し兄弟、爾に罪を犯さば之を諫めよ。

彼若し悔なば免せ。若し一日に七次罪を爾に犯して、一日に七次、爾に對し、吾悔ゆと曰ば免すべし。

又、馬太傳第十八章第廿一節、厥時ペテロイエスに來りて曰けるは、主よ幾次まで我兄弟の我に罪を犯すを赦すべき乎。七次まで乎。イエス彼に曰けるは、爾に七次とは曰じ、七次を七十倍せよ。

誦したつて、暖い暖い、さて、人の罪を赦すといふ事に就いて、許々と説き出したのである。

老牧師は最も熱心に、人間の弱くして、罪惡の淵より免れ出づる事の難いといふ事、天下に到底、一人の義人も無いといふ事、信者は未信者に對して毫も輕蔑するやうな舉動があつてはならぬ事、人の犯した罪は、その人が眞に中心から悔改めて來さへすれば、百度でも千度でも赦してやらねばならぬ事等を、丁寧に、親切に、

又熱心に説き來り説き去るのであつた。
 庸之助は、ひし／＼とそれが一々胸に應へて、七度七十倍せよとの基督の、愛の深い、情に富んだ難いお言葉を繰返し／＼、口の中で黙讀した。何だか、あの短い語句の間に千萬無量の意味が罩つてゐるやうで、それが殊更に、自分へ向つての御諭戒のやうにも思ふされ、やがては、謂知らず、感謝の涙も浮ぶ。

「サタナは亡ぬ、民よ、喜べ……」の悲壯な讚美歌の一節で、この會が散じて庸之助も人波に揉まれながら會堂の入口の石段を降りて行つたが、この時、胸の底には、希望の微光が閃いてゐた。足は我が家の方に向つて急ぐがやう。

(七十五)

門の戸に手を懸けた時は、流石に指頭が顫へた。中庭へ入つて見ると、自分の居室としてある間の玻璃戸に赫々と烽火が射して、白い窓蔽に人の影法師が映つてゐる。何うしたのか知らず、つい、忍び足で窺ひ寄る。月が冴えて、丁度後手の會堂の、旗竿の上に斜であつた。

話聲がするので、耳を敏く聞いてゐると、何だかそれは祈の聲のやうである。惠美耶であらうと思つてゐる中、それが了つて、續いて祈のは、慥に父である。「庸之助の身の上の恙なきや

う何卒、早く歸宅してくれませう……アームン。」と顫へた聲。何だかそれが身節に沁み入る心地、併し父は慥めて信者になつたのであらうか、と思ひ議にも思はれる、涙も浸む。その次に祈るは、慥かに母の聲音、母も亦、信者になつたのか知ら、信仰の心が起つたのか知らと、愈々不思議な氣持。聴けば微かに、「何卒あの子が……神様、何卒、あの子が……」と後は涙に埋れて了つた。

「神さま……何卒お父さんをお助け下さいませ。」と、あどけない涙含んだ鼻聲で祈りかけて何だか咽び入つて了つたやうなのは、お卷であらう。庸之助は唯もう、胸先へ火でも附られたやう。今、満身の血は一時に炎々と燃え立つ思ひで、我にもあらず、玄關口から飛鳥の如く駆け上つて、遮二無二室の戸を引開けた。

門口の戸の開いた音も、何も彼も、前後一切夢中になつて知らずにゐた一座、驚いて見上げると、庸之助が、蒼蒼になつて、其處に突立つてゐるので、暫しは夢かとばかり呆れ惑うた。植木監督も、一座の中に交つてゐたので。

「まア……」と悲喜交々至つた聲が一齊に發せられた時に、早、庸之助の體は、父と、母と、姉と、妻と、娘とに、四方八方から絡み附かれ、

抱き附かれて、床の上に押据ゑらるゝばかりであつた。
 「済みません……済みません……」と、涙ながらに謝する聲は、一同の啜り泣の音に没せられて了つた。

「實に心配したです、今朝から祈禱會を開いて君の無事を神様に祈つてゐたのです。君、悔改の前に、罪はないぢやありませんか、君にも似合ない事だ。」と、植木監督は、雪の如き白髪を捻りながら威嚴ある、而も慈悲深い面地で云つた。

「實に……實に済みませんでした……併しもう御安心下さいませ。」と、乾張とした口調。庸之助の面は今、日の如く、希望の光で輝いてゐた。

「それならば、難い……殊に君、喜び給へ、君の一家は今日皆救はれて、主の御名に入られたよ。」

「エ、左様でしたか……實に、神様に感謝する外はありません」と、清い涙をはら／＼と垂れた、その時、庸之助は、懷には惠太郎、片手ではお卷を抱いて妻の惠美耶の温い唇に、その片頬を任せてゐたので。

年譜

明治十年

五月十五日、石見國津和野町大字後田に生まる、幼名は常治と稱す、父は唯治、母はたみ、家は小商賈を業とす。祖父吉藏、祖母たきは、實子なく、養嗣子夫妻が始めて子を擧げたるを喜び、愛鞠措かず。

明治十五年

津和野、殿町、小學校に入る。

明治二十三年

津和野町立高等尋常小學校を卒業、山口町の山口學校に入る。小學在學中、坂下門の志士にして碩儒たる椋木潛翁を師とし、漢籍を學ぶ。又、この間、祖父の努力に依り、家屋は新築せられ、旅宿業營まる。

明治二十四年

山口高等學校入學試験準備のため、山口學校より轉じて鴻城義塾に入る。入學試験は準備不足のため失敗し、九月、祖父は傳染病に罹りて歿し、十月、更に父を病に喪ふ、これより境遇逆轉す。常治を亡祖父の名吉藏に

改む、されど自ら家業に當るを厭ふ、母獨り奮闘して市上行商し、一家を支ふ。

明治二十五年

靜岡市の公證人千坂氏の役場に筆生として赴く。餘暇に法學院講義録その他の法律書を讀み、この方面に立身の志を起す。

明治二十七年

胃病より遂に脚氣症に罹り、靜岡を辭して歸國の途に上る。

明治二十八年

家に閉居して書讀めたる浪六張、又は派香張等の幾部の原稿を携へて、大阪に上る。一友人、右の原稿の一を書肆殿々堂に持込んで刊行を求め、拒絶せらる。旅費盡きんとす、大阪爲替貯金管理所の書記補試験を受けて登第、月俸七圓。又川口メソヂスト教會に通ひ、米國宣教師ウーターに受洗。この秋、妹かつ、郷里に病歿。同じ役所に在勤せる高須梅溪、及び、商店奉公の小林、その他の人々と博文館發行少年

文集』の投書關係より相知り、遂に關西青年文學會を起し、雜誌よしあしく刊行。

明治三十二年

上京、先きに再三文通したる廣津柳浪氏を訪ひ、子見和郎君等の家庭教師を兼ね、玄關に住込む、同時に早稻田專門學校英文學哲學科に通學。坪内逍遙博士を始め、高山樗牛、島村抱月氏等の講義を聞く。

明治三十四年

「大阪毎日新聞」懸賞小説に應募して創作せし小説『無花果』第一位に當選、選者は坪内逍遙、尾崎紅葉、幸田露伴の三氏、賞金三百圓を受く。『無花果』は金尾文淵堂刊行。又伊井、河合一派により、中洲眞砂座に上演せられて好評を博す。

明治三十六年

改稱、早稻田大學卒業。後藤宙外氏主宰の春陽堂發行、新小説に聘せられて小説寄稿の約を結び、數篇を發表。冬、お茶の水の女子高等師範學校音樂講師安井孝子と結婚。

明治三十八年

祖母を郷里に喪ふ、哀傷深し。

明治三十九年

本郷教會の海老名正氏主宰「新人」に執筆、同人には内ヶ崎作三郎、吉野作造諸氏あり。

六月、アメリカに渡航、桑港の日本新聞社に暫時逗留。新學期より、東部に赴き、プリンス頓大學院英文學科に入る。

ステキルナー、ニイチエ等を耽讀して、近代的懷疑に陥り、反基督教精神に燃え来る。ニューヨークに出てナヂモワ夫人の「人形の家」の實演を見、イブセン劇に傾倒し始む。

明治四十年

プリンス頓大學院の修業了へ、ニューヨーク市に移り、コロンビヤ大學にブランダー・マシウス教授の演劇史講義を聞く。

當時、學資の送金絶え、雜誌「大西洋」社に入りて編輯に當る。

明治四十一年

ニューヨークを去つて英國に向ひ、ロンドン市に入る。バーナード・ショウ氏と會見。

約一ヶ月の後、獨逸ベルリン市に赴く、日本クラブの東勝熊氏の斡旋により、滞留して専ら演劇研究に従事す。

明治四十二年

秋、ミュンヘンより瑞西に入り、アルプス觀

光の後バリーに遊び、キヨルンを経てベルリンに歸る。十二月、ベルリンを出發、シベリヤ鐵道によりて歸朝。十七日敦賀に着す。

明治四十三年

「東京朝日新聞」に、社會劇「牧師の家」を發表、連載。雅號「春雨」を廢して、實名を用ゆ。この戯曲は新社會劇團により東京座に初演、新聞方面の反響は盛んなりしも、觀客は數十人に達せざる日多し。一座は次いで大阪、京都の大劇場を巡演す。

早稻田大學講師としてイブセン劇の講座を受持つ。又「東京朝日新聞」の劇評擔任。

明治四十四年

坪内博士の文藝協會は、イブセン劇「人形の家」の上演を企て、島村抱月氏の依頼を受けて、共に演出の任に當る。松井須磨子のノラ、世評高し。

『最近歐米劇壇』を博文館より刊行。

大正二年

文藝協會動搖、島村抱月氏が松井須磨子を擁して藝術座を組織するや、これに参加して協力せん事を求められ、舞臺監督として立つ事に決す。この一座に澤田正二郎等あり。『サロメ』を翻譯。藝術座は帝國女優劇に加入

して、これを上演。

大正三年

藝術座の事業に努力する傍ら、戯曲創作の筆を取り、「中央公論」に社會劇「剃刀」を發表。藝術座はこれを帝國の秋季公演に初演、反響あり。爾後、レパトリーに加へらる。

新著「イブセン 評傳 實業之日本」より刊行。

大正四年

「太陽」に社會劇「飯」を發表、藝術座のレパトリーに加へらる。

創作集「新社會劇」を南北社より刊行。

大正五年

長篇社會劇「眞人間」を發表、大阪、及び東京の藝術座公演に上場す。

社會劇「爆發」を「中央公論」に發表、藝術座の帝國秋季公演に上場す。

「眞人間」を新潮社より刊行。

大正六年

四月、急性肺炎に罹り一時重症に陥る。漸く回復の兆あり、茅ヶ崎に轉地療養。秋、冷の季節に入つて東京に歸る。

藝術座との直接關係を離れ、又早稻田大學講師を辭し、専ら創作生活に入らんとし、年末より戯曲「淀屋辰五郎」に着手、翌春、

脱稿して『早稲田文學』誌上に發表。又イブセン劇『ブランド』を翻譯、刊行す。

大正七年

創作戯曲『白隠和尚』、松本幸四郎等に依り、帝劇女優劇に上演。

又『幀子ピン』、藝術座秋季公演に上場さる。

十一月、島村抱月氏流行感冒にかゝり、俄かに逝去す。藝術座の善後策の爲め再起す。出版畫肆天祐社の顧問として盡力す。

大正八年

一月、藝術座の有樂座公演中、松井須磨子の縊死事件突發、藝術座解散。

大正九年

史劇『井伊大老の死』を『早稲田文學』誌上に發表、松竹合名會社は市川左團次一座によつてこれを上演せんとす、井伊大老反對派の妨害運動起る、世論沸騰喧嘩を極む、七月つひに歌舞伎座に初演。

又岩野泡鳴、菊池寛等と協力して劇作家協會を成立せしむ。

『淀屋辰五郎』、勘彌の文藝座、帝劇に初演。

イブセン會の組織成る。

大正十年

史劇『大鹽平八郎』を『新小説』に發表、刊行。

大正十一年

戯曲『錢屋五兵衛父子』を『改造』に發表、ついで同社より刊行。

弟安治郎を東京大學病院に喪ふ。

創作戯曲『地震』、尾上菊五郎に依つて、市村座に初演、好評あり。

大正十二年

小宮未明、秋田雨雀氏等と共に、『三人の會』に於て、プロレタリア文學運動者のグループより祝辭を受く。

大地震後、創作より轉じて一時學究生活に入らんとする。志動く、しかも、劇壇復興の以外に速かなるに促されて、つひに創作の筆を抛つに及ばず。

大正十三年

『現代戯曲全集』二十卷の編輯に當る。

戯曲『原始時代』牛と闘ふ男等發表、後者は澤田正二郎の新國劇に初演、世評あり。

大正十四年

戯曲『無籍者』、澤田正二郎一座の新國劇に依り邦樂座に初演さる。又文藝座の守田勘彌に依て史劇『錢屋五兵衛父子』は帝劇に、新國劇の澤田正二郎一座に依て史劇『大鹽平八郎』は新橋演舞場に初演。

大正十五年

澤田正二郎の新國劇に依て『井伊大老の死』帝國劇場に再演。築地小劇場は小山内薫氏の演出により『大鹽平八郎』を上場。

社會劇『道化役者』を『改造』に發表、新國劇に依て帝劇に初演アルスより刊行。

英譯『井伊大老の死』、ジャパン、タイムス社より刊行。

昭和二年

『獅子に喰はれた女』、帝劇女優劇に初演。

戯曲『星亨』を『改造』に發表。

新國劇創立十周年記念として『星亨』、新橋演舞場に初演、反響高く、更に帝劇に再演。

昭和三年

喜劇『鬼ヶ島から來た男』を『改造』に發表、新國劇はこれを帝劇に初演、又實業國民座にも上演さる。

『吉藏戯曲集』春陽堂より刊行。

再び早稲田大學講師となり、近代劇ギリシャ劇史を講ず。

イブセン會より雜誌『演劇研究』刊行。

『剃刀』英譯されて『スリー、モダン、ヂャパニス、ブレー』に收められて、アメリカ、ステウワード、キッド社より刊行さる。

大正十五年

澤田正二郎の新國劇に依て『井伊大老の死』帝國劇場に再演。築地小劇場は小山内薫氏の演出により『大鹽平八郎』を上場。

社會劇『道化役者』を『改造』に發表、新國劇に依て帝劇に初演アルスより刊行。

英譯『井伊大老の死』、ジャパン、タイムス社より刊行。

昭和二年

『獅子に喰はれた女』、帝劇女優劇に初演。

戯曲『星亨』を『改造』に發表。

新國劇創立十周年記念として『星亨』、新橋演舞場に初演、反響高く、更に帝劇に再演。

昭和三年

喜劇『鬼ヶ島から來た男』を『改造』に發表、新國劇はこれを帝劇に初演、又實業國民座にも上演さる。

『吉藏戯曲集』春陽堂より刊行。